

（凡 例）

観世新九郎家文庫目録（上）

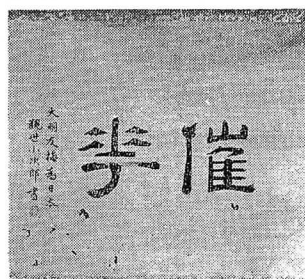
▼「観世新九郎家文庫」は、北海道千歳市の服部康治氏が昭和50年6月15日付で法政大学能楽研究所に寄託された、小鼓観世家伝来文書の総称である。寄託時の概算で約五百点に及ぶ同文庫の、解題付き分類目録が本稿で、紙数の関係上、上・下の二部に分けて掲載する。

▼分類の方針は、「一、道具類」と「二、軸物・卷子・短冊の類」と、貴重文書の多い「三、慶長以前の古文書」との三種をまず別目に立て、残る文書は、冊子本形態のものと書付類とに大別し、冊子本・書付類を内容に応じて細分し、四以下に並べることにした。（下）に廻したのは、冊子本のうちの「八、実技関係手付類（冊子本その五）」と、書付類である。

▼冊子本に書付類が挟み込まれているような場合は、その書付の性質に応じて、あるいは冊子本に続けて（a）（b）（c）の記号を冠して並べたり、分離して書付類に加えたりした。書付類と一括されている冊子本を書付類の項に並べた場合もある。

▼解題はその文書の性質に応じて伸縮し、文書名を掲出するのみで留めた場合もある。『』で囲んだ書名は該本の題簽等に明記されている書名であり、「」で囲んだ分は、仮称を付したり、本文中の記事を書名に転用したりした分である。文書の大きさはミリ単位で示すことを原則とし、282×213などの形で縦・横の長さを記した。同じ観世新九郎家文庫の他文書を、節目番号と列挙番号を組み合わせた「五八」などの形で示した。

▼目録と解題の作成は、他所員の協力を得つつ、表章が主として担当した。



二1 「催花」額

一道具類

1 紫調小鼓 一個

桜花時絵。銘なし。調べ緒は紫色。両皮(使用不能)を添えて小鼓。観世流独特の円筒形ケース(茶色地紋織出しの布製)に収める。胴はかなりの名品の由。紫調は鼓名人に將軍から使用許可が与えられる慣習だったもの(二二等参照)。

2 黒式尉面 一枚

近世の作。鼻部に鼠害がある。

3 扇子 一本

金砂子散らし地に彩色高砂舞台図を刷る。裏に「改名御披露 大正三年秋 観世真弘(朱印)」と刷る。観世真弘はシテ方観世流23世清康の弟、現25世元正の祖父で、旧名は鑑次郎。

二 軸物・卷子・短冊の類

1 明人友梅筆「催花」額 一軸

軸の長さ110cm。本体は385×320。横に「催花」「花」は象形文字の二字を大書し、落款に「大明友梅為日本／観世小次郎書(朱印「友」)」とある。『四座役者目録』に観世小次郎信光の名声を聞いて友梅なる明人が書いて贈ったと言う書。それには額とあり、もと額装だったものか。友梅については不明。「催花」の語は玄宗皇帝の故事に基づき、ここの小次郎は孫の元頼では

なく、信光に相違あるまい。

2 宮増弥左衛門親賢画像(英甫永雄讃) 一軸

軸の長さ145cm。本体は595×255。侍烏帽子・長袴・小刀姿で赤銅色の鼓桶に腰かけて小鼓を打つ役者像を画き、上部に「諫帝堯耶催杏英／滅宮増角以名鳴／自然天鼓畫圖裡／眼聽都曇答臘声／右宮増弥左衛門親賢真讃／前南禅英甫永雄」と讃がある。軸裏下部に絵と當代と思われる古い貼紙があり、「此一幅宮増弥左衛門親賢／法名高波月鼓畫像也／窪田日向守統泰絵之／敦賀屋四郎衛門感得之」とある。親賢は弘治二年(一五五六)歿。窪田統泰は天文十一年頃の絵師で、藤兵衛尉とも称し、謡本二百番を所持していた。敦賀屋は親賢の弟子であろう。讃を書いた英甫永雄(文人として名高い雄長老)は天正十四年(一五八六)以後建仁寺に住した。「前南禅」とあるからそれ以前の筆と見られ、現存する能役者の画像としては最古のものであろう。

(a) 宮増親賢画像讃点注 一通

前巻に巻き込まれていた文書。末に「右讃詞ノ点註ハ建仁寺伯西堂ノ被遊ル也。讀ハ細川幽斎ノ弟雄長老也」とある。

3 近衛前久筆豊次夢想和歌 一軸

120×64cmの大軸。本体は390×522。「観・世・彦・衛・門」の五字を四方と中央に配し、その間に小字で「を」とかきつゝみのやまをひこ右衛門たのしき御代とならすめてたさ」の歌を散らして書き、「右夢想為豊次叨走禿筆訖 三月日(花押)」と奥書がある。花押は近衛前久(竜山)のもの。豊次が春日明神(または北野天神)の靈夢によって感得した歌を近衛前久に書いて

もらった掛物の由、家伝諸記録に見える。豊次は天正十三年歿。近衛前久は慶長十七年歿。表装に用いている青緑地の布は秀吉から拝領した羽織の転用である由、二二に言う。

4 御筆短冊 一軸

軸の長さ145cm。朱地金泥絵入りの短冊に「吾宿の花見かてらにくる人ハ散なむ後はこひしかるべき」の歌を書くのみで、署名は無い。金で「御筆」と書いた黒塗りの箱に収め、その箱を紺地に葵紋と鱗模様を織出した布張りの帙で囲む。徳川將軍家の誰かの書いた短冊として伝えられていたものらしく、服部小錦治の書画目録に家康筆としているのが本軸らしい。古くから新九郎家に伝来していた形跡がない。

5 林道春筆短冊 一枚

薄紫色。「太公一起鬢霜侵三顧頻諸葛／心此道並行不相悖芦花風月 林道春(印)」。七言詩の末三字に自己の名を持って来た作らしい。袋紙に「林羅山先生筆」とある。

6 鷹司政通筆短冊 一枚

金銀泥雲模様刷りの薄い斐紙を短冊大に切ったものに「山露ひさかたの天の芳山あさつく日／霞たなひき春やたつらむ 政通」とある。包紙の表に「摂政関白太政大臣政通公短冊 服部家室」とあるのは小錦治の筆。裏に朱で「豊照京都へ御使に罷出候節拝領」とある。豊照は文政九年歿。鷹司政通は天保以後永く摂政を勤め、明治元年歿。

7 松浦乾斎書状額 一面

17×103cmの書状を額装に仕立てたもので、24×119cm。文面「一

筆申入候 愈無事被相勤候事と珍重候 先年於千住離別之後者打絶御疎瀆申候 拙者例之宿病兎角不相治 加病も有之 遂ニ国隠居と申ニ相成 奉恐入候義 乍去願之通隠居家督被仰付 右御礼も無滞申上 惣髪改名迄も伺之通相済 万端無残所相整候段致安堵候 就而者為祝物輕少ニ候得共掛物老箱進入之候 祝納も候ハバ大慶存候 頃日も不相替下屋敷江被參候哉 遠界ニ而者模様も相分り不申 彼是存遣候而已ニ候 老父事も次第ニ高年ニ相成候間何卒不相変御心付被下候様頼入存候 色々申入度候得共兎角頭惱執筆不任心 萬緒申残候 以上 五月十四日 乾斎 照(草名) 〇〇新九郎殿 猶々兼而懇意之同列衆へ存出候ハバ宣敷伝声頼入候 呉々も是迄格別ニ世話ニ相成候 積挨拶正ニ申入候 以上。観世流小鼓を嗜んでいた肥前松浦藩主の熙(静山の子)は天保十二年閏正月五日に病を理由に隠居した。その直後の書状であらう。

8 寛永十八年林道春奥書観世小次郎信光画像讃 一卷

高さ245の卷子本。青色布表紙。題簽なし。料紙中葉交漉紙。長さ約370cm。「道春之手跡」と墨書ある箱入り。冒頭に「観世小次郎画像」と題し、その全文を書写して返点・送り仮名・朱引を施す。末に「観世小次郎信光贊詞者／釐下相国禅寺長老宜竹／周麟所撰述而載之於／翰林葫蘆集方今依／観世左近大夫重成之／所乞而不克峻拒遂写／之以投贈焉／ 寛永十八年季秋廿三日／夕顔菴道春／(朱印「羅山」)(夕顔〇〇)」と奥書があり、その後服部氏から信光までの釣書がある。奥書のみが道春の筆と認められる。観世大夫家から譲られたものか。

9 寛永二十年観世彦三郎元貞筆信光画像讃 一卷

未装卷子本。高さ181。料紙斐格交漉紙。8を朱点まで忠実に模写したもので、末の奥書に「右正本者前在通道春今観世左近大夫諸侍系図改之刻此事見出書アタへ則服部之系図録見ヘタリ信光自讃之事故予所望シテ少茂不残書写者也 寛永式拾癸未年 三月廿二日 観世彦三郎元貞(花押) 武州江都ニテ」とある。観世彦三郎は親世座大鼓方。正保二年35歳歿。

10 寛永二十年観世勝右衛門元信筆信光画像讃 一卷

未装卷子本。高さ180。料紙斐格交漉紙。前本と同じく8の模写であるが、8から直接の臨模ではなく、前本に基づいているらしい。末の奥書に「這書者寛永十八年諸侍系図改之刻当観世左近大夫重成ニ道春書写遣 右小次郎權守信光者予依為先祖書写置者也 寛永廿癸未年 十月十七日 観世勝右衛門元信(花押)」とある。包紙には「信光讀」と題する。

11 延宝元年林春齋識「小鼓紫調記」 一卷

高さ280の卷子本。萌黄地草模様織出し布表紙に「紫調記」と書いた題簽がある。見返し金砂子紙。紫紐。牙軸。料紙は厚葉の斐紙で、裏面全体に金銀泥で雲模様などを画いた豪華な装幀。「紫調記」と墨書した箱入り。延宝元年十一月十日に六代目の観世新九郎豊重が江戸城での能に際し紫調を許されたことについて、小鼓観世家の由来、紫調の榮譽などを漢文で綴った讀詞。末に楷書の本文とは別筆で「延宝元年癸丑十二月/中旬弘文院林学士記(朱印「竹圃(まど)・朱印)」と奥書があり、道春の子の林春齋の文。長さ約5m。

(a) 天保六年松浦静山識「小鼓紫条記」 一通

美濃紙一枚。十代目新九郎豊綿が文化十三年四月に紫調を許された後に、鼓の弟子だった松浦静山を通じて林述斎に紫調記の述作を乞うたが、多忙を理由に辞退しているうちに豊綿が文政八年に歿した。後嗣十二代豊紀の願いによってその間の事情を漢文体で記述した文書で、末に「乙未春三月 松浦静山識」とあるが、静山筆か否か不明。包み紙によれば「林家より松浦家ニノ復翰」一通が同封されていたらしいが、今はない。11の箱に同置されている文書。

12 享保二十年林信充識「小鼓紫調記」 一通

高さ297mm、長さ3m余の未装卷子本。料紙は薄葉斐紙。享保二十年四月七日の殿中能に八代目新九郎恭豊が紫調を許されたことを記念し、林信充が小鼓観世家の由緒、紫調のいわれ、歴代の紫調認可のことなどを漢文体で記述したもの。末に「享保二十年乙卯八月中旬 従五位下大学頭林信充識」とある。信充筆か否か不明。卷子本に仕立てるつもりで清書らしい。

13 豆本細字観音経 一帖

51×34の超小型の折本。細字で片面七行に観音経を書写したもので、奥書もない。金紙などで幾重にも包み、小箱に収め、箱の題簽には「左衛門尉信光筆観音経」とある。古くそうした伝承のあった形跡はない。江戸期の書写らしい。

三 慶長以前の古文書

1 正月三日付、橋本与三右衛門あて宮増親賢書状 一通

24×40。土色がかった料紙を裏打。文面「如仰春之御慶珍重ニ候/仍明夕可参之由/祝着存候 大森新/九郎殿へもこれにて申候/小原殿へハ其方より/被仰候へく候 小次/へハ可申候 返事/如何く被申へく候哉/彦六へも申聞候/恐々謹言(追書 返々文御うれしく候 御見参/候て/可申候) 正月三日 親賢(花押) 橋本殿まいる。宛書の部分を切断し、裏返しにして右に貼り付けてあり、それには「宮増弥左衛門親賢 橋本与三右衛門殿 御返事」とある。橋本は親賢の弟子。文中の彦六は親賢の甥の美濃彦六であろう。小次は観世小次郎元頼か。大森・小原は不明。年を知る手がかりが無い。

2 六月三日付、宮増弥左衛門親賢書状 一通

128×410。紙の上下端を補強してある。文面「わさと大らへもんを/上せ申候 何事共/御座候哉 御床敷候/一せいほういんの内ニしやう/こうと申候人ニしはやの/かこをあつけ申候/さためて大らへもんめ/くハしく申ましく候/御六かしく候共御出候て/わたさるゝやうにたのミ/候へく候 其ため計ニ/上せ申候 皆々へ文にて/申度候へ共 御心得候て可/給候 大郎左衛門殿へよく/く申度候 観又二郎こと/一たん御とうかんも候ハす候つる/一しほニふひんとおほし/めし候ハんと申度候/目出度御みつから可申候/恐々謹言(追書 返々申

候 越前の/ミちあき候て御/祝着と/存候/我らもふとくたり/可申候 御とも可申候/一いさ入道殿ふし三人/は、殿ほりけ殿/中尾入道殿たうしやう/大もり衆佐野殿/其ほかことくたのミ/入候へく候 仍われらかやと/御めにかけたく候 茶の/湯心かけ候へく候 御くたり/候へく候 あさゆふ/御ゆかしく候/く 六月三日 弥左衛門尉 親賢(花押)。

宛書を抹消した痕跡がある。追書に「越前の道あき候て」と言うのは弘治二年(一五五六)四月に越前の守護朝倉義景が一向一揆と和せることを意味するらしく、同年の書状であろう。奈良から京都あてか。観又二郎は豊次の父の又次郎か。

3 観世彦右衛門あて里村紹巴書状 一通

253×402。楮紙を全面裏打。文面「此間久不面謁候 御床敷存候/抑御子息之御つゝみ嶋田殿にて/承候て感涙難留候つる 都之/銘物残候とおもひ満足仕候/在洛を不思議ニ仕候故一人も/名ある人出来候ハ祝着存候/いよく/無御油断様にと/乍憚如此候 御母儀次第/おかしく候 尚以面可申候 不/及御返事候(追書 茶湯こそ存候へぬ 旧友之/事候まゝ 無詮候へ共申入候/不知ものゝめによきか/よきと諸道ニ申候へく候。紙背左端の宛書が裏打のため不明ながら、「観世彦右衛門殿 御宿所 臨江斎 巴」とある。臨江斎は紹巴の号。彦右衛門の子の又次郎が若年の頃の書状らしいから、天正十年(又次郎25歳)頃か。彦右衛門は連歌をも嗜んだのであろう。

4 永禄十一年十月廿日付、彦右衛門あて下知状 一通

300×470の奉書。文面「城州西岡最福寺落来分事割分/彼在所内

百石被仰付訖 除寺社本所并諸ノ奉公方領知 年貢諸公事物如先々可致ノ觀世彦右衛門知行所被仰下也 仍下知如件ノ永祿十一年十月廿日 散位平朝臣(花押)ノ散位平朝臣(花押)。平朝臣兩人は十月十八日に將軍宣下を受けたばかりの足利義昭の沙汰人であらう。西岡は山城國乙訓郡、長岡の付近。「如先々」と言うからそこ以前から彦右衛門の領地があつて、旧領安堵の下知状を貰つたものらしい。本状にいう百石から寺社領等を除いたのが8に言う72石であらう。5と一對の文書。

5 永祿十一年十月廿日付、彦右衛門あて信長朱印状 一通
160×45の折紙。文面「西岡最福寺分ノ河之東西一圓ニ任ノ御下知之旨可致直務候ノ縦雖帶判形 前後ノ令并破上不可有相ノ違之状如件ノ 永祿十一年十月廿日 信長(朱印) 觀世彦右衛門殿。織田信長の「天下布武」の朱印は小判型の分。4と同年月日。信長はこの年九月十四日に上京、廿八日には西岡青竜寺城の石成主税助を破っている。彼は小鼓の堪能だったと言われ、以前から觀世彦右衛門豊次と關係があつたのかも知れない。

6 永祿十一年十月廿四日付、觀世小次郎あて信長朱印状 一通
275×45の奉書。文面「觀世小次郎扶助之事ノ一勸修寺村所々散在之事附隨分ノ一密乘院分ノ一西林院分ノ一藥師寺新介分ノ一泉藏主分ノ一甚二郎分ノ右前々以筋目被仰付之間 年貢ノ諸公事物等無異儀可令取納之状ノ如件ノ永祿十一年十月廿四日 信長(朱印)」。朱印は5と同じ。この日足利義昭の飯御所で將軍宣下祝賀の能が催され、觀世小次郎元頼(觀世座敷)も彦右衛門と共に出演した。その際に拝領したのであらう。7に言う別紙

の目録が本状と思われる。

7 永祿十一年十一月十六日付、觀世小次郎あて下知状 一通
293×43の奉書。文面「城州所々知行分^{別紙} 事任ノ当知行之旨被成御下知畢 右早觀世ノ小次郎宜致全領知之由所被仰下也ノ仍下知如件ノ永祿十一年十一月十六日ノ散位平朝臣(花押)ノ左兵衛尉神(花押)」。6の朱印状の内容を將軍義昭の側で追認した形の下知状。平朝臣の花押は4の右側の分と同じ。左兵衛尉神は神氏を称した諏訪氏の一人であらう。当時の幕府奉行衆に諏訪信濃守・諏訪神四郎がいた。

8 十一月廿八日付、觀世彦右衛門あて信長朱印状 一通
142×40の奉書折紙。文面「最福寺分半ノ分七拾貳石余ノ事任当知行之旨進止不可有相ノ違候也ノ十一月廿八日 信長(朱印)ノ觀世彦右衛門」。信長の「天下布武」の朱印は、5・6とは違い、11の分と同じく馬蹄形のもの。年代も5よりは後、11に近い頃(元龜末)の文書と思われる。この文書に言う七十二石と、26の八十二石(西賀茂・西院領)との關係は不分明。

9 五月十三日付、觀世小次郎元頼書状案文 一通
267×395の粗末な稿紙。首部に「御尺之アソモン」とあるのは後人加筆らしい。文面「上醍醐寺戒光院寺領之内ノ勸修寺ニ在所ハクリツホト申田地同ノ良賢越後兩人存知之所東ノ落合 合兩所之儀 中川八郎右衛門殿ノ御ことハリ候由候 御兩所被仰候間相ノ書申候 於向後被田地連ノ乱有間敷候 此山たいこへ可ノ被仰渡候 為其如此候 恐ノ謹言ノ五月十三日 觀世小次郎元頼(花押)ノ津田金左衛門殿ノ坊喜三郎殿^{別紙}」。元頼自筆と

認められるが、花押部分は塗抹してある。勸修寺村に領地を得た後の紛争に関する文書らしいから、元龜元年頃か。中川・津田・坊について不明。紙背に「津田金左衛門」三状 同此方よりの安と」とあるのも元頼自筆であらう。

10 七月十三日付、觀世小次郎あて木下藤吉郎秀吉書状 一通
奉書風の懷紙(295×44)の両面に書く。文面「御床敷折御状ノ本望候 如仰今度者御ノ下殊永御逗留候つるニノ何事之遊山も御入候ハす候ノ然共上候ての御仕合共ノ能候て於我等満足候御ノ帰路ニハ何と哉らんノあやまちせられ候よしノ申候 無御心元候処 くるしノからず御渡候由 これ又尤候ノ就中勸修寺郷兩人ノ事承候 神藤右衛門折ノ紙うつし給令披見候ノ無是非候候 爰本ニて一圓無其沙汰候つる 様ノ妹あひきわめ追而可申候ノ次すぎ袋如書状送給ノ祝着申候 猶期來信之時候ノ恐ノ謹言 (追書 猶以彼兩人一圓ノ不存候つる 頼候旨意得ノ申候 何篇追而可申入候ノ又相紛之事候て使者御帰候ノ無御心元候) 七月十三日 秀吉(花押) 編書ノ木藤 秀吉 觀小次さま御返報。勸修寺郷に関する小次郎からの書状への返答。11がこの書状の結果らしいから、元龜二年の書状か。岐阜からの発信らしい。「神藤右衛門折紙うつし」とは7の写しか。秀吉の花押は16と同じ。秀吉が木下藤吉郎から羽柴姓に変わったのは天正元年。親しさの現れた文言ながら、恐らくは右筆書であらう。

11 元龜三年正月廿八日付、觀世小次郎あて信長朱印状 一通
147×43の奉書折紙の両面に書く。文面「勸修寺郷之事 一ノ圓

ニ吾分ニ被下之旨ノ御下知明白候間朱ノ印をも遣候シ 三洲放状もノ令一見候ノ然候ハ、三洲かたよりノ竹木を申懸家來ノを構入夫を毀ニノ申付候由 太不可然候ノ其通三洲ノ具申ノ送之条 不可有異ノ儀候 政所をも早くノ還任尤候 地下へもノ可中間候 向後者ノ猶以彼郷内之侍等ノをも其ニ可任覚悟ノ事簡要候 仍状ノ如件ノ元龜 正月廿八日 信長(朱印) 觀世小次郎殿。文中の三洲は幕府御部屋衆三洲大和守藤英・同弥四郎秋豪父子であらう。兩人とも足利義昭に仕え、山城大法寺城を領し、本状翌年の天正元年歿。信長の朱印は8と同じ。

12 元龜四年六月廿八日付、觀世彦右衛門あて荒木村重書状 一通
懷紙二つ折(131×42)。文面「鳥養之内ノ有富名半分ノ事 為合力ノ可進之候 無諸ノ役等可有領知候ノ恐ノ謹言ノ元龜三六月廿八日 荒木信濃守 村重(花押) 觀世彦右衛門殿御宿所」。荒木村重は初め信濃守、この年七月頃から摂津守。信長に協力し初めた直後の書状。右筆書。

13 九月廿五日付、中川清秀書状写し 一通
懷紙二つ折で150×43。文面「觀世彦右衛門知ノ行分之儀 荒撰ノ被申付候間 筋目ノを以可為其分候ノ貴様百姓中ノ此通可申付候 恐ノ謹言ノ九月廿五日 瀬 清秀在判 北但進之候」。『荒撰』は荒木撰津守村重に相違ないから、「瀬清秀」は村重の家來で茨木城主の中川瀬兵衛清秀。「北但」も誰かの略称であらう。12に付随して出された文書らしいから、同じく天正元年(元龜四年)の文書と思われる。「在判」とあるが当時の文書。清秀から写しを彦右衛門に送付したのであらう。

14 九月廿六日付、辻玄照あて高助左書状 一通

粗末な懐紙二つ折で125×390。文面「観世彦右衛門当／知行 従上様／被仰下候間早々／此夫ニ可被引渡候／新儀ハ自此方／近日上使可差下／候間可其之」／謹言／九月廿六日 高助左実(花押) 辻玄照(右に「岩田五郎左衛門殿」、左に「木下二郎兵衛殿」)「御宿所」。13の翌日付であり、同じく天正元年の文書らしい。高助左・辻玄照らは荒木や中川の配下であらう。彦右衛門が村重から与えられた知行所の旧所有者が辻か。

15 極月廿三日付、石伊あて荒木撰津守村重書状 一通

粗末な懐紙二つ折で、125×495。文面「於鳥養観世／彦右衛門ニ申付候／知行無役ニ／申付候 堤料以下／可除之候 此旨彼在所へ堅可申付候／恐々謹言／極月廿三日 撰 村重(花押) 石伊(まいる)」。12・14と同じく天正元年の文書であらう。花押は12と同じ。石伊は村重配下の人の略称。

16 天正拾年三月九日付、観世彦右衛門あて羽柴秀吉折紙 一通

160×500の折紙。文面「為合力知行／百石之事 以／播州之内遣候／全可有領知者也」／天正拾 三月九日 羽柴筑前守 秀吉(花押) 観世彦右衛門入道。秀吉は天正八年に三木城攻略後に播州の地を領していた。花押は10と同じ。当時は織田信長が健在であり(六月歿)、この百石は山城の七十二石(9の分)とは別の、秀吉個人の合力であらう。

17 天正十一年九月十日付、観世宗抄あて織田信雄折紙 一通

二つ折にして178×506の大版の厚葉紙。文面「北伊勢三重郡／以智積之内百疋／令扶助訖 全／可知行状如件」／天正十一年九月十

日 信雄(花押) 観世宗抄。花押は織田信雄のものに相違ない。宗抄は彦右衛門の法名。天正十一年八月十五日に瀧川一益が秀吉に降り、北伊勢も織田信雄領となった。その直後の文書であり、秀吉の意向を受けての合力と思われる。

18 極月七日付、観世彦右衛門あて杉原家次書状 一通

懐紙二つ折(141×440)の両面に書く。破損やや激しい。文面「其方居屋敷之／事 就南禅寺塔／頭慈聖院領 去年／之地子通納所にて／当七月以來難／決之段不謂儀候間／秀吉可申達之通／自彼御寺訴訟ニ候／如何之始末□哉 如前々／急度被相済可然存候／但被申候分於在之者／可有言上候 無其理／於被拘置者不被相届／儀候 速可被□納候／為其令啓候 恐々謹言／極月七日 杉原七郎左衛門尉 家次(花押) 観世彦右衛門入道殿。杉原家次は天正十年八月から翌年五月までの京都奉行。その間の文書であらうから、天正十年に相違あるまい。

19 七月廿一日付、観世宗抄あて増田長盛折紙 一通

奉書二つ折で159×495。文面「其方居屋敷／地子之儀御免／許之由秀吉被／仰出候 可被成其／意候 恐々謹言／七月廿一日 増田仁右衛門 長盛(花押) 観世宗抄(下)。増田長盛は後に豊臣家五奉行の一人。その頃は右衛門尉と称し、花押も本状とは少し違う。五奉行以前に秀吉の沙汰人的地位にあったものか。18に「当七月」とあるのが本文書と関係あるとすれば、天正十年の文書である。

20 増田長盛折紙写し 一通

161×492の折紙。19の写しであるが、同代と思われる古い文書。

19に基づいて地代を払わずにいた所へ18の文書が出されたために、本書を証拠として提出したものか。

21 天正十三年七月二日付、観世又次郎あて中川秀政折紙 一通

161×500。「以上／鳥養之内有留分／半分之儀任代々旨／観世又次郎方へ遣候／全可知行候／恐々謹言／天正拾参年七月二日 中川藤兵衛尉 秀政(花押) 観世又次郎殿御宿所。中川秀政は13の清秀の長子。彦右衛門宗抄はこの年の八月九日歿。その直前に又次郎が相続したらしく、それに伴って、12の旧知行を安堵した折紙。

22 七月十四日付、今井周防守清房書状 一通

粗末な懐紙の二つ折で121×385。文面「観世九二郎方知行／分事家三間地／子銭事 長□□へ／申聞ニ□如当知行／無別儀可被納所由／候条可被其意得候／恐々謹言／七月十四日 今井周防守清房(花押) 道正公・嶋屋殿・石川殿御宿所。今井清房は21の中川の配下か。九二郎は又二郎の誤写であらう。21と関連する文書で同じく天正十三年と思われる。

23 天正拾四年九月三日付、観世又次郎あて豊臣秀次折紙 一通

160×505。文面「以上／為扶助／五拾石遣候／者也／天正拾四九月三日 孫七郎 秀次(花押) 観世又次郎とのへ。秀吉とは別に養子の秀次も又次郎に扶持を与えていたことが知られる。

24 天正十九年九月一日付、観世道叱書状控 一通

356×500の奉書。書状の案文が控らしく、文面「今度継目之御朱印出不申付而／賀茂西院両村之内合八拾貳石之分／当物成預リ申候 重而御朱印出不／申候ハ、右之八木急度返進可申候／為

其如此候 以上／卯九月一日 観世道叱 金子八郎兵衛殿まい(以下、同文を繰返して書いてある)。道叱は又次郎の法名。金子は豊臣家の役人か。又次郎自筆文書と認められる。26の発行が遅れたための文書らしい。卯年は天正十九年。

25 天正十九年九月朔日付、金子八郎兵衛折紙 一通

180×505。文面「以上／観世又次郎知行／当納無相違可／相納候少も異儀／有間敷候 為其申／越候 以上／卯九月朔日 金八良兵(黒印) 西賀茂・西院 両村百姓中」。24と同日付であり、朱印状未出を理由に両村百姓が年貢を取ることを怠ることを避けるため、24と引き替えに金子が25を又次郎に与えたのであらう。黄色の包紙にも「西賀茂・西院 両村百姓中」とある。

26 天正十九年九月十三日付、観世又次郎あて秀吉朱印状 一通

二つ折で229×660の大版の檀紙。文面「山城国西院内五石／六斗土居内減分田／畠替 西賀茂内本知／残分七拾六石四斗 合／八拾貳石事 宛行之／訖 全可領知候也」／天正十九年九月十三日(朱印) 観世又二郎殿。朱印は確実に秀吉のもの。24に言う「継目の朱印」がこれであらう。父が歿して天正十三年に家督を嗣いだはすの又次郎への継目朱印状の下付が遅れた理由は不明。表下部に「観世又次郎」とある包紙も当時のもの。

27 五月十三日付、観世大夫あて秀頼内衆書状 一通

二つ折懐紙で160×495。文面「以上／今度大明神／御祭礼之御能ニ／弥石脇鼓令／難決不致候段／御同名又次郎／内府様へ直訴ニ候／依之又次郎召／連早々可罷出候／御尋被成従昔之／如法度可被仰付／旨御説ニ候 有御／心得早々御参尤候／委曲面を

以可申候／恐、謹言／五月十三日 山口左入 道阿(花押)／江雪斎 □成(花押)／親世大夫殿御留所。山岡道阿景友と岡野江雪斎融成は慶長四年頃に豊臣秀頼の内衆、五年以後は家康の側近。文中の内府は徳川家康。家康の内大臣の期間と豊国大明神祭礼との重なりを考えると、慶長四〇七年の間の書状。親世大夫は九世の身愛。文中の弥石は親世座で宗抄から道叱の代まで脇鼓を打った弥石与四郎。

28 五月十五日付、親世又二郎あて藤堂高虎書状 一通

懐紙二つ折で11×53。文面「三右衛門上候ニ付而令／啓候 連々如申此者之／鼓弥指南頼入申候／仍其方子共弥切／出入候様尤候 如在申／間敷候 能乱舞於／有之者人を可進之候間／可被越候 又江戸駿河ノにて猶以用之事情者／可被申候 不可有疎意候／恐、謹言 (追書尚々杉原五束ノ諸白之手樽一進之候ノ以上) 五月十五日 藤和泉守(花押) 親世又二郎殿御留所。藤堂高虎が和泉守になったのは慶長十一年九月以後。又次郎が逼塞して京都に住んだ頃の書状らしく、慶長末年頃であろう。

29 文明十八年筆弓法聞書 一通

250×345の楮紙一枚。冒頭に「文明十八年五月三日ノ近江国ミマシニテタカノフンコトノニトイ申候事」とあり、主として弓に関する故実15ヶ条を書き並べる。原本と認められ、親世新九郎家文庫中の最古の文書。多賀豊後守は室町幕府に仕えた武家礼法の家。

30 永正八年奥書信光伝書「声ツカウコト」 一通

高さ166、長さ約135cmの薄葉斐紙の一通。冒頭に題記し、末尾に

「永正八年卯月十六日 信光」とある。自筆ではなく室町末期の転写であろう。前半は片仮名、後半は平仮名が主体。一調二機三声論や同音の付け方などの謡伝書。

31 天文十一年奥書宮増弥左衛門伝書 一通

高さ177。料紙薄葉斐紙で、長さ約2m。法会之舞乱拍子の分かち、その他鼓の基本的心得を説いた伝書。末に「天文十一年極月十日 宮増弥左衛門 親賢(花押) 親世九郎殿」と奥書があるが、室町末期頃の転写本らしい。親世九郎は彦右衛門の初名で、当時18歳。中道論なども見え、信じ得る内容。

23 享禄三年奥書能伝書 一通

袋綴の横本。132×187。紺地草模様織出し布表紙。見返し金銀切箔散らし。料紙は粗末な楮紙を裏打。墨付13丁。片仮名書。式三番次第・十二月往来・能謡の起原・宿神説・ワキノシテノ風体ノ事など、興味深い内容で、末に「享禄三年二月吉日」とある。享禄三年(一五三〇)筆の原本が転写本か不明確。

33 慶長頃筆「音曲百首」 一冊

袋綴の美濃本。264×187。紺表紙。金泥模様入り題箋。料紙は楮紙で墨付六丁。百首の音曲道歌(通常流布のもの)を連ねた末に「右此詠親世音阿弥作也／大蔵九郎能氏在判」とある。江戸初期の写本。

34 「腋応答長俊授息書」 一冊

袋綴の大本。320×230。黒表紙。題箋剥離。料紙楮紙。墨付十丁。「永正拾年二月十四日 坂戸四郎權守元正(花押) 親世弥次郎殿」と奥書ある伝書と、「天文二二年六月十一日 親世弥次郎

長俊(花押) 親世小二郎殿」と奥書ある伝書を、寛永十八年に親世勝右衛門重俊(後の元信)が合写したもの。両書とも新九郎家伝来の書物の由など、後年加筆と見られる注記の類が多く、寛文二年八月十八日に宗享(元信の法名)から親世長吉に譲る旨の相伝識語もある。内容はワキ方の伝書。親世弥次郎長俊の説そのままとは限らないようである。

35 新九郎流小鼓習事伝書 一冊

袋綴の半紙本。250×180。表紙脱。料紙は楮紙。本文墨付44丁。宮増親賢↓親世宗抄↓親世道叱↓親世宗治(豊勝)と伝来した書を親世惣兵衛豊俊(四代豊勝の子。別家初代)が書写した由の奥書がある(正保五年閏正月廿日の書写)。開口置鼓・道成寺蘭拍子・法会之舞・獅子・儼法・白拍子など、秘事に属する事のみを集めた小鼓伝書。道叱・宗治の説もかなり混じるが、興味深い内容で、江戸後期の鼓手付類にも大きく影響している。

36 室町末期筆謡本「箴梅」 一冊

袋綴の半紙本。217×155。青表紙の中上に朱色題箋。料紙は薄手の交漉紙。内題なく、片面七行。朱の節付は親世流。奥書はないが、天正頃の謡本と認められる。

37 江戸初期筆謡本「女郎花」 一冊

綴葉袋。大型半紙本。237×178。青表紙。金泥絵入り題箋。料紙は厚葉の交漉紙で、墨付十丁。内題なく片面七行。奥書なし。親世流江戸初期の節付で、朱や青で後人が細かな直しや振仮名を加筆してある。

38 親世小次郎元頼筆弱法師曲舞 一通

裏打した楮紙一枚(309×457)に弱法師のサン・クセのみを書き、親世流の節付を施す。奥書はないが、包紙に「小次郎元頼之筆」とあり、信じ得る伝えのようである。

39 天正十三年八月十日付機外宗抄禪人下火話 一通

裏打した粗紙一枚(284×434)。同年八月九日に歿した親世彦右衛門宗抄をダビに付した際の法語。大徳寺明淑和尚筆の由を他文書に言う。

40 天正拾三年城州愛宕郡西賀茂村検地帳 一冊

飯綴の美濃本。277×190。共表紙に題記や「天正拾三年 拾月吉日」の年記、「親世又二郎」「山口次左衛門□口」の名、割印などがある。楮紙で全八丁。末尾に「都合八拾貳石(黒印) 天正十三年十一月晦日 山口次左衛門」とあり、親世又次郎の領有地の検地帳。

四 版本の類(冊子本その一)

- 1 古活字本「謡之抄」 一冊
 仮綴の大本(285×212)。後補仮表紙。文禄年間に編まれた最初の謡曲注釈書たる謡抄の台林本(または同版本)から、金札・御裳濯・皇帝・三咲・歌占・石橋の六番分を抜き出して合綴した本。後表紙に「右六番之抄ハ謡鈔百番之外也 謡曲拾葉抄謡増抄謡語須知等ニモ右六番之抄ハ無之也 因慈秘藏可致也 慶応三丁卯年七月十日 観世豊成」と識語がある。豊成が家蔵の揃本から六番を抜いたのではなく、合綴本を入手したのであろう。全体に朱引と墨筆による振仮名が施されている。本冊所収の六番には「台林刊行」の刊記が無いが、版式から見ていわゆる台林本に相違ない。台林本は元和頃刊行と推定される古活字本。
- 2 寛永卯月本「景清」 一冊
 袋綴の半紙本。一番綴。後補茶色表紙。長形書題箋。寛永六年卯月の奥付(刊者名なし)がある。観世流謡本として著名な版本で、流布も広い。朱で直し・粒付・手付を書き入れる。
- 3 万治二年刊「新あいの本」 上下二冊
 袋綴の中本(192×131)。黒表紙。長形刷題箋。上冊には「高き」以下27番、下冊には「うこん」以下29番、計56番の間語りを収め、下冊末に「萬治二年 九月吉日 山本五兵衛尉開板」と刊記がある。下冊後表紙に「右問之本式冊者天保三辰年五月求之 芝 観世氏」と豊成の識語がある。目録内題は「うたひあいの本」。「百
- 井文庫」の蔵印がある。問狂言の版本で年記のある本としては正保四年本に次ぐ本。
- 4 寛文元年序「謡増抄」巻一 一冊
 袋綴の半紙本(225×160)。水色表紙。長形刷題箋。加藤盤斎著の全十二冊の謡曲注釈書の第一冊のみ。序・謡増抄大意・能作者付(能本作者注文)等。
- 5 正徳五年刊「歌舞名物同異鈔」 上下三冊
 袋綴の美濃本(276×187)。打出し模様入り茶色表紙。長形刷題箋(下冊剝落)。下冊に奥付があり、「正徳五年正月五日 京師書肆谷口七左衛門」の刊行。「猿楽」に関する古記録を集めて考察した竹田権兵衛広貞(金春流能役者の著)。
- 6 元文元年序「高砂増々抄」 乾坤二冊
 袋綴の美濃本(268×184)。青表紙。長形刷題箋。奥付がないが、上冊の自序の末に「元文萬年元年 千秋之初秋 播州高砂 漁甫迂台題」とある。上冊は「高砂増々抄 乾」下冊は「増々抄 付録 坤」と題する。謡曲高砂一番の詳細な注釈書で、乾坤揃本は伝本が比較的少ない。保存のいい美本。
- 7 宝暦五年仲春山本長兵衛刊「式三番」 一冊
 袋綴の中本。黒表紙。長形刷題箋。奥付あり。
- 8 宝暦九年刊「乱舞辨」 上下三冊
 袋綴の半紙本。水色表紙。長形刷題箋。内題は「和楽辨」。溝口敬明著の故実研究書。下冊末に「宝暦九己卯歳六月吉日 浪花書肆 心斎橋筋興販町角 岡田三郎右衛門」と刊記がある。
- (a) 豊成筆「乱舞弁目録前書」 一通

8に封入。天保十四年に同書を入手したイキサツと読後感。

9 宝暦十四年跋「謡曲閨言解」 一冊

袋綴の中本(229×152)。薄茶色表紙。長形刷題箋。見返しに「木田六右衛門撰」「平安書肆 本屋清八・銭屋忠兵衛発行」などとのみで奥付なし。末尾の跋文には「宝暦甲申莫春 平安木田為邦識」とあり、宝暦甲申は十四年。莫春は三月。宝暦十年刊の渤海茂兵衛著「秦曲正名閨言」(全三冊。能・謡曲の概説書)の注解書で、著者の木田六右衛門為邦は渤海茂兵衛の弟子。内題や版心には「秦曲閨言上解」とあるが、中・下に相当する分は刊行されずに終わったらしい。

10 明和二年刊「二百拾番謡目録」 一冊

袋綴の美濃本(242×183)。濃紺表紙。千鳥模様刷長形題箋。十五世観世大夫元章刊の明和改正謡本の目録で、序の末に「明和二乙酉年四月五日 観世左近泰元章」とある。

11 「二百拾番謡目録・独吟八十五曲目録」合綴本 一冊

前本と同じ本と、明和改正謡本の一部である「独吟」の目録とを合綴した本。前本と同装ながら、刷題箋を二つ並べて貼っている。明和本「独吟」は全九冊で、その内の一冊が目録。謡本と独吟の両目録を合綴したのは所蔵者の便宜上のこと。

12 明和二年刊「九祝舞」 一冊

袋綴の美濃本。表紙脱(もと布表紙だったらしい)。明和改正謡本の一部たる「九祝舞」(翁や立合の詞章九種を集める。クシユウブと呼んだらしい)の冊。奥付に「明和二年乙酉林鐘 御書物師 日本橋通竜丁目 出雲寺和泉掾(朱印)」とある。出雲寺は

幕府御用書肆。

13 明和二年刊「木賊」 一冊

明和改正謡本の習十番の中の一冊。10と同装。奥付なし。

14 明和九年観世大夫元章刊「習道書」 一冊

袋綴の美濃本(251×180)。丹表紙の中央上部に長形刷題箋。序の末に「明和九壬辰八月九日 観世左近泰元章(黒印二個)」とあるのみで奥付はないが、明和九年中に刊行されたのであろう。世阿弥伝書の江戸期の唯一の版本。観世元章が家蔵の写本に基づいて校訂し、私家版として刊行した本と認められる。座衆の一部や高弟のみに配った書らしく、伝本が極めて稀で、観世座関係の旧家から出た本二、三種の存在が知られている程度である。すこぶる保存のいい美本。

15 「群書類従巻第三百六十三」 一冊

袋綴の美濃本。布目入り黄土色表紙。題箋なし。「遊戯部五」の巻で、洛陽田楽記・文安田楽能記・紉河原勸進猿楽日記・異本紉河原勸進申楽記・栗田口猿楽記を収める。塙保己一による群書類従の刊行は安永八年から文政二年まで。

16 文化十三年「勸進能興行場所全図」 二枚

295×410の二枚で一組。淡黄色刷。文化十三年に江戸幸橋門外で催された観世大夫清鳴の勸進能の興行場図。「真観」印があり、観世大夫家蔵版と認められる。

17 弘化五年「勸進能興行場所之図」 一枚

370×510。多色刷り一枚物。弘化五年の宝生大夫友子の江戸筋違橋門外での勸進能の興行略図。左下に「応需英泉画」「宝生蔵

版「開板所 日本鑑書物 文化堂書三郎」などと刷る。袋入。
18「南都新能興行図」 一枚

465×555の一枚物。興福寺南大門での新能興行図。上部に新能の由来などの説明があり、左下には「板本南都北魚屋西町 いせや庄六」とある。江戸後期の刊行であろう。

以上の16・17・18は冊子本ではないが便宜上ここに並べた。

19嘉永頃刊富山藩主蔵版「武楽見聞抄」 一帖

152×65の小型折本。濃紺表紙に薄朱色題簽がある。曲趣別に宝生流の曲名を列記し、種別ごとにそれぞれ見処・聞処を掲出した形の宝生流伝書。末尾に「右五百帖聊令活版畢余者尚俟他日云爾 七宝蓮」と刊記めいた文がある。首部に豊成筆の貼紙があって、「此武楽見聞抄ハ富山松平長門守様ノ御蔵板ニテ嘉永五年七月十三日御同人様御付鈴木権佐より到来」とあるので、本書の素姓が判明する。「富山」とあるから「長門守」は「出雲守」の誤りで、宝生流を嗜んだ富山藩主前田利保（弘化三年隠居、安政六年歿）が自身で編み、身辺の宝生流愛好者に配布した本と思われる。刊行は利保在職中かも知れない。貼紙の鈴木権佐は嘉永七年の武鑑にも富山藩の組頭として名が見えてい。本書の版下書体は、『天津賢』（てつけ）と題する宝生流型付（全五冊。横本）と明らかに同筆であり、『天津賢』もまた富山藩主の私刊本だったことが推測される。天保十五年奥付の宝生流横型謄本（全二冊）もまた富山版と通称されており、前田利保の刊行らしい。稀観本。

20十番合綴喜多流謄本 一冊

半紙本。薄茶色表紙。長形書題簽。三冊とも奥付がないが、21と同種の山本長兵衛本。朱・青・墨で直しを書き込む。定家の末に朱印で「観世」「豊成」とある。

24「31江島伊兵衛刊明治期宝生流謄本

以下八種は、奥付のない本もあるがすべて明治期の江島伊兵衛刊の木版本。服部小錦治が武田氏・堀川氏に就いて宝生流の謄を稽古した際のテキストで、各種の書き込みが多く、「黄郎」「催花堂」「服部文庫」「服部蔵書」等々の蔵印がある。五番綴本のものを一番綴本に転用したりして表紙はみな後補のもの。すべて半紙本。

〔24〕薄茶色表紙一番綴本 七冊

声刈。井筒。女郎花。国栖。絃上。蟬丸。松風。各冊の末に、宝生九郎の版權免許と江島伊兵衛の版權所有を示す二個の朱印（木印）を押捺する。江島の住所は日本橋通四丁目十番地で、同人発行の宝生流謄本では最初の本。

〔25〕白薄表紙三番綴本 一冊

満仲・九世戸・西王母。奥付の類なし。

〔26〕茶色表紙二番綴本 一冊

大仏供養・大原御幸。表紙は江島刊の五番綴本の転用。24と同文の二個の印がゴム印になり、かつ江島の住所が八番地に変更されており、24よりは後の発売の分。

〔27〕白薄表紙一番綴本 一冊

江口。末尾のゴム印は前本と同じ。

〔28〕白厚表紙一番綴本 二冊

袋綴の半紙本。茶色表紙。御裳濯・関原与市・飛鳥川・鱗形・葛城天狗・枕慈童・愛宕空也・水無瀬・土庫・籠祇王の十番を合綴。御裳濯のみ安永五年版、他九番は文化三年版。末に「弘化三四年正月良辰 豊成」と墨書。喜多流の稀曲を集めた冊らしい。御裳濯・飛鳥川・鱗形・葛城天狗・愛宕空也・水無瀬には鼓の手付を朱で書入れてある。左記の三点の文書を封入。

〔a〕天保八年豊成筆、鱗形書付 一通

二月二十八日の本丸演能（六平太・豊紀）の際のメモ。

〔b〕慶応三年豊成筆、葛城天狗書付 一通

七月二十四日喜多稽古能の際のメモ。イノリ手付など。

〔c〕慶応三年豊成筆、水無瀬書付 一通

十月二十一日喜多稽古能の際のメモ。型付に近い。

21正徳六年奥付観世流五番綴本 一冊

大型半紙本。観世水模様打出し藍色表紙。横型刷題簽。正徳六年弥生山本長兵衛刊行の奥付があるが、安永以降の後刷本。全二十二冊百十番揃本の端本で、難波・兼平・千手・卒都婆小町・紅葉狩の組。豊□の朱印があり、全曲に朱・青・墨で直しが書き込まれているが、鼓の手付は無い。

22観世流謄本「弱法師・恋重荷」 一冊

半紙本。青表紙。長形書題簽には「弱法師」とのみあるが、恋重荷を合綴。奥付は無いが、弱法師は天保十一年山本長兵衛本で、直しと鼓手付を書き込む。恋重荷は天明新十番本と同版で書入れは無い。「豊成」の印がある。

23観世流一番綴謄本 三冊（鞍馬天狗。定家。東岸居士）

鵜飼。班女。前本と同じゴム印を押捺。

〔29〕明治三十六年奥付、白厚表紙一番綴本 四冊

葵上。善知鳥。望月。紅葉狩。前本と同装で、「明治三十六年六月五日分冊発行」という江島伊兵衛の奥付がある。

〔30〕明治三十六年奥付、茶色表紙一番綴本 一冊

求塚。前本と同奥付。装幀が異なるのみ。

〔31〕洪表紙改装混綴本 十九冊

前本などと同種の一番本を合綴した本で、四番綴から八番綴まであり、五番本の表紙に洪を刷き、黒題簽に金色で曲名を書く。内組の曲と外組の曲が混じり、総計一二一番。但し桜川が重複する。使用者小錦治の書き込みが多い。

32明治四十四年枕屋謡曲書肆刊石版刷一番綴本 十三冊

綾鼓。雲林院。清経。絃上。絃上。高野物狂。住吉詣。誓願寺。錦木。野守。二人静。六浦。夕顔。各冊「夕顔之巻」などと題した布貼り鼠色表紙。石版刷の謄本。全冊に奥付があり、「明治四十四年十月五日発行」の本。

33大正四年枕屋謡曲書肆刊石版刷一番綴本 一冊

誓願寺。前本と同装・同版・同奥付ながら、奥付年記の末尾に「大正四年三月発行」と朱で刷り加えてある。

34大正初年刊石版刷和泉流狂言本「狂言集」 一冊

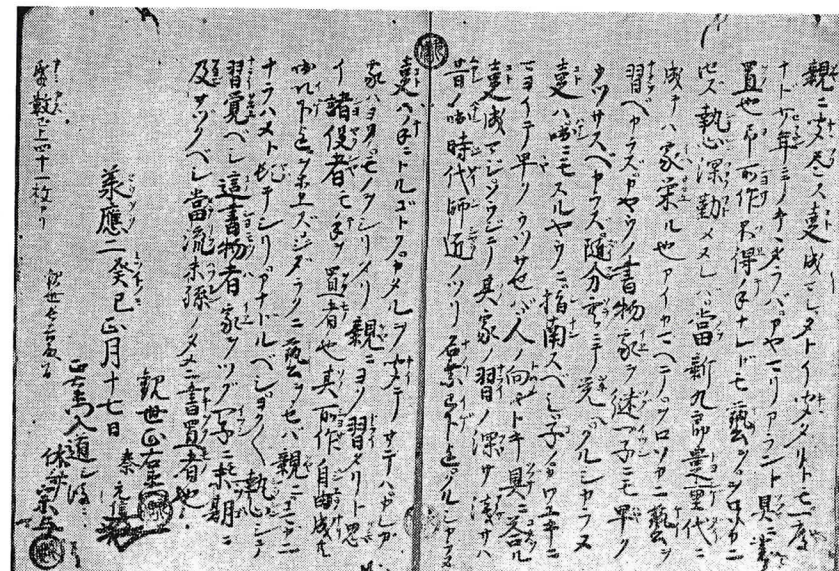
仮綴半紙本。付加表紙に題記。奥付なし。石版刷の狂言本で、従来知られていなかった珍本。腥物・仏師・二九十八・舟ふな・狐塚・柿山伏・萩大名・蝸牛・井杭・寝音曲・芥川・吃・酔萱・かねのねの十四番を合綴しているが、本来は一番ごとの本

- 1 観世勝右衛門元信筆『四座役者目録』 上下二冊
282×213の大本。料紙は楮紙。原装は共表紙を添えてコヨリで綴じ、背の部分に紙を貼って補強したのみの仮綴本。コヨリが切れ、バラバラになりにかかっていたので、近時、金緑色綴子表紙と角裂を添えて袋綴にし、帙に収めた。新九郎家五代目の元信が、観世与左衛門国広編の『四座役者』や、家伝の書物、自己の見聞などに基づいて編んだ能役者の伝記集で、能楽史料として著名な書の著者自筆原本。上冊は「四座役者目録 上」と題し、全41丁。下冊は「近代四座役者目録 下」と題し、全77丁。上・下とも、正保三年極月の観世勝右衛門元信名義の奥書と、承応二年正月の休斎宗与(元信の隠居名)名義の奥書とがある。正保三年に一応成立した後に、増補・訂正を加えた跡が顕著で、頭書や行間への書入れが多い。承応の奥書は実子の観世長吉宛であるが、長吉はこの年に生れており、後に宛書を追記したらしい。朱筆振仮名・朱引の類も多い。本書に基づく多くの転写本が作られており、田中允氏校訂の『^{校本}四座役者目録』(わんや書店「能楽史料」第六編も転写本に拠った刷印であったが、昨年(昭和50年)本書を参照した改訂版が出されている。
- 2 江戸中期筆『四座役者目録』 上下二冊
284×207の大本。袋綴。茶色表紙。長形題簽に題記。料紙は交漉紙。前本に基づく転写本で、書写関係の識語がないが(二冊と

- も末丁の半分が切除されている。そこに識語があったらしい)、江戸中期の写本らしい。原本の頭書は、本文の末に「頭書曰」と注して連ねる形。6の豊成の付記に、観世勝次郎豊義家伝来の「四座役者目録」を死後に取り上げた由を言ひ。恐らく本書が次本であろうが、本書の可能性が強そうである。
- 3 江戸末期筆『倭楽者目録』 上下二冊
袋綴。224×150。格子模様入り青表紙。長形題簽に題記。料紙は薄葉紙。本書も1に基づく転写本で、原本の頭書をも本文の末に注なしで書き続ける形。両冊とも末に「文久三 癸卯 年仲夏良日 豊成(朱印)」と奥書があるが、楷書で書かれた本文は豊成とは別筆らしい。但し江戸末期の写本であろう。
- 4 江戸中期筆『古今四座役者并白人芸者記録』 一冊
282×198の大本。袋綴。茶色表紙中央の題簽に表記の如く題するが、別に「役者記録」とも墨書がある。薄手の料紙で、墨付101丁。四座役者目録の異本と見なされる書。1に基づきながらも、古代(上)と近代(下)を一緒にし、座は観世・金春・宝生・金剛その他の順に、役は大夫・脇・小・大・太・連・狂言の順に統一し、記事にも手を加えたり前後させたりして、大幅に編集し直してある。朱引が多く、朱筆による追記などもある。書写に関する識語がないが、江戸中期筆と認められる。改訂の正確な年代や改訂者は不明。本書が同系異本の祖本と思われるが、明確ではない。
- (a) 喜多七太夫家系書付 一通
前本に封入されていた文書。五代目の十代夫までで、江戸中期

らしい。内容は明らかに和泉流。明治末に盛岡で版行された石版刷和泉流狂言本と感じは似るが別版。野村万蔵氏の御教示によれば、本書の書体は、もと驚流狂言師で明治末に野村家の厄介になっていた日吉市之助の手に成る同家蔵の『狂言六義』と同筆であり、また野村万蔵は明治44年から北海道へ狂言教授に出張しており、函館や札幌で、主として鉄道関係者に教えていた。恐らくはその時の教授用のテキストとして、日吉市之助筆の本を石版刷で刊行したもので、大正初年頃の本であろう、とのことであった。本書に蔵印を捺している服部小錦治も一時鉄道に奉職していたから、恐らくはそうであろう。

35 大坂屋長四郎刊「嘉永四 辛亥 曆」 一冊
袋綴の小型本。印刷表紙。冒頭に「江戸曆開板所 大坂屋長四郎」とある。



五 1 観世勝右衛門元信筆『四座役者目録』

の筆。通説とは異なる諱や法名を記載する。

5 江戸中期筆「能楽古記録集」 一冊

墨付16丁で厚さは異なるが4と同装で、本来は一群の書らしい。もと書名があったらしいが、題簽が剥落している。(1)歌舞之濫觴(常照禪師筆、沢庵跋。原本は観世宗家蔵)、(2)明人友梅筆催花額、(3)寛正五年紉河原勸進能記、(4)近衛前久筆豊次夢想和歌、(5)永禄六年(奥は七年)相国寺八幡観世大夫勸進能記録(承応三年六月十九日観世庄右衛門元信奥書)、(6)延宝元年林学士述小鼓紫調記の、計六種の能楽史料を集成書写した書。同内容を有する6・7の両本よりは本書が古い形と思われる。

6 江戸中期筆「増補能楽古記録集」 一冊

257×189。袋綴。茶色表紙。題簽剥落。前本所収の六種の史料に、新たに(7)観世・金春両座大夫・小鼓役者略系(休斎宗与奥書)と、(8)小鼓名簡之由来(宗与奥書)の二種を加え、(1)(4)(2)(6)(7)(8)(3)(5)の順に書写してある。浅野太左衛門栄足が文化八年正月に編んだ『優伶録』(その一部を『本四座役者目録』に翻印)は本書をさらに増補した形。途中や末に天保十三年と嘉永五年の観世新九郎豊成の追記があり、本書の原本を元信筆かと疑い、その原本紛失の事から四座役者目録盗写の問題に言及している。

7 江戸後期筆「猿楽起原抄」 一冊

272×188。袋綴。青表紙の題簽に表記の如く書名がある。料紙は薄葉紙。前本と同内容で、前本からの転写本と認められる。本書の書名が本来のものか否かは疑問。

8 正保三年観世勝右衛門筆「寛書」 一冊

帖装の小型本(93×112)。表紙なし。伏見(這小諸昔公方ノ御謠

初ニ観世大夫ウタヒタル也)・鼓滝(右青表紙章句写之者也)の小諸、後小松院(後陽成院の各天皇と歴代將軍の名を記した後に、世阿弥・禅竹・禅鳳・信光・宗印らの逸話の類を書連ねる。奥書「正保参初冬六 観世勝右衛門(花押)」。1にも投影している書。以下数種も同様で、冊子本以外にも元信が四座役者目録の編著と並行して記録した文書が少なくない。

9 正保四年観世元信筆「観世家系図」 一冊

279×215。袋綴。共表紙に右の如く題記し、「元信」「式冊之内」とも墨書する(見返しにも)。次本と一組の写本。1の原装とはほぼ同装。(1)林道春筆の観世小次郎画像讀(二八)・(2)観世之系図(二八)付載の釣書を増補し、元信まで・(3)「観世之系図」と題した常照禪師の歌舞之濫觴とを合写し、(2)と(3)の末に「正保四丁亥正月十一日書之 服部(又ハ観世)勝右衛門元信」の奥書がある。正保以後の追加記事(『花伝』第三の奥書など)もあり、最末に「寛文二壬寅八月十八日 自小次郎權守信光五代 観世正右衛門入道休斎 宗与(花押・印) 観世長吉殿まいる」とあって、1と同様、元信が実子の長吉に相伝した書。

10 慶安二年観世元信筆「観世家系図註」 一冊

293×222。袋綴。共表紙。やや大きい前本とはほぼ同装で、本冊の表紙にも「式冊之内」とある。観世小次郎画像讀の和訳で、「右之註 観世左近大夫重成ニ有ヲ以写ス也」と末に注する。元信の奥書は慶安二年五月廿五日付で、「付翁宗与」の署名や「観世長吉殿まいる」の宛書も書き加えてある。

11 慶安二年観世宗兵衛豊俊筆「小次郎系図」 一冊

275×201。袋綴。青表紙。朱色題簽。内題は「観世家画像」で、林道春奥書の観世小次郎信光画像讀(二八)の写し。末に本文料紙と同質同大の紙が挿入されており、それに本文と同筆で慶安二年六月十五日の観世宗兵衛豊俊の奥書(識語は二九と同文)がある。二八から直接ではなく、二九からの転写らしい。

12 江戸初期筆「小次郎系図」 一冊

258×187。袋綴。青表紙。斐紙題簽。前本と同題ながら、本書の内容は10と同じく観世小次郎画像讀の和訳。奥書なし。

13 観世新九郎豊重所持「小鼓紫調記」 一冊

303×227の大本。袋綴。共表紙。無題。延宝元年の紫調記(二11)の写しであるが、詳細に訓点を加える。首部に弘文院林学士が紫調記を与えた事情、末尾に翌延宝二年五月に宝生大夫の関寺小町の小鼓を命ぜられたことが注記されており、豊重の所持本らしい。本文は注記と別筆。料紙が厚葉楮紙で、全八丁。

14 江戸後期筆「小鼓紫調記」 一冊

袋綴の美濃本。前本の本文の写し。

15 延宝頃筆「観金大夫・観世脇・小鼓次第之事」 一冊

袋綴半紙本。共表紙の題記は後人加筆らしい。観世大夫次第・金春大夫次第・観世脇之次第・小鼓之次第の順に主な役者の略歴を連ねる。aの写しに相違ない大夫の分は名を連ねるのみ。脇・小鼓の分も簡略。貞享四年・元禄二年の年号も見えるがそれは後人加筆の分で、原形は延宝頃の本と認められる。全体が加筆の疑いのある両大夫の分以外は元信筆の可能性もある。

(a) 正保元年元信筆「観世大夫次第・金春大夫次第」 一通

15の表紙裏に貼り付けてある。懷紙の片面。観世大夫は観阿弥から「当左近」(重成)まで(後人が重清分の「当左近」を加筆)、金春大夫は禅竹から「当八郎」(元信)まで、法名または通称を並べるのみ。末に「正保元極月晦日 観勝右衛門元信(花押) 観世次兵衛殿まいる」と奥書がある。観世次兵衛は22の役者付によれば観世座の小鼓方。

16 貞享頃筆「観世方小鼓名人之次第并子孫弟子萬間書」 一冊

袋綴の半紙本。共表紙に題記。四座役者目録などに基づき、貞享頃までの人物に及んで芸系を釣書(釣書)の形で示した記事など。全六丁の小冊ながら小鼓方系譜として有用な書。末尾に禁中能大夫渋谷家の釣書もある。元禄二年の書込みがあり、それ以前の書写。豊成の考証風の書入れもある。

(a) 金春先祖に関する書付 一通

前本に封入。毘沙王權守・毘沙王次郎・金春三郎についての書付で、「右者浄元書物如此御座候」とある。浄元は金春八左衛門安喜の法名。首部に鼓筒に関する書付少々。

17 木下藤吉郎秀吉書状考証 一冊

袋綴の美濃本。黄茶色表紙。無題。秀吉から観世小次郎宛てた書状(三10)を模写し、その後に、信長・秀吉と小鼓の關係などについて考証した書。秀吉の筆跡を多く載するという人(新九郎家の弟子筋の大名か)の著の写し。江戸末期の書写。

18 観世新九郎豊成筆「両観世家関係寛書」 一冊

袋綴の小型本(165×122)。共表紙に「観世大夫方之習事相手小鼓

は新九郎方ニ限ルト云詠書」と題記がある。奥書は無いが幕末の豊成筆に相違ない。室町末期の観世大夫元忠と弥次郎長俊の関係や、江戸初期の観世大夫重清への新九郎家からの習事相伝から説き起し、観世大夫の習事の相手の小鼓は新九郎流に限られ、新九郎流は観世大夫以外の相手をも勤める事の当然性を主張している。当時の観世大夫清孝が幸清流を用いたことへの不満などが背景らしい。『鏡仙』昭和42年6月号に全文翻印。

19 享保六年観世新九郎恭豊「由緒書」 一冊

仮綴の大型枕本。共表紙。厚紙の袋に「恭豊由緒書」と題する。享保六年書上の草稿で、末尾の「別紙」の分はない。恭豊筆か否かは不明。汚損のはげしい本。

20 江戸後期筆「享保六年書上」 一冊

仮綴の大型枕本(横に二つ折の美濃版薄葉紙を重ねてヨリで綴じる)。142×416。共表紙左端部に「享保六年丑年就御尋仲ケ間中書上候扣」とある。享保六年書上の名で呼ばれている能楽諸家からの書上の集成で、省略が比較的小さい善本。能の起源や作者、家系・拝領物、曲目、その他広範な内容で、作者付として著名な「観世大夫書上」はその一部。

21 江戸末期筆「享保六年書上」 一冊

前本の転写本で、ほぼ同装。首部に目録を加えてある。

22 慶応三年筆「御能組并狂言組」 一冊

前本と同装・同筆の仮綴枕本。共表紙。無題。寛文初年以前と推定されている能楽諸家の演目と習事の書上が主体。該部分は能楽研究所蔵の「御能組并狂言組」全三冊とほとんど同内容。

乱曲・仕舞の名寄。観世鉄之丞(嘉永五年七月)・金春大夫(嘉永二年三月)・宝生大夫・金剛大夫・喜多六平太(天保十五年六月)・大蔵庄左衛門の諸家の分。末に「安政二乙卯年八月良辰豊成」と奥書がある。観世鉄之丞から借用して写した由を、挟み込んだ別紙に言う。

27 文久二年豊成奥書「諸流書上狂言目録」 一冊

袋綴の横本(169×236)。水色地格子模様表紙。絵入り題箋。鷺仁右衛門の名寄(狂言・習事・風流・替間・語・小舞)、鷺仁右衛門の狂言并間あど名目書、大蔵弥右衛門の名寄并名目書(狂言・語・小舞・風流・語。十二月付)、大蔵千太郎の狂言并間アド名目書(九月付)、大蔵八右衛門の狂言名寄(天保十五年六月付)、同(無年記)・同人の狂言アド順名目付并絵釈御座候狂言之分、同人の狂言間習事(天保十五年六月付)、同人の狂言アド名目付(無年記)、鷺伝右衛門の狂言アド名順書(戊辰八月付)の各種書上を合写した末に「文久二壬戌年正月十五日 豊成」とある。

(a) 狂言目録に関する書付 一枚

前本に封入。鷺伝右衛門の分は嘉永三年であろうという。

28 文久二年豊成筆「古今謡曲名寄」 一冊

26と同装。イロハ順の謡名寄。見出(目録)の後に、「左にあつむところの謡名寄は家の古書によつて見やすからんためかくはなせしものゝ、同物異名あまたあるまに／＼しるし侍りぬればその数のいや多くこそみゆれ。またもとより文字のわかたざるハ本書の儘かながきにするす。されバ文字はたしかなれど義理のわかたざるハ疑のまゝあらハし置ぬ。いつの日かたしかなる

その後に四座一流の役者と紀伊殿役者・水戸殿役者の名を連ねているのが特色で、この役者付は曲目書上より数年早い万治頃のものと思われ、江戸期の能役者付としては最古のものである。宝生座の分に役名の脱落があるのが惜しまれる。末尾に「貞享五戊辰年八月日」「慶応三丁卯年十二月日 写之」とあり、貞享の分は親本の年記と思われる。

23 江戸後期筆「御公儀上り申候鼓方囃上中下覚」 一冊

仮綴の枕本。共表紙(題記なし)。表記の如く首書し、種別(協能)七番目、及び習物に分けた約一五〇番の曲に、上々・上・中上・中・下などの位付を頭書する。前本の観世新九郎家の曲目書上と、曲順は異なるが曲名・位付ともほとんど一致し、若干の誤脱がある。

24 江戸末期筆「観世流小鼓習事目録」 一冊

袋綴の小本(136×93)。藍色表紙。無題。正保三年に観世元信が思い出し次第に書き付け、寛文二年八月十八日に宗与(元信)から観世新九郎に贈った由の奥書ある本の写し。薄葉紙に墨付14丁。約100丁の余白がある。豊成筆らしい。

25 観世新三郎豊成筆「一調書上」 一冊

仮綴の中型横本。共表紙に題記と「観世新三郎」の名がある。一調・太鼓事一調・神楽一調・乱曲独吟一調・一調一声・一調一管の曲目。朱の加筆がある。年記がないが天保末年頃のもの。

26 安政二年豊成筆「諸流書上謡曲目録」 一冊

中型横本。135×195。袋綴。水色地格子模様表紙。金砂子散らし題箋。料紙薄葉紙。シテ方諸流の能・習事・囃子・仕舞・独吟

ものになさくはしくおもふになん 文久二壬戌年霜月良辰 豊成(朱印「催花」)とあり、末尾にも同年記の奥書がある。別名や国別をも注記する。約千八百番。

(a) 古今謡曲名寄曲数書付 一通

前本に挟み込む。イロハ別に前本収載曲の曲数を書き、「惣々千八百式拾七番也」と言う。異名同曲の多き由をも注する。

29 文久二年豊成筆「元章改正伝授目録」 一冊

前本とはほぼ同装(題箋小異)。十五代観世大夫元章が明和改正謡本刊行と併行して定めた伝授事の目録。末に前本と同年記の奥書がある。26・28や本書は楷書ながら豊成筆らしい。

30 天明三年「御役者分限帳」 一冊

中型横本。140×202。仮綴。共表紙に題記。天明三年当時の四座一流と新組・触流の全能役者・役人の氏名と禄高を記す。「惣合三百四拾四人」とある。原本奥書「天明三癸卯林鐘初旬 松井慶次郎帳面ニ而写之」。書写奥書「右巻冊大蔵氏より借用 元治元甲子年卯花月上旬写之 筆者 中西芳之助」。中西は豊成の弟子。別に「芝 観世氏」と豊成の署名もある。

31 嘉永四年豊成筆「当家取高之覚」 一冊

仮綴の中型横本。共表紙に題記。地方・切米・配当米・扶持米の四項に分けて、それぞれの受取り高や手続き、札差料等の諸経費などを詳細に記録する。松平出雲守からの七人扶持、小笠原大膳大夫の三人扶持、松平美濃守の五人扶持のことを貼紙で追加。全体が豊成の筆。紙袋入り。

32 享保以降「大名衆相伝事扣帳」 一冊

中型横本。仮綴(大幅帳式)。共表紙の題記に「宝暦九己卯年正月吉日改」と肩書があるが、明和以降天保六年までの書き次ぎがあり、享保二年以後天保六年までに諸大名に相伝したことの目録。氏名を列記し、相伝事と年月を書き込む形。

33 弘化五年筆「御出入屋敷向手控」 一冊

仮綴の小型升型本(105×130)。共表紙に年記がある。観世新九郎が出入していた大名家四十余家の住所や位置、用人等の氏名、連絡依頼の能役者名などを書き連ねた手控え。全十丁。

34 安政四年「門弟方より問合事留書」 一冊

小型横本。袋綴。茶色表紙に題記。豊成の筆。加州の湯浅平次、尾州の高田伊右衛門、平戸の松浦乾斎から問い合わせてきたことへの返答の書き留め。慶応四年の高田善次郎への返答、明治初年出京後の大塚村田中勝次郎宛無心状の案文を書き加える。

35 天保・慶応「御役者姓名控」 一冊

仮綴の枕本(105×212)。共表紙の題記の左右に「天保十三壬寅年五月吉日 観世新三郎」とあるが、後半に慶応二年七月改めの分をも書き加えてある。四座一流の家元クラスの父子の名のみを連ねる。天保分は42名。慶応分も42名。

36 江戸後期筆「文禄禁中御能組」 一冊

仮綴小型本。共表紙に題記。文禄二年の宮中での豊臣秀吉らの演能の番組。末に舞台略図あり、前田利家(羽柴筑前守)分をすべて秀吉演能と誤った形の本。

37 観世元章編「將軍宣下御能目録」 一冊

袋綴の美濃本。浅葱色表紙。朱色題箋。徳川歴代將軍の將軍宣

下祝賀能の詳細な番組。役者の諱・年齢を注記している場合も多い。慶長八年の家康(三日間)から宝暦十年の十代家治(五日間)までの分。装幀も書式も観世宗家蔵の『雲上散楽会宴』(禁中能の番組集)と同じであり、同書と同じく観世元章編と見られる。次本を書写するために観世宗家から借り出したままになった本であろうか。

38 江戸末期筆「將軍宣下御祝儀御能組」 一冊

袋綴の半紙本(220×150)。水色地格子模様表紙。斐紙題箋。前本の転写本。数十丁の余白紙を残し、後表紙に「豊成(花押)」と署名がある。

39 「観世新九郎豊成父子出勤番組控」 一冊

袋綴の小型横本。青表紙。豊成と小太郎父子が出動した公儀関係の番組集。嘉永七年閏七月から幕末まであり、末部に明治十一年六月以後の青山御所での能の番組(十三年四月まで)をも付載する。若干は番組以外の関連記事もある。

40 明治二年大蔵千太郎虎長筆「両御神事記憶」 一冊

仮綴半紙本。共表紙の貼題箋に「明治元年春 両御神事記憶」とある。明治元年十一月二十七日の春日若宮祭に金春一座のみで参勤(松之下式と御旅所の翁。後日能はなし)した際の諸記録と、翌明治二年二月の薪猿楽に金春座が参勤した際の記録。願書の控や当日の装束付・番組など、かなり詳細で、明治初年の南都両神事の実態を知る好資料。末に「明治二年二月十五日 於奈良記之 大蔵千太郎虎長(朱印)」と奥書がある。薪能には観世小太郎(豊好)も出動している。

41 江戸末期筆「諸記録」 一冊

袋綴の中型横本。共表紙に題記。家蔵の断片的古記録を前後不同に書写した由の前書があるが、筆者不明。新九郎家歴代の紫調免許と鼓預りについての書上(安永以後)、享保十一年西丸奥御用出仕の際の起請文前書、元禄六年豊房奉納の筒についての書付(宝暦二年の文書)、天保十四年正月付幸五郎次郎より触流しあて願書、寛政十年大蔵千太郎相続の際の親類弟子連名文書、文政十三年奥御用出仕の際の起請文前書、嘉永六年嶋屋吉兵衛あて願書(水戸家出入許可の依頼)、弘化四年宝生大夫あて願書(田安家出入についての依頼)、その他各種の文書を写す。慶応四年の分が最も新しく、これは別筆らしい。末尾の刀・脇差に関する記録のみは豊成筆。

42 弘化四年観世新三郎豊成筆「由緒書」 一冊

仮綴の半紙本。共表紙に題記。先祖以来の由緒書。末尾に「弘化四末年十二月 観世新三郎」とある。草稿で、訂正や貼紙による追記が多く、朱筆も混じる。全部豊成筆。

43 弘化四年観世新三郎「由緒書」控 一冊

仮綴の半紙本。共表紙に題記。前本を別人が清書した形で、前本の追記の類も本文に生かされている。墨筆や朱筆の加筆・訂正があり、末の弘化四年の年記を朱線で消し、「明治三庚午年閏十月 観世新九郎(花押)」と朱筆奥書がある。

44 観世新九郎豊成筆「由緒書」 一冊

仮綴の半紙本。共表紙に題記。年記は無いが嘉永六年以降の由緒書。前二本とは内容を異にし、享保六年書上を参照した形で、

俊増大夫・幸松次郎・宮増五郎・美濃権頭・宮増親賢、以下歴代の順。豊次・重次の項がすこぶる詳細。

45 弘化二年佐藤忠次郎筆「先祖書」 一冊

仮綴の半紙本。共表紙に題記があり、また左下に「小普請組堀田主税支配 佐藤忠次郎」とある。末に「十二月 佐藤忠次郎(三十八歳)(花押)」とあるが、内容から見て「巳年」は弘化二年に相違ない。佐藤家は新九郎家六代の新九郎豊重の三男で元禄二年に御廊下番に召し出された佐藤権之助豊恭の家で、権之助豊恭一又三郎豊住一金三郎忠恕一金之丞忠理一鉦次郎正苗一忠次郎隆都と続いたことが本書から知られる。

(a) 嘉永元年九月十七日付、南部文蔵書状 一通

観世新三郎あて。佐藤忠次郎が小普請組土岐信濃守支配である旨を返答した書。南部は四谷伝馬町岡部藤兵衛内。

46 明治三年観世新九郎豊成筆「由緒書」 一冊

仮綴の半紙本。無表紙。静岡県在住時代の由緒書で、43の朱訂分を更に訂正した形。自己の分と三代の又次郎重次と四代の新九郎豊勝の分のみで、豊勝の途中で終り、末に「元本由緒書十枚目ノ表へ続く」と注する。原本にあたるのが43。

47 明治三年観世新九郎豊成筆「親類書」(甲) 一冊

仮綴半紙本。共表紙に題記。十五人の親類の名を列記し、末に「明治三庚午年閏十月 観世新九郎(草名)」とある。共表紙の裏に、心覚えのために書き留めたもので書上の控ではない由の豊成自身の注記がある。

48 明治三年観世新九郎豊成筆「親類書」(乙) 一冊

前本と同装で同内容。但し共表紙裏の注記は無い。

49 明治三十六年宮増豊好筆『宮増家系図書』 一冊

袋綴の中本。草模様表紙。黄色題箋。厚紙の帙に「宮増系図」、題箋に「宮増氏系図写」とあるが、内題に従った。薄葉紙を用い、朱筆で釣書にした新九郎家の系図。宮増親賢から宮増豊好まですべて宮増姓にし、元信を五代目に数える。首部に「明治卅六年七月調査訂正記」とある。次本と一対。

50 明治三十六年宮増豊好筆『服部家系図書』 一冊

袋綴の中本。白表紙。斐紙題箋。厚紙の帙に「服部系譜略全」、題箋に「^{豊好}服部家系譜全」とあるが、内題に従った。新九郎家の別家たる観世惣兵衛家の系図で、前本と同書式。信光を初代、豊俊(事実上の初代)を六代目とし、十代目が服部照国、通称小錦治。

51 元文四年田原清助筆『服部氏先祖霊名考』 一冊

仮綴半紙本。共表紙に題記。京都の紫野瑞光院と寺町の乗願寺の位牌や過去帳に記載されている観世新九郎家の関係者の法名と忌日を列記し、誠心院の石塔八基と乗願寺の石塔三基の図も添える。末に「右於京都御先祖霊名書付差下シ申候 尤年月相知れ不申候義有之候 重而相考吟味仕 相知レ申候ハ、追而可申進候 以上 元文四年未七月 田原清助」とある。

52 観世新九郎家過去帳 一帖

小型折本(138×61)。表紙の部分は黒い板。日付ごとの過去帳で、一族のみならず、後援を受けた大名や、鼓筒作者の名もある。天保九年の分が最も新しい。香煙のため料紙は黒く焦げ、各所

でバラバラに切れた折本。

53 天保十年宗栄筆『御過去帳うつし』 一冊

仮綴の枕本(半紙横二つ折)。共表紙に題記。別に「天保十年亥九月廿三日 宗栄書」とあり、「豊成改」ともある。前本に基づいて整理した書。全体に豊成の書入が多く、共表紙裏には天保十三年の豊成の注記(不明の人物について考証した事など)もあり、朱書で「此以後当家ノ過去帳ノ中へ他家ノ霊名等書交ベカラズ」ともある。

54 天保十三年以降豊成筆『先祖代々霊名控』 一冊

仮綴の中本。共表紙に題記(傍書「其外色々留書」(60)や「天保十三年庚午七月二日書之 観世新三郎(花押)」などの墨書がある。観世大夫家代々戒名等、新九郎家代々戒名等、その他法事関係の記録や寺院への付け届けなど雑多な内容で、安政頃の追加記事も多く、末部の「先祖等年忌繰出覚」の項には明治三十八年の追記もある。全体が新九郎家の系譜資料。

(a) 観世大夫清長室(文久二年歿)忌日・戒名書付 一枚

(b) 寛文六年観世新九郎豊重署名 一枚

(c) 天保十二年岩井七郎右衛門書状断片 一枚

大徳寺瑞光院への位牌供養料について。新九郎家と京都の菩提寺との連絡にあたっていたのが岩井七郎右衛門。

55 「武蔵国葛飾郡之内人数帳」 一冊

仮綴の美濃本。表紙とも三枚。観世新九郎が御勘定所に提出した領内の人数帳の写し。安永三年の分(55人)一枚と、文政五年の分(41人)一枚。

56 「嘉永四年改正高反別帳(葛飾郡大塚村)」 一冊

仮綴の大型枕本。共表紙に題記。嘉永四年に領地検分に赴いた新九郎家内の稲垣松三郎と、大塚村の名主(小市右衛門・辰之助)の間に取交わした新規の反別帳。計十七筆で、各人ごとに一枚の田畑ごとに詳細に記録され、個別の年貢も記載する。取石合式拾七石六斗九合、取永合八貫九拾七文。

57 嘉永三年序『知行所之記』 一冊

袋綴の美濃本。布目入り茶色表紙。白題箋。上質の楮紙を用いた厚冊。観世新九郎家の知行所たる武蔵国葛飾郡幸手領大塚村(拝領高八十二名、物成詰込高八十八石余)の百姓が、嘉永二・三年と連続して出水を理由に年貢大幅減免を願い出たのを機に、弟子の稲垣松三郎と蔭山俊蔵を派遣して実情を調査せしめ、知行所の管理・年貢収納などについて新たに制度を定めた際の、諸記録の集成。冒頭に嘉永三年十月の観世新九郎豊成の「改法序書」、ついで享保十二年に大塚村を拝領し、翌年に諸手続を完了した際の諸文書の写し、嘉永三年の百姓との間に取り交わした諸文書や新たに定めた事項の写し、嘉永四年に稲垣松三郎が現地で取捌いたことの報告、関連諸文書の写しまでが主体。その末に「改格年以後年々収納米代等金高略留之口(安政二年まで)、その他嘉永以降の記事が追記され(以上同筆。豊成の手ではない)、最末部の万延元年・子年(元治元年)の記事は別筆。新九郎家の領地関係の文書の基本資料。

(a) 嘉永七年筆、万蔵所持田所有者変更に関する覚 一通

(b) 「大塚村田畑定免割付」 一通

松下伊久間知行所の年貢高を田畑の種別に記載する。同人方用人柘榴万兵衛から稲垣松三郎が貰い受けたもの。新九郎家知行所の年貢が比較的低かったことが知られる。

58 慶応三年筆『武蔵国葛飾郡之内郷村高帳』 一冊

慶応三年八月付で観世新九郎豊成から観世大夫を通して御勘定所へ提出した書類の控。安政四年から慶応二年まで十年間の、年貢収納高の報告。平均が米拾七石余、永七貫余。

六 故実書・雑書(冊子本その三)

1 寛永十八年元信筆「小鼓故実書」 一冊

仮綴の大本(283×200)。共表紙の表に目録、裏に識語と署名(寛永拾八曆初秋十二日 重俊(花押)があり、「服部長吉殿」などの追記もあって、五・一・九・一〇と同じく元信(初名重俊)が子の長吉に相伝した本の一つ。共表紙余白に「二冊之内 下」とあるが、上冊に相当する書は散佚したらしい。小鼓荒胴コノミツカスルヤウノ事、ツバミ所々ノ名ノ事、筒ツキ名ノ事、名胴ノ名・作者之事、革ノ事、調子ノ事付カケヤウノ事、縮物之事、スワウスギヤウノ事付サヤウノ事、ツバミ袋ノ事、同箱ノ事、床木ニカケヤウ、小サ刀サシヤウノ事、スワウキテツバミ打ヤウノ事など、鼓関係の故実説をやや雑然と書き連ね、全22丁。末尾にも朱筆で「寛永拾八孟秋六日 観世勝右衛門重俊(花押)」と奥書がある。

2 江戸中期筆「大小之図式」 一冊

仮綴の大本(284×207)。共表紙に題記。奥書なし。小鼓手内方・小鼓結目方・大鼓之図を彩色で画いて説明した後に、小鼓調仕掛様之事、大鼓仕掛様之事、青襖小刀床机掛様之事、囃子之時鼓取様之事、メ物解様之事、床机ニ掛ル事、素袴仕様之事、式三番御前ニテ打様、鼓箱袋之事などの故実説を連ねる。

3 観世新十郎豊政筆「鼓之簡之見用之事昔名判ノ覚」 一冊
仮綴大型枕本。共表紙に題記と「観世新十郎」の署名がある。

「簡之作覚」と「新作」の項に分け、作者名ごとに、金額と特徴を注記する。後半は次郎大夫国忠以下九名の囃子方の花押を集めてある。奥書が無いが、次本によって豊政筆であることが知られる。豊政は天和二年歿。

4 元禄五年宝生弥三郎信堅筆「簡見合判鏡之覚帳」 一冊

前本とはほぼ同装。前本を忠実に写した後に「右観世新十郎書置候ヲ書写者也 元禄五年申ノ六月廿一日 宝生弥三郎信堅(花押)」と奥書がある。また奥書のあとに豊勝・豊重・豊政・豊房の花押を追加する。信堅は豊政の弟。

5 江戸後期筆「簡之覚」 一冊

袋綴の小型枕本(83×153)。水色模様表紙に題記。新九郎家所蔵の小鼓胴の名称(塗りや蒔絵)と作者名の記録。宝暦四年の年記もあるが、訂正・加筆が多い。

6 嘉永元年観世新三郎豊成筆「道具類留書」 一冊

袋綴の小型縦長本(170×85)。青表紙に題記。料紙は薄葉野紙。沓挺入鼓箱・式挺入鼓箱・床几・小鼓筒・押領筒の目録と、御預り御鼓ヲ乗ル箱之寸法書、松平右近將監殿鼓箱之銘。前本を参照しており、末に嘉永元年孟夏の豊成の奥書がある。

(a) 鼓筒七種書付(前本に封入) 一枚

7 万延二年豊成編「鼓筒名鈔」 一冊

袋綴の半紙本。格子模様表紙。斐紙題箋。1〜6など家伝の書物から鼓胴に関する記事を抄写し、集成を意図した書。末に「万延二辛酉年孟夏良日 豊成(印)」とあるが、その後の書き加えもある。作者や名物胴についての記事が多い。

8 文久元年豊成奥書「楽器鈔」 一冊

袋綴の美濃本。格子模様表紙。黒梓題箋。楽笛名物目録、諸家伝来の能笛の目録、小鼓・大鼓紫調御免役者の記録、諸家伝来小鼓名物筒目録、鼓作者名、大鼓・太鼓名物筒目録など、楽器関係の故実を集めた書。奥書「文久元年辛酉年八月良辰 豊成」。

9 元治元年豊成筆「謡曲仮面抄」 一冊

袋綴の中本。水色地格子模様表紙。朱色模様入り題箋。仮面名始(出目仲満志秘書)・仮面譜(喜多古能著)・観世方作面(寛永十年識語)・金春方作面(金剛方面・宝生方面)以上三種は寛文元年宗与在判の文書の写し等の能面関係諸書の合写。「右仮面之書、当流家ヲ統一子之外、他見有間敷者也」の識語と、「元治元年甲子年八月良辰写之 豊成(印)」の奥書とが、別々にある。仮面譜以外はこれまで知られていなかった能面資料。

(a) 仮面名始に関する豊成書付 一枚

9に封入。文政十二年八月大蔵弥太郎虎文奥書本を大蔵千太郎より差越し、元治元年に写した由。

(b) 仮面譜に関する書付 一枚

9に封入。同書成立年代に関する豊成の考証。

10 慶応三年豊成筆「仮面作者附」 一冊

仮綴中型横本。共表紙に題記。内題「仮面作人」。ほとんどは喜多古能の「仮面譜」と同内容ながら、末尾に同書にない記事があり、「代々花押」をも付載した末に「于時文政十二己丑年七月調」とある。書写奥書は「慶応三年十一月日写 豊成」。

(a) 仮面書四種に関する豊成書付 一枚

10に封入。自己所持の四種の本に関する書付。10と同年記。
11 文政八年金春裕年奥書「手術要」 一冊

仮綴の中型横本。共表紙に題記。「稽古之条々」と「撃鼓要」の二部から成る鼓伝書。心がけ的な記事が主体。末に日吉宣哉から草鹿宣昭君への奥書(年記なし)があり、続いて「此書は祖父日吉宣哉より大聖寺家中草鹿宣昭殿江認メ被遣候書、当次郎殿江戸出府之節持参被致被為見候ニ付写置もの也 文政八酉年卯月上旬 金春裕年(花押)」とあるが、花押は模写らしく、薄葉紙を用いて影写した本らしい。金春裕年については不明。

12 弘化三年豊成奥書「倭楽抄」 一冊

袋綴の中本。紺表紙。白題箋。「宝永庚寅仲秋日 源良顯識」と奥書のある猿楽縁起説の写し。庚寅は宝永七年。源良顯は跡部良顯か。書写奥書「弘化三丙午年林鐘吉日 豊成(印)」。

13 嘉永七年豊成筆「秦曲正名関言」 一冊

袋綴の美濃本。紺表紙。黒梓題箋。宝暦十年序跋、北門氏勃海茂兵衛著の版本『秦曲正名関言』の影写本。奥書「嘉永七甲寅年林鐘良辰 豊成(印)」。

14 慶応三年高安澄信述「猿楽愚考」 一冊

仮綴半紙本。共表紙に題記。「猿楽」「散楽」「さるがう」について考証した書。末に「慶応三丁卯年十二月 浪華住人 三世高安澄信」とあり、別に豊成の筆で「右之猿楽愚考一冊へ大蔵虎長門弟高安又市ト云人ノ父ノ述タル書也」とある。

15 文久元年豊成奥書「翁立之伝受」 一冊

仮綴半紙本。共表紙に題記。流布の多い「申楽翁大事」系統の

式三番縁起説で、末に「宝永四丁亥年秦正良辰」とある。別に「右之本書者当空前代より持伝タル所、殊之外虫喰テ中ニハ文字ノ見分り難キ所保有之候故、其所ヲ闕字致シ写シ置者也。文久元年辛酉年五月良辰写改 豊成(印)」と書写奥書がある。

(a) 文久二年六月豊成筆「翁立之伝受書付」 一通
13に封入。前本の闕字や誤字などについての考証。

16 元治元年豊成奥書「猿楽伝記」 一冊

袋綴の美濃本。薄茶縹模様表紙。黒梓題簽。『猿楽伝記』の一異本。内題は「猿楽伝」。末に「右猿楽伝記ハ其原何人ノ編集シたる者にや。実にたしか成ものにもあらねど、事にふれて何彼の見合せ心得にもなるべき事もやと、不図見当りしを幸いに又誤字など有様なれど、只其儘に写し置ぬ。もっとも虚説の多きといふ由ハ、彼嬉遊笑覧といへる書にもいひてあれば、そをよく心して見るべき者也。元治元年甲子年林鐘上旬 観世豊成(印)」とある。上欄の見出しなど次本を参照して後に加筆したらしい点もある。

(a) 狂言関係書付 二枚

前本に封入。脇本家と狂言初りについての書付。

17 元治元年豊成奥書「倭楽伝記」 一冊

袋綴の半紙本。水色地格子模様表紙の左上に題簽。本書も『猿楽伝記』の一異本。前本を参照してはいるが別の本が底本らしい。末に前本に似た識語(冒頭が「右倭楽伝記は普通に猿楽伝来記と云る書にて、本誰人の…」となる)があつて「元治元年甲子年初秋中旬 秦豊成(印)」とあるが、そのあとに「元治元年

子年水月中旬写之 催花堂藏書(印)」とある。豊成(催花堂)が六月に書写し、七月に識語を加えたのであろうが、16・17と同年に連続して同じ書を写していることになる点が不審。

(a) 倭楽伝記関係書付 二枚

17に封入。喜多長能の事と嬉遊笑覧のことが一枚。新九郎家関係の記事の誤りの訂正が一枚。

(b) 年豫に関する書付 一枚

これも17に封入。「年豫」は「年預」なるべしとの説。

18 「能ト云事之考書」等四種合綴本 一冊

仮綴半紙本。「先代旧事本記之内抜書」(慶応元年乙丑年仲夏豊成)、「貞丈雜記之内抜書」(小太郎豊好)、無題猿楽由来(明治四年頃大蔵虎年筆らしい)、「能ト云事之考書」(嘉永六癸丑年林鐘上旬 観世新九郎豊成)の四種の仮綴本を合綴したもの。末の一冊は諸書からの能楽起原説関係の抜書。

19 前田齊泰撰「能楽記」 一冊

仮綴半紙本。共表紙に題記。芝公園能楽堂正面に掲げてあった額に書かれていた明治十四年三月付の漢文体の文。能の歴史を概説し、雅なる所以を説いた内容。朱筆で訓点を加えてある。

20 元治元年豊成奥書「嬉遊笑覧」(巻五) 一冊

袋綴の美濃本。水色地格子模様表紙。斐紙題簽。宴会・歌舞の項から成る巻五のみの模写本。奥書「元治元年甲子年林鐘良辰 豊成(印)」。筆者は豊成とは別人。

21 文久二年豊成奥書「白石遺稿之内書抜」 一冊

袋綴の美濃本。灰色地格子模様表紙。斐紙題簽。新井白石著の

『楽対』と『俳優考』とを合写したもの。奥書「文久二年壬戌卯月吉辰 豊成(印)」。筆者は豊成とは別人。

22 文政十二年筆「天下は天下の論」他 一冊

袋綴半紙本。水色表紙。打疊り模様題簽。室直清(鳩巢)の「天下は天下の論」と、寛永三年徳川家光上洛の際の二条城への行幸の記録たる「二条行幸之記」の合写本。題簽には両書の名を並べる。「御当家御代々御院号出所」なども合写。奥書「文政十一年仲夏写之土肥氏 文政十二丑年早春写之 茂呂金朝」。

23 江戸末期筆「中将姫一代記」 一冊

袋綴の半紙本。渋塗り茶色表紙。大版題簽。寛政十一年の灌河道人の序のある書(版本か)の写し。奥書なし。

24 豊成筆「催華堂雜記」 一冊

袋綴の半紙本。薄茶色表紙。絹白題簽。催華堂は豊成の雅号。山東京伝の『骨董集』からの抜書、宣長の『古今集遠鏡』からの抜書、その他諸書からの抜書が主体で、内容は多岐に亘り、芸事・謡曲文章に関する事項も含まれる。所領関係の書留、書物目録などもある。奥書なし。

25 天保三年「御謡初御給仕書」 一冊

仮綴の中型横本。天保三年正月三日の江戸城での謡初の記録。十七献の酒宴の次第と役人の名が主体で、芸事関係は一切書かれていない。共表紙左下に「松平伊織」とあるのが筆者か。

26 江戸末期筆「正月三ヶ日営中酒宴次第・役人付」 一冊

仮綴の小型横本。共表紙に「正月朔日」と題し、右端に「扣」「組頭」などとある。三ヶ日の江戸城内の酒宴・謡初の式次第

と勤仕する役人名の詳細な控。人名から見て内容は弘化四年頃のもの。謡初の四海波は観世鉄之丞。

27 豊成所持「年中衣服略記」 一冊

仮綴小型枕本。共表紙に題記。一年中の公儀関係の出仕日に着る用する衣服を、月別・日別に小字で記したものの。末に「豊成」の署名がある。

(a) 弘化四年西丸出仕メモ 一枚

衣服のことがあり、宝生流盛久についてのメモと併記。

28 文化十年正月改「年中諸式控」 一冊

仮綴の枕本(大幅帳式)。共表紙に題記と年記がある。観世新九郎家の年間の行事日(元日・節句・晦日など)の料理献立や配り物等の目録。弘化元年の歳暮の出した分と到来分の品名・人名目録など、後年の加筆もある。

29 天保十三年以降「年中行事」 一冊

前本とはほぼ同装。題記は「盆暮之覚」を書き直したもの。年記は「天保十三壬寅年 七月吉日」。内容も前本と同類であるが、朱筆をまじえた加筆が多く、詳細・雑然となる。表紙の追記に「此帳面ハ雑ト草稿故能々増補シテ本帳ニ認メ可置者也」とある。追記の類が豊成の筆。

30 嘉永四年以降「年中行事覚帳」 一冊

小型枕本(75×103)。袋綴。青表紙に題記。28・29と同じく、新九郎家の年間諸行事に関するメモ帳。冒頭に「嘉永四亥年改此長ニ印置候を手本ニ致候事」とあり、慶応三年の記事まである。最終記事は「たくわん塩之覚」。

31 安政五年筆『年中定例記』 一冊

仮綴中本。共表紙に題記し、また「安政五戊午書」「正忠書」ともある。七月から十二月までの定例行事や進物などのメモ。

豊成の加筆が多く、筆者の正忠が、湯浅平次取立の門人稲垣松三郎(後に蔭山昌蔵)であることも、豊成が末に明記している。

32 正月二月定式事書付 一冊

仮綴の半紙本。共表紙。題記なし。正月元日から三月三日までの観世新九郎家の定まった行事についての書留。幕末の書。

33 明治三年豊成筆『古今和歌集等書拔』 一冊

仮綴中本。共表紙。ほとんどは古今集の歌の書拔。

34 筆者不明『七夕七々吟』 一冊

仮綴美濃本。共表紙に題記。第一行に「星夕七々の吟 冷泉為村卿」とあるが、歌は47首。誰かの筆跡の代表として残されたものらしいが、筆者・年代不明。

七 謡本・狂言本(冊子本その四)

1 豊和(豊照)所持観世流『独吟』 六冊

袋綴の小型中本。水色表紙。題簽には各冊とも「独吟 青」などであり、青黄赤白黒紫の六冊。朱で詳細な直しを加えた観世流乱曲の謡本で、全冊見返しや末に豊和(豊照の前名)の署名や印があり、赤の冊に「文化元初秋下二日」、黄の冊に「文化甲子季秋十一日」、白の冊に「文化二乙丑年七月廿二日」の年記もある。(青)玉とり・近江八景・和国・四季・鼓の滝・香椎・高野物狂・さねかた。(黄)定家一字題・内府・須磨源氏・徑山寺・嶋廻・阿古屋松・上宮太子・反魂香。(赤)哥占・松浦物狂・舞車・賀茂物狂・隠岐院・飛鳥川・由良物狂・博多物狂。(白)横山・更科・五輪碎・太刀堀・兵衛・星・蛙・笠取・舟立合・弓矢立合。(黒)初瀬六代・東国下・西国下。(紫)願書・起請文・勧進帳。以上40曲を収め、貞享四年奥付の山本長兵衛刊『乱曲集』(付三曲・三説物)に、白の冊の太刀堀以下の七曲を加えた形。強弱の指定もあり、20曲の謡い出しが「ヨハク」。本文は豊和とは別筆。

2 豊照所持薄茶色表紙観世流謡本 三冊

七騎落。住吉詣。よろ法師。袋綴の半紙本。長形題簽。各冊とも末に「豊和(豊照前名)」の印があり、住吉詣は鼓の手付を書入れた緑色で「文化九壬申年十一月朔日 豊照(花押)」の署名もある。他二冊は朱や黒の直しのみ。節付は観世流。

3 豊照所持下掛り二番綴本(喜多撰待・金剛淡路) 一冊

前本とはほぼ同装。題簽には「淡路」とのみある。両曲とも末に「豊和」印があり、朱や緑で鼓手付を書き加えてある撰待の末には緑で「文化八年四月於神田橋ニ勤(花押)」と豊照の署名がある。内題に「喜多」「金剛」を注記。

4 豊照所持観世流二番綴本(千手・道明寺) 一冊

袋綴の半紙本。茶色表紙。二枚の曲名題簽を並べる。千手にのみ前本等と同じく「豊和」印がある。両曲とも朱筆で鼓の手付を書き込む。

5 嘉永七年豊成筆金春流謡本『富士山』 一冊

前本とはほぼ同装。末に「嘉永七甲寅年弥生良辰写之 豊成(印)」とある。内題に「金春流」と肩書。

6 幕末筆宝生流習物十二番綴謡本 一冊

大原御幸・碓・卒都婆小町・鸚鵡小町・木賊・望月・石橋・道成寺・鷲・娘捨・松垣・関寺小町。袋綴の半紙本。格子模様表紙。絵入り横型題簽。薄葉紙。宝生流の習物のみを集めた本。豊成筆(版本の影写)らしく、首部五曲には観世流や謡抄を参照した注記がある。鸚鵡小町には墨筆や緑でかなり詳細な鼓手付が書き込まれており、文久二年四月二日に豊成が勤めた際の書入れもある。木賊・石橋・娘捨・関寺小町以外の八曲に朱の直しがあるのは、後代に服部小錦治が稽古した際のものらしい。

7 安政三年奥書金剛流謡本『礎潜』 一冊

袋綴の半紙本。桜模様磨出し紺表紙。打曇り模様題簽。内題に「金剛」と肩書。末に豊成の筆で「安政三丙辰年孟夏吉日 観

(以下破損)」と奥書がある。

8 豊成所持観世流謡本『江島』 一冊

袋綴の小型本。樺色表紙。打曇り模様題簽。「豊成」の印があるのみで奥書なし。

9 江戸後期筆上掛り謡本『弓矢立合』 一冊

仮綴中型横本。共表紙に題記。奥書なし。

10 江戸末期筆『奥習一調謡』 一冊

袋綴の半紙本。紫色表紙の中央に長形白題簽。目録初めの内題も同題。小鼓一調に謡う部分のみに詳細な観世流節付を加えた本。小鼓の手付は記入していない。奥書なし。蟻通・春日竜神・野守・山姥・碓・三輪・竜田・浮船・玉葛・江口・芭蕉の十一曲。

(a) 豊成筆頭越替手などに関する寛書 一枚

前本に封入。玉葛・山姥の一調の手付の事も混じる。

11 文化八年豊照奥書『大藏流能間ノ部并狂言会釈』 一冊

袋綴の中型横本。紫色表紙の右に題簽。間狂言の鼓が関与する部分の文句(下掛り節付)二十二曲分と、狂言で鼓が関与する部分の文句五十四曲分(同上)を抜書し、囃子事についての注記を加える。奥書「文化八辛未年八月 豊照(印「豊和」)」。

12 江戸末期筆『鷺流会釈狂言謡』 一冊

袋綴中型横本。灰色地格子模様表紙の中央に題簽。囃子の会釈が入る狂言六十五番分の文句・節付を抜書し、大半の曲に鼓の粒付を墨(大鼓)と朱(小鼓)で書き込む。次本と一対の書。奥書がないが幕末の写し。

13 江戸末期筆『驚流会釈狂言問語』 一冊

前本とはほぼ同装(表紙は次本と同じ)。問狂言で会釈が入る部分の抜書と節付二十一曲分(別に「末社」共通の語)。題簽の注記によれば、前本が甲、本書が乙にあたる一対の書で、本文も同筆ながら、本書には粒付が書き込まれていない。

14 慶応三年筆『大蔵流問』 一冊

袋綴の中型横本。水色地格子模様表紙。墨流し模様入り題簽には「問之部 上(下)」とある。内題は両冊とも「大蔵流問」。

奥書が無いが、次本と一揃のものに相違なく、本書も慶応三年の書写であろう。上冊は脇能・修羅・三番目、及び四・五番目物の一部で一〇二番、下冊は四、五番目物で一〇三番、計二〇五番の間狂言を収め、幕末頃の諸流上演曲のアイがほとんど全部収められている。但し習い間の分が無く、それをまとめたのが次本。

15 慶応三年筆『大蔵流習問』 一冊

袋綴の中型横本。11と同じ紫色表紙。前本と同じ題簽に「大蔵流習問之部 全」とある。前本と同筆。末に跋文があって「慶応三卯文月」と年記がある。習物の間のみを集めた冊。平間一役之部(玉井・輪藏福部神・江島道者・夜討曾我・船弁慶・替間之部(雲林院・大社・輪藏・江嶋・殺生石・加茂御田・白髭道者・白楽天鷲蛙・嵐山猿蟹)・習替間之部(八嶋那須・船弁慶名所教・芭蕉葉草喩品・半部立花・安宅貝立貝付)・習間の部(春日竜神草・朝長草・道成寺・望月)・重習問之部(春日竜神町談・朝長懺法・土車打切・石橋)の五部に分けて27種の間狂言の語

りやセリフを収める。

16 大蔵弥太夫筆『船弁慶問船ノ中間答』 一冊

仮綴半紙本。共表紙に題記。別に「大蔵弥太夫書」とも墨書。弥太夫は宝生座の狂言方。末に「文久二戌年 豊成」と署名がある。

17 万延元年豊成筆「船弁慶驚流セリフ」 一冊

仮綴半紙本。共表紙に「船弁慶波頭并前後アイシ之内脇狂言セリフ 驚仁右衛門方」と墨書。末尾に「万延元年 豊成」と署名がある。

18 服部小錦治筆『爪盗人』 一冊

袋綴の半紙本。青表紙。白題簽。明治末か大正初年の写本。流儀は驚流らしい。

観世新九郎家文庫目録 (中)

八 実技関係手付類 (冊子本その五)

1 江戸中期筆「秘」印小鼓伝書 上中下三冊

仮綴(袋綴風)の美濃本。共表紙。奥書が無いが、現れる人名などから宝永正徳頃の書写と見られ、多分新九郎恭豊の筆であろう。習事・秘曲の類の小鼓手付集。三冊とも表紙に豊成が「秘(有替印三卷之内)」と墨書しているのにふさわしい伝書。三冊一筆。後人の書入れや貼紙訂正も少々ある。一部に朱筆入り。上巻は鸚鵡小町・木賊・卒都婆小町・小原御幸・関寺小町・檜垣・娘捨の七曲の手付(粒付・手付・心得の類が混じり、詳細)が主体で26丁。末尾に八頭の大小の手付を付記する。中巻は「習事書」と題し、道成寺(すこぶる詳細)・乱・両役の流し・三説物色々・流八頭色々・半流色々・横法・二段返・安宅延年・三ッ頭・大返シ・鷺・白拍子・本下略・半下略・白鶴

・金剛返・送留・翁無・本開口・半開口・置鼓色々・平調返りの各習事について、粒付の類をまじえ、大鼓・太鼓の手付をも併記したりして詳述する。本文33丁。

下巻は「老調之集」と題し、江口・野宮・熊野・玉葛・三輪・龍田・海士・鶴飼・蟻通・放下僧・太刀堀・香椎・須磨源氏・松浦物狂・王取・反魂香・俊成忠則・賀茂物狂・高野物狂・碓・卒都婆流・善知鳥・藤戸・白楽天・道明寺の25曲の一調謡の手付。文句の右に粒や手を書き入れ、別に一調一管の際の注意などを末に書き添えた曲もある。本文38丁。

(a)「秘印」三卷之書に関する豊成書付 一枚

前本に封入。「元禄比之物成(ベシ)」と言う。

2 江戸後期筆「習事秘書」 一冊

仮綴の中型横本。共表紙に題記。装幀を同じくする次本と一対の書らしく、豊成は「習(有替印)式冊之内 上之巻」と表紙に墨書を加えている。習物の手付で、文句の要所を抄写して墨筆で手付や粒付を書き入れる形。式三番(全文を引く)・放下僧小

5 江戸後期筆「風鼓秘曲集」 天地人三冊

袋綴の半紙本。紺表紙。切箔散らし斐紙題簽。奥書なし。文章での説明と粒付・手付を混じて記す小鼓の秘伝集。天の冊は、式三番・脇能置鼓・礼脇・開口・風流・半開口・座敷開口・僧開口・翁無・狂言置鼓・法会舞・五段次第・五段一声・本流・八頭・修羅置鼓・三番目置鼓・見掛置鼓・四段次第・刻詰次第・着々道行・上り僧下り僧・平調返・甲ノ掛・真物着・半流・白拍子・白鶴・延年・笏ノ舞・懐中・膝行・見留・合掌留・送り留・大返・半返・二段返・下略・半下略・雷声・諸口伝・次第一声名・打様心持・稽古心持・能動大意・能始り・鼓矢声・拍子真理・用鼓文字・船立合・弓矢立合の諸項(目録による)から成り、1など家伝の諸書に基づいて整理したものらしい。地の冊は、横法・乱・鷺・道成寺・石橋・望月・鸚鵡小町・木賊・伯母捨・檜垣・関寺小町・読物を収め、秘曲の手付集。人の冊は、一調手付集と言うべき内容で、三井寺以下82曲の文句抜書に手付を書入れた部分が主体で、冒頭に一調打様之事、末に謡無き時の一調・蘭拍子一調が付加されている。

6 豊綿筆「聞曲一調書」 一冊

袋綴の中型横本。共表紙に「曲舞」と題記。奥書が無いが、末に「豊綿様御寛書也 和(草名)」と豊和(豊照)の識語があり、豊綿文政八年没(筆と見られる。聞曲(曲舞謡)の文句を書写し、朱で手付・粒付を書き込む。香椎・上宮太子・須磨源氏・俊成忠度・実方・鼓滝・嶋廻・近江八景・賀茂物狂・松浦物狂・初瀬六代・歌占・玉取・径山寺・隠岐院・同・舞車・同・横山・

4 江戸後期筆「小鼓寛書」 一冊

仮綴小型横本。共表紙の題記は見返しの付記「此小鼓寛書ハ豊照書物之内ニ入込有タル書物也」と共に豊成の加筆。2の「習事秘書」と同筆。「小鼓替手」と首書した個々の曲の要所の替手の手付・粒付(文句を抜書して手付を傍記)や半越などの粒付、柏崎笹ノ拍子等の諸記事、一調謡の要所の手付・粒付(上宮太子・玉取・鼓滝・松浦物狂・横山・三井寺・放下僧等の11丁が前半。余白四丁を挟んで後半は「聞書之覚」と題する文章体の諸心得約30ヶ条七丁(江口一セイ、江口クセマイ、道明寺脇能ニスルトキ、卒都婆小町ノ次第ノ事、本ノ頭ノ事、有紋無文ノ囃子など)。

太刀堀の20曲を収めるが、*印の二曲には手付が無い。見返しに豊成の筆で「闇曲一調書 豊綿」とある。

7 江戸後期筆青表紙大本「式三番翁立」 一冊

袋綴。表紙には題記なく、本文冒頭に右の如くある。式三番の詳細な小鼓手付で、故実作法の類も記す。△○○ツチの記号に掛声を傍記して、頭取・胴脇・先手の三分の粒付を並べて書き、語の文句もある。三番翌の部分の粒付はやや簡略。白紙一丁を置いた末尾に「瀬戸氏源義堅秘而写之」とあるが、瀬戸義堅については不明。以下三本と同内容で、ことに次本とは文字づかいまで酷似する。先後関係が不明確ながら、本書を転写したのが次本らしい。文化八年奥書の10よりは早い時期の書写。

8 江戸後期筆中型横本「式三番翁立」 一冊

仮綴。無表紙。前本と同内容で、末に瀬戸義堅の識語もある。①ではなく②を用い、掛声が「エイ」ではなく「ヘイ」となるなどの相違はある。前本との先後関係が不明確ながら、稀に記事の脱落があり、本書が転写本らしい。

9 江戸後期筆仮綴大本「式三番翁立」 一冊

共表紙に題記。①を②に改め、一部の文字が違い、掛声が前本同様「ヘイ」になっているが、7の影写に近い転写本で、字配りはすべて7と同じ。末尾の瀬戸義堅の識語は無い。

10 文化八年豊照奥書「翁打方」 一冊

袋綴の大本。薄茶色表紙。雲母模様題簽。題簽の書名は違い、冒頭の見出しも「式三番翁」と改めているが、内容は前三本と同じく、7の模写本と認められる。但し粒付は記号ではなく、

大鼓の分^①以外にはホ・タ・チ・フ・ツの文字で示す。末尾に「文化八年八月廿一日 観世豊照」と奥書がある。前三本に無い加筆が少々あり、注記などに朱筆を用いる。

11 享和三年豊和奥書「習事書」 一冊

袋綴の小型枕本。薄茶色表紙左端に題簽がある。料紙は薄葉紙で、本文墨付16丁、余白28丁。最終丁に「享和三^改年三月十一日 観世豊和(花押)」と奥書があるのは、最初の記事と同じ頃書いたものであろう。その後書き継いだもので、文政年間の演能に基づく記事が多い。礼ワキ粒付・三番目置鼓調留粒付・観世方道成寺乱拍子粒付・檜垣之事・角田川念仏之打様之事・松風見留・大返・宝生望月ノ段之事・今春流乱七段・宝生道成寺之事・朝長饑法之事・昭君之事・観世方望月・延年舞など、習事に関する手付や心得が主体。末部の嘉永二年の宝生海人懐中舞と宝生老松紅梅殿の記事は豊成の加筆。

12 享和三年豊和奥書宝生流「望月」手付 一冊

仮綴半紙本。無表紙。宝生流寛政版を影写し、朱筆で小鼓手付を書込む。末尾に「享和三年十月十八日 観世豊和」と奥書。

13 江戸末期筆宝生流「望月」手付 一冊

仮綴半紙本。無表紙。前本の模写。朱の手付は若干用語などを変更している。奥書が無いが手付は豊好筆らしい。

14 文化頃豊照筆小鼓手付入り習事五番謡本 一冊

袋綴の中本。薄茶色表紙。長型題簽に曲名を列記。観世流節付で恋重荷・砧・卒都婆小町・檜垣・鶯の五番の謡曲を書写し、

(b) 豊成筆喜多流望月相違部分書付 一枚

(c) 宝生流蘭拍子粒付その他書付 二通

(d) 天保三年豊成筆道成寺次第書付 一枚

(e) 弘化三年豊成筆道成寺急ノ舞書付 一枚

(f) 豊成筆道成寺間狂言とワキ・シテ掛合文句 一通

16 文化年間豊和筆、芸事覚書 一冊

仮綴小型中本。共表紙中央に「他見無用」、右に「文化元年甲子三月吉日」、左下に「観世豊和」と墨書。芸事に関する断片的メモ帳で、相手役流儀による相違についての事項が多く、狂言の囃子の事も多い。文化三年の記事もある。

17 文化三・四年豊和筆「覚帳」 一冊

仮綴の中型横本。共表紙。表紙や後表紙の墨書によれば文化三年十一月から翌年十一月にかけての豊和の芸事メモ帳。冒頭部は、真序藤田・盤渉楽同・乱同・乱春日の笛唱歌。続いて朝長・柏崎・陀羅尼落葉宝生・仏原・小塩・野宮・葛城・歌占・大瓶・猩々・羽衣・夜討曾我・逆鋒・東北・胡蝶の手付(比較的簡略)や断片的諸記事など。表紙に「他見無用」とある。

18 豊和印喜多流「御装濯」手付 一冊

袋綴の半紙本。茶色表紙。白題簽。近衛流書体で御装濯の謡本(節付喜多流)を書写し、朱筆で手付や粒を書込む。末尾に「豊和」印がある。手付は簡略。

19 豊和署名観世流「文上」手付 一冊

仮綴の大本。共表紙に題記と「豊和」の署名がある。観世流文上の詞章を書写し、朱筆で簡略な手付を書込む。

空欄や行間に墨・朱・萌黄色の三色で手付や粒を書き込む。五番の曲名を列記した扉に「豊和」、末に「豊照(花押)」と署名があり、謡本を書写したのは豊和時代の豊照であらうが、豊成による後代の加筆も多く、萌黄色の分はほとんどそうらしい。朱筆はほとんど豊照の筆。恋重荷の末に文化十年の記事、卒都婆小町の末に「享和三五月 豊和(朱筆)」の署名、檜垣の末に「享和元年二月十六日夜□之」の識語がある。左の八点の文書を含み込む。

(a) 砧「宮漏高く」前後の手付に関する文政十一年書付 一枚

「一通り弟子へ相伝之分」と豊成加筆。

(b) 宝生流砧「ほろほろはらはら」の部分の手付に関する豊成書付 一枚

(c) 豊照より鉄之亟あて砧要所手付に関する書付 一通

(d) 文化六年九月八日付伊右衛門あて砧クセ書付 一枚

(e) 文化二年豊和筆卒都婆小町立回り前後昔の手付 一枚

(f) 豊照(朱)・豊成(墨)兩人筆檜垣要所覚書 一枚

(g) 檜垣後場の要所の手付に関する書付 一通

(h) 豊成筆檜垣「いつをかざるならひぞや」の部分の書付 一枚

15 文化元年豊和奥書手付入り謡本 一冊
望月・道成寺・石橋の三番綴。袋綴の小型中本。薄茶色表紙。題簽に三番の曲名を列記。観世流節付の謡本に朱や緑や墨で手付や実演の記録を書き入れている。「文化元^{甲子}年葉月日 豊和(印)」と奥書。左記六点の文書を含み込む。

(a) 慶応三年豊成筆喜多流望月書付 一通

20 江戸後期筆観世流「夕顔」手付 一冊
21 江戸後期筆観世流「正尊」手付 一冊

両冊同装で、仮綴半紙本、無表紙。ともに観世流譜本を模写して手付を朱筆で書込む。奥書は無いが豊和筆か。

22 手付入り六番合綴本 一冊

袋綴の半紙本。六番の曲名を列挙した厚表紙は後補のもので、性質を異にする手付入譜本六冊をもとの表紙をも残して合綴した本。感陽宮以外の諸曲には小鼓手付が書き込まれているが、精粗の差が大きい。次の諸曲を収める。

〔金剛流富士山〕 薄茶色表紙。手付簡略。「豊和」の印がある。

〔観世流版本感陽宮〕 共表紙。奥書の類なし。

〔宝生流調伏曾我〕 共表紙。奥書はないが、朱と緑で書き込まれた手付は豊成の筆。

〔宝生流歌占〕 共表紙。手付は墨・朱・緑の三色・奥書「天保三辰年五月 豊成」。

〔宝生流小鍛冶〕 共表紙。「文久三辰年正月 豊和」と奥書があるが、朱・墨の小鼓手付は豊成の筆。

〔上掛り求塚〕 共表紙。譜本は観世流節付。末に朱で「文化四丁卯年四月十八日 豊和」とあるが、三色の手付のうち緑の分は後年に豊成が書き入れたもの

23 文政九年豊照筆「色々扣」 一冊

色紙大の升型本。大和綴。打墨り模様のある色紙四倍大の紙を折り重ねて料紙に転用している。共表紙中央に題記し、右上に「文政九年二月二日」、左下に「観世九郎豊照」とある。井筒一

セイノ事、乱拍子観世大夫方弟子ニ相伝之ケ手付、野守白頭之事の三ヶ条を記すのみで、全八丁のうち六丁は白紙。

24 文政十二年豊成所持脇能六番手付 一冊

仮綴の中本。高砂・白楽天・養老・加茂・難波・弓八幡の六番の囃子所の文句を抜き書きし、間拍子・手付・心得を書き込む。曲名を列記した共表紙左下に「豊成」、本文末に不明の花押、後表紙に「文政十二年正月十八日」とある。豊成は豊照の長子で豊紀の養子だったが、文政十二年十二月廿一日に歿した。手付が豊成筆か否か不明確。

25 文政天保年間豊紀筆「習事扣」 一冊

袋綴の中型横本。黄土色表紙に題記。見返しに「観世新九郎豊紀(花押)」とある。文政四丁天保十二年の年記が散見し、長期にわたる豊紀の芸事書留。首部の笛唱歌は前本と似る。以下個々の曲の習事に関する記事が並び、宝生熊野三段之舞・朝長鑑法・重き道成寺・嵐山白頭・八島弓流・松竹風流など。後半は自己が勤めた際の記録。末尾五丁分は子の豊成の弘化三年・安政三年の道成寺出勤の書留。

26 天保年間豊成筆「一調扣」 二冊

袋綴の小型横本。青表紙。両冊とも表紙に題記し、一冊は「天保四 豊成」、一冊は「天保八西 豊成」の墨書がある。第一冊は江口以下25曲、第二冊は二人静以下30曲の一調手付集。かなり長期にわたる書写らしい。手付は朱筆が主体で墨筆も混じる。55曲のうち天鼓のみは嘉永七年本(14)に含まれていない曲。

27 天保八年豊成奥書、小鼓手付・太鼓頭付等 一冊

袋綴の小型中本。黄土色表紙。末に「天保八丁酉年正月下旬 豊成(花押印)」とあるが、かなり長期にわたって書き留めた芸事関係の書留集。弓八幡・西王母・東方朔・和布刈・嵐山・江の島の小鼓手付(謡の文句全文を写し、朱や墨で手付や心得の類を書き込む)、惣右衛門流の太鼓頭付(巻絹(惣神楽の笛の唱歌)・護法・伏見・船橋・陀羅尼落葉・車僧)、綾鼓手付(宝生歌)・護法・伏見・船橋・陀羅尼落葉・車僧)、豊千太鼓頭付、森田流節付で全文を書写して朱で書き込む、豊千太鼓頭付、森田流盤渉楽・同神楽・一噌流神楽、宝生流求塚譜本など。その他老経の全文、宝生流内外名寄、一調書上などもあり、断片的記事も多い。左の四点を封入する。

(a) 安政二年豊成筆松虫打上替ノ手配り 一通
(b) 楽・神楽の替手に関する豊成書留 一枚
(c) 天保十三年豊成筆小鼓起原に関する書留 二枚
(d) 融遊曲太鼓書付 一枚

28 天保十二年以降豊成筆「笛章歌并色々覚書」 一冊
袋綴小型横本。浅葱色表紙に右の題記と「天保十二丑年林鐘吉辰 豊成」の年記(後表紙にも同年記の観世新三郎豊成の署名)がある。前半は森田盤渉楽・豊之音取・序之舞カカリ・本ノ音取・掛りより盤渉楽・一噌盤渉楽・大ベシ・イロヘ・盤渉序之舞・五段神楽七ツゆりなどの笛唱歌が主体で、途中に文化十年

観世大夫山姥雪月花之舞の記録などの異質の記事も混じる。井筒物着・金春鶴祭・合甫一拍子・唐船・田村長胡床・紅葉狩替装束・宝生石橋通獅子・観世安達原急進之出・金剛高砂真之伝など、特殊な能や小書の型付・手付で、嘉永年間の演能記録に

基づく。最も新しい年記は嘉永六年。天保十二年以後嘉永末年までの書留である。左の二点を封入。

(a) 文久三年豊成筆岩船出羽等に関する書付 一枚
(b) 明治十三年梅若実所演の撰待に関する書付 一枚

29 天保十三年以降豊成筆「小鼓習事書」 一冊

袋綴の小型中本。水色表紙。赤色題箋。末に天保十三年五月の豊成の奥書があるが、その頃から文久三年にわたる期間の豊成の書留で、首部は豊綿・豊照・豊紀らの書留の写しが主体。途中から豊成自身の見聞・出勤に基づく書留で、習事に関する事が多く、鼓以外の事にもわたる。出勤した番組を記事の末に付載していることが多い。三輪誓納・江口替之打切・葵上梓之出・杜若素囃・宝生高砂作物など、内容多彩。左の文書を封入。

(a) 松風見留書付 一枚

(b) 豊成筆豊置鼓之事(笛唱歌と粒付) 一通

(c) 宝生杜若沢辺之舞一噌唱歌 一通

(d) 地拍子割付け粒付(若盤風野紙使用) 一枚

(e) 豊成筆宝生来殿金春流太鼓手付 一通

(f) 明治十一年豊成筆正尊起請文後半粒付 一通

(g) 延年之舞笛唱歌(カカリ・三段目) 一枚

(h) 卒都婆小町謡に関する書付 一通

(i) 宝生融酌ノ舞足取図(以上三種同封) 一枚

(j) 弘化四年豊成筆宝生流起請文手付(太鼓金春流) 一通

(k) 起請文手付 一通

- (l) 文政六年豊成筆宝生松風灘返し手付 一枚
- (m) 豊成筆杜若イロへ書付 一枚
- (n) 嘉永六年豊成筆宝生高砂作物書付(神舞手付等) 一通
- (o) 安政六年筆杜若恋之舞春日流唱歌 一枚
- (p) 万延元年豊成筆金剛石橋書付 一枚
- 30 天保十五年豊成筆書「当流色々扣」 一冊
- 袋綴の小型中本。水色表紙。有粋題箋。末に天保十五年の親世新九郎豊成の奥書があるが、天保年間の書付は首部のみ。大半は安政以降の記事で、末は明治十年。実演記録に基づく芸事関係の記事が大半ながら、故実の記事も混じる。末の三分の一は白紙。左の八種の文書を封入。
- (a) 三太郎流次第・一セイの手付 一枚
- (b) 狸々乱に関する考証 一枚
- (c) 宝生融遊曲金春太鼓書付 一枚
- (d) 金剛融遊曲金春太鼓書付 一枚
- (e) 慶応三年喜多六平太安宅・望月・狸々乱壺出番組 一枚
- (f) 明治十年豊成筆鐵法太鼓手付 一枚
- (g) 同右、森田流修羅音取唱歌 一枚
- (h) 宝生望月獅子大鼓・笛頭付(f)(h)の三点一包み 一枚
- 31 嘉永五年豊成筆宝生流「道成寺」手付 天地人三冊
- 仮綴半紙本。各冊とも共表紙に「嘉永五壬子年閏二月十六日」「豊成」「宝印三冊之内 天」などと墨書があり、三冊が一組のもの。天の冊は「宝生・道成寺」と題し、宝生流謡本を書写して朱筆・墨筆で手付や心得を書き込む。地の冊は「宝生・道成寺乱

- 拍子手付」と題し、乱拍子前後の詳細な粒付・手付。人の冊は「宝生流蘭拍子手配附」と題し、地の冊の草稿の内容。天と地の冊の末には表紙の分と同年記の豊成の朱筆奥書がある。
- 32 豊成筆親世流「道成寺」手付 一冊
- 仮綴半紙本。親世流道成寺謡本を書写(ワキ語りを省略)して朱筆(一部に緑・墨で加筆)で手付を書加えた部分が前半。後半は、蘭拍子片山九郎右衛門江引渡シノ分、安政四年青山下野守へ引渡シの分。見掛置鼓手付、三段次第手配り、乱拍子足づかい、蘭拍子打方など。豊成から乱拍子を相伝したシテ方や小鼓弟子の氏名、明治十二年の喜多流高田伊右衛門への相伝の事情なども付記。共表紙に曲名と「豊成」の署名がある。
- (a) 豊成筆親世道成寺乱拍子書付 一枚
- 33 豊成筆宝生流「来殿・浦島手付」 合綴一冊
- 仮綴半紙本。共表紙。別々の本だったのを合綴したもの。来殿は中入前からキリまでの詞章を書写し、朱・墨の両筆で手付を書き込み、末に嘉永五年正月に宝生弥五郎が雷電を改作すべく豊成に小鼓手付の改訂を依頼した際の文書の写しや、新之助方待謡などを付記する。浦島は後場の詞章に墨筆で小鼓手付を書き込む。
- 34 豊成筆宝生流「娘捨」手付 一冊
- 仮綴半紙本。共表紙に「宝生・娘捨」の題記と「豊成」の署名がある。宝生流寛政版を模写し、朱筆(一部は墨・緑で手付や粒を書込む。末丁に嘉永五年閏二月廿五日の宝生大夫所演の際の相違点(セイ・序之舞)を加筆。左の二点を同封。

- (a) 娘捨要所太鼓頭付(謡詞章に朱筆で傍記) 仮綴半紙本 一冊
- (b) 宝生娘捨金春太鼓手配(今夜のあきかせ…) 一枚
- 35 嘉永六年以降豊成筆「親世方能頭附」 一冊
- 仮綴半紙本。共表紙に題記し、「嘉永六甲寅年 二月辰辰 豊成」「草稿(通々ニ書也)」などと墨書。親世座の所演曲12番の曲名を一頁二曲ずつ五番綴謡本の組合せ順に列記し、各曲の舞や登場の囃子事の種類を注記した書。曲によって精粗の差が著しく、娘捨・鶯鷄小町・関寺小町・道成寺・木賊・石橋・恋重荷・磯・鷺・望月の十番は曲名のみの。朱筆をまじえ、長期にわたって書き込んだ跡が顕著である。左記六点の書を封入する。
- (a) 破之舞・太鼓物イロニ手付 一通
- (b) 雲林院ワキ謡書付 一通
- (c) 嘉永二年豊成等谷行(鉄之亟・彦太郎)書付 一通
- (d) 千手・土ぐも書付(五月晦日親世流番組裏) 一枚
- (e) 慶応三年筆第六天高安流道行 一枚
- (f) 羯鼓ヲ撃テ花ヲ催ス事(明皇雜錄抜書) 一枚
- 36 嘉永七年豊成奥書、謡本書入「新曲十三番手付」 一冊
- 袋綴の小型中本。青表紙。横型題箋に曲名を列記する。節付をも加えた親世流謡本(書体・書式は一樣でない)に朱や緑で詳細に鼓の手付を書き込む。曲の末や空欄に注記の記事も多い。代主・逆矛・忠信・禪師曾我・吉野天人・住吉詣・あぼし折・第六天・紋上・合甫・大瓶狸々・智言岩船・智言金札の十三曲。天明の新十番から恋重荷を除き、禪師曾我・紋上・岩船・金札を加えた形。奥書「嘉永七甲寅年正月辰辰 親世新九郎豊成(花押

- 印・朱印)。書き込みはすべて豊成筆。左記四点を封入。
- (a) 嘉永七年師走豊成筆メモ 一枚
- (b) 豊成筆鳥帽子折切組親宝両流手付 一枚
- (c) 豊成筆絃上「岩越す波」考証 一枚
- (d) 豊成筆絃上「嬰子もおどる」考証 一枚
- 37 嘉永七年豊成署名「一調伝書」 天地人三冊
- 袋綴(非線装)の半紙本。共表紙に題記。一調謡の文句を書写して朱筆で粒付や手付を書き加えた一調手付集。各冊に「嘉永七甲寅年林鐘吉辰 豊成」と署名があり、朱で手付を書き入れたのが豊成らしい。三冊とも「秘印三巻之内」と表紙に墨書する。天の巻は「内之部 常一調伝書」と題し、江口・高砂・難波・三井寺・雲林院・源氏供養・桜川・殺生石・籠太鼓・鳥追・土車・花筐・蟬丸・三井寺・小督・笠之段・網之段・玉之段・放下・善知鳥・女郎花・錦木・松虫・八嶋・殺生石・夜討曾我・道明寺・白楽天・難波・高砂切の30曲。地の巻は「外之部 常一調伝書」と題し、芭蕉・采女・半部・班女・雲雀山・二人静・千手・杜若・百万・柏崎・鐘之段・笹之段・鶴之段・熊坂・鶴前・籠・舟橋・小袖曾我・春栄・弓八幡の20曲。人の巻は「別一調伝書」と題し、老松・白髭・蟬丸・花筐・東岸居士・鶴・藤戸・阿漕・俊成忠度・感陽宮の10曲。計60曲。
- (a) 豊成筆一調伝書奥書草稿 二枚
- 前本の天・人の巻の末に封入。一つは「天地人三巻一調手付如此草稿故誤等可有 此後能々相改 別本ニ書直置べし」。他の一通は同意異文。年記はともに「嘉永七年六月吉日(良辰)」。

38 弘化(安政頃)豊成筆『役要手控』 一冊

仮綴小型中本。共表紙に題記と「弘化元辰年 十二月吉辰 豊成」の年記・署名があり、末にも嘉永の年記があるが、弘化元年以降安政三年に至る間の豊成の芸事覚書。出勤した際の書留が主体で、本丸・西丸・二丸・一橋御殿、その他諸大名などでの催しでの、宝生流・金剛流相手の際の記事が比較的多い。宝生融芳之舞・宝生葛城大和之舞・春日電神白頭別習など、未近くの記事は詳細。左の十点の文書を封入する。

- (a) 羽衣本越一セイ・ハノ舞書付(野紙) 一枚
 - (b) 右の写し(札幌麦酒会社野紙。鉛筆書) 一枚
 - (c) 同右(同右。朱筆書) 一枚
 - (d) 大鼓粒付 一枚
 - (e) 大小鼓粒付紙片 三枚
 - (f) 養老新之丞方道行文句 一枚
 - (g) 葛城大和舞太鼓手付 一通
 - (h) 嘉永四年豊成筆金剛老松・仁右門方百万間セリフ 一枚
 - (i) 熊野三段舞・膝行手付 一枚
 - (j) 宝生葛城大和舞(金春流太鼓)書付 一枚
- 39 安政二年豊成奥書、小鼓手付・注釈入り謄本 上中下三冊
袋綴の大木。磨出し模様入り黒表紙。打曇り模様題簽に曲名を列記し、「三巻之内」「上(中・下)」と付記。三冊とも末に「安政二乙卯年孟夏良辰 豊成(催花堂印)」と奥書がある。観世流または宝生流の版本謄本を節付まで影写し、約半数の曲の上欄や本文中に手付や囃子事の注記や語句の注釈などを書き込む。

41 安政二年豊成奥書宝生流『豊干』手付 一冊

仮綴半紙本。共表紙に題記。奥書「安政二年卯弥生良辰 豊成」。謄本を模写し、朱筆(一部は墨・緑で手付を書き込む)。

42 江戸後期筆『宝生源氏供養曲文入』手付 一冊

仮綴半紙本。共表紙に題記と豊成の署名があるが、クセの詞章を書写し朱筆で手付を加えたのは豊成以前らしい。表紙裏に加筆した弘化四年二月廿四日松平出雲守邸での宝生大夫所演の記録は豊成筆。左の一点を同封。

(a) 源氏供養クセ前後の手配り書付(豊成加筆) 一枚

43 豊成筆『道明寺』手付 合綴一冊

仮綴縦長半紙本。本来は別々に書写した本を合綴したもの。道明寺は明治十七年刊金剛流山岸本を模写し(同書の直しの分を朱筆で書く)、緑筆で小鼓の手付や心得を書込む。奥書は無いが豊成筆。飛鳥川は詞章を書写し、朱筆で手付を書込み、末に慶応三年金剛鈴之助所演の際の装束付を付記する。奥書「慶応三丁卯年四月廿九日写之 豊成」。

44 慶応四年豊成奥書『狸々乱』手付 一冊

仮綴小型半紙本。観世流謄本・下り端森田流唱歌(小鼓手付を朱記)・乱森田流唱歌(同上)・金春流乱(六段七段の唱歌と手付)・下り端諸流段数・乱の段数・一噌流乱唱歌(手付朱記)・七段乱手付・観世呂掛りの乱唱歌と手付・宝生七人狸々・喜多乱壺出など、乱の手付集。末尾に「慶応四戊辰八月 観世新九郎豊成」と奥書があり、共表紙に「豊好」ともある。

45 文化年間豊和筆、特殊謄手付 七冊

朱・緑も混用。書入の精粗は一樣でない。すべて豊成等であらう。料紙は薄葉紙。所収曲は次の通り。(※印が書入のある曲。宝は宝生流謄本を影写した分)

〔上〕本文墨付136丁) *楊貴妃・*夕顔・*放下僧宝・*歌占宝・*安宅・*蟻通・*通小町・*善知鳥・*阿漕・*昭君宝・*千手。
〔中〕本文墨付10丁) *弱法師・*藤戸・*当摩・*俊寛・*蟬丸・*景清・*護法堂・*遊行柳・*定家。〔下〕本文墨付85丁) 弓矢立合・*隅田川・*綾鼓宝・*求塚宝・*摂待宝・*小原御幸。
左の五点の文書を挟み込む

- (a) 慶応二年八月豊成筆楊貴妃装束付書付 一通
 - (b) 安宅演出に関する豊成書付 一通
 - (c) 当麻出羽二段返観世流小鼓金春流太鼓粒付・手付 一枚
 - (d) 喜多流遊行柳小鼓打様に関する豊成書付 一枚
 - (e) 嘉永五年豊成筆金剛流大原御幸書付 一枚
- 40 安政二年豊成奥書『風鼓覚書』 一冊
袋綴の半紙本。格子模様灰色表紙に朱色模様白題簽。墨付31丁。余白27丁。末尾に「安政二乙卯仲秋日 秦豊成(印)」と奥書があるのは、30などと同様書初めに記したものである。当流五段次第・当流真之一声・九郎兵衛方相手之時五段次第・同真之一声・当流本越一セイ・和布刈之次第など、相手役や曲ごとの打方をも含む次第・一声の各種の手付・粒付集。左の三点を封入。
- (a) 石川丈山略伝書抜 一通
 - (b) 「儼」字に関する字典からの抜書 一枚
 - (c) 森田流舟井慶舞唱歌に関する書付 一枚

薄葉紙を用いた仮綴中本。共表紙に題記と「豊和」の草名がある。翁・弓矢立合・勧進帳・起請文・蟻通・千手朗詠詩・琴うたの七冊。謄の詞章を書写して朱筆で手付を書入れているが、翁には手付が無く、琴うた(咸陽宮の一部)には節付すら無い。未完のまま終ったのであろう。弓矢立合に「文化二乙丑年七月廿二日 豊和(印)」、千手朗詠詩に「文化三辛三月廿三夜 豊和」と奥書があり、他冊も同じ頃の書写らしい。

(a) 豊成筆九祝舞相違文句抜書(翁の冊に同封) 一枚

46 文政十三年豊成奥書『起請文』手付 一冊

薄葉紙を用いた仮綴中本。共表紙に題記と「豊紀(花押)」の署名がある。正尊起請文の部分を片仮名で一行九字に書き、節付を加え、小鼓の粒を右に、大鼓の粒を左に書加える。小鼓の分は朱筆、大鼓の分は墨筆が主体。末に「文政十三庚寅年七月日 宮増十一代 観世新九郎 豊紀(花押・朱印)」と奥書。

47 江戸末期筆『起請文 大小之手附』 一冊

前本と同装。共表紙左下に「豊紀」とあるのは豊成が前本の署名を模写したもの。内容も前本の写し。但し大鼓の分を緑筆、小鼓の分を朱筆で書分け、手付の用語を少々言い変えている。

48 文化年間豊和筆、一調謄手付 十冊

薄葉紙を用いた仮綴中本。玉之段・土庫・鳥迫・班女・鶴曲・放下僧切・松虫切・三井寺道行・三井寺曲・弄太鼓の十冊で、全冊朱の手付入。放下僧の末に「文化三辛十一月廿四日 豊和(草名)」と奥書があり、他冊も同じ頃の書写であらう。

49 豊成筆、一調謄手付 八冊

45等と同装。千手朗詠・高砂・土くるま・土くるま・鳥追・放下僧・松虫・籠太鼓の八冊。一調語の部分を書写し、朱で手付を加えるために用意した本であろうが、千手朗詠と土車の一冊以外は手付未記入。六冊に豊成印があり、前本と一緒に包んだ包紙の曲名下に豊成が自己の筆である由を記している。

50 豊成筆、観世流諸本書入れ手付 四冊

薄葉紙を用いた仮綴中本。共表紙に題記し、あこぎ・通小町・絃上・禪師當我の四冊。阿漕以外の三冊は末に「豊成」の朱印があり、四冊を包んだ紙に曲名と「豊成書」の識語がある。観世流諸本を書写して手付を朱筆または緑で書込む。但し絃上の朱筆は節の直しで、手付は無い。

51 嘉永七年筆「一噌流笛唱歌」 一冊

仮綴半紙本。共表紙に題記と「嘉永七年庚申」の年記の他に、右肩に「甲印四冊ノ内 卷号」とある。奥書なし。神舞・男舞・安宅舞・中ノ舞・下り端・大ベシ・カツコ・早舞・早笛・序之舞・舞備・楽・神楽の笛唱歌。奥書なし。

52 元治元年豊成奥書「一噌流笛唱歌」 一冊

仮綴半紙本。共表紙に所収楽名を列記し、右肩に「甲印四冊ノ内式号」とある。序之舞・真之序・楽(小鼓手くばり付)・富士太鼓掛り・郡郎掛り・唐船掛りの笛唱歌の後に、「右一噌流笛唱歌六ヶ条家元一噌幸太郎方々借用致写置者也 右之書不許外見者也 元治元年甲子年霜月廿九日 豊成」と奥書があり、さらに郡郎空下唱歌(小鼓手付入)を付記する。唱歌は豊成とは別筆らしい。後表紙に「豊好」と署名。

小型縦長本。序之舞以下各種舞事のカカリやオロシの部分の唱歌集。末尾は「是ヨリ以下藤本生五郎ニ聞書」と注する豊成の追記で、前半にも豊成の加筆がある。末に「豊照」と署名。

58 豊成筆「春日流盤沙楽」唱歌 一冊

59 豊成筆「一噌流盤沙楽」唱歌 一冊

60 豊成筆「春日方乱之譜」 一冊

右三冊同装で、薄葉紙を用いた仮綴中本。各冊表紙に「豊成」と署名。三冊一組の包紙に「安政二卯年八月 新九郎豊成」とある。

61 万延元年藤本森助筆「森田流翁唱歌」 一冊

仮綴中型横本。「万延元年甲子年十月吉日 藤本森助書之(朱印)正矩」と奥書。袋裏に「此翁一式ノ章歌ハ森田流弟子藤本森助之章也 観世新九郎豊成」とある。

62 万延元年豊成筆「開口音取置鼓」 一冊

仮綴中本。音取の唱歌に朱で小鼓の粒を書き添え、青でワキの仕方を書き込む。末に「ワキノ仕方ハ権之助書也」とあり、青筆の分は進藤権之助の筆。笛は森田流。表紙裏に、万延元年十月六日に御本丸移徒祝儀御能仰せ出され、進藤宅で打合せの折に控えとして書いた由、豊成の付記がある。全四丁。

63 万延元年豊成筆「開口置鼓」 一冊

仮綴中本。前本の写しで、笛の唱歌を除き、小鼓粒付と青筆のワキ仕方のみ。この青筆も進藤権之助の筆の由、豊成が付記。

64 文久二年豊成奥書、観世両流融筋之舞左吉方太鼓手付 一冊

仮綴半紙本。共表紙に内容を列記し、右上に「丙印巻冊」左下

(a) 豊成筆、真之序の序の跡の小鼓に関する書付 一通

笛が一噌・森田の場合、大夫が観世・その他の場合の注意。

53 文久二年豊成筆「一噌神楽太鼓金春付」唱歌 一冊

仮綴半紙本。共表紙に題記し、右上に「甲印四冊ノ内 三号」左下に「文久二戌年十月良辰 豊成」とある。余白や唱歌の後に神楽に関する諸注意を付記し、末にも同年記の奥書がある。

54 元治元年豊成奥書「一噌流上ガカリ惣神楽」唱歌 一冊

仮綴半紙本。共表紙に題記(付記あり)し、右上に「甲印四冊ノ内 四号」左下に「豊成」とある。唱歌の他に惣神楽に関する注記もある。末尾奥書「元治元年甲子年霜月廿九日 豊成」。

55 豊成筆「森田楽唱歌」 一冊

仮綴半紙本。共表紙に題記し(付記あり)、右上に「乙印二冊ノ内」左下に「豊成」とある。楽と郡郎楽の唱歌で小鼓手付をも朱記する。富士太鼓楽ノカカリ、その他付記の類が多い。

(a) 天保十四年豊成筆、朝長儀法左吉流太鼓手付 二枚

真草行の三種ある内の草と形の打ち方の手くばり。

56 豊成筆「森田流乱唱歌」 一冊

仮綴半紙本。共表紙に内容を列記し、右上に「乙印二冊ノ内」左下に「豊成」とある。八拍子割の野線印刷した特殊な料紙を主体とし、観世乱(左吉方太鼓付を朱記・宝生驚乱・観世乱(金春太鼓付を朱記)の唱歌を書き込む。三曲の途中の普通紙に小鼓手付の類を付記する。

(a) 豊成筆「金春流乱付ニ添書付」 一枚

57 豊成筆「森田流笛章歌」 一冊

に「豊成」とあり、末尾にも「文久二戌年五月 豊成」と奥書がある。観世融筋之舞の観世流太鼓手付(八拍子割印刷野線の分、文章体に別記の分と両様)と、宝生流融筋之舞の観世流太鼓手付(文章体)。宝生の分は足取図の略図も付記。

65 豊成奥書、獅子森田流唱歌・観世流小鼓手付 一冊

仮綴中本。共表紙に内容の略記と「豊成」の署名がある。望月獅子と石橋獅子の小鼓手付を、森田流唱歌の右に朱記する。末尾に「右ハ鉄之取清所望ニ付別ニ認メ遣し申候節、如此扣書記置 豊成」と奥書がある。

66 豊成筆「朝長儀法」左吉方双・形の太鼓手付 一冊

仮綴半紙本。共表紙に題記。墨付三丁。末に「右ハ文政八四年林鐘 於豊綿宅 清陽・豊照・鍊三郎・兵次郎、右打揃申合相済、其後豊照右ノ通双・形ノ二色控置タルヲ、又後ニ豊成仮ニ写シヲ者也」とある。大小の手付も付記。

67 豊成筆「一噌流盤沙楽」唱歌ならびに小鼓手付 一冊

仮綴中本。共表紙に題記と豊成の署名がある。唱歌の右に小鼓手付を朱記する。

68 中林筆「宝生新之丞諸謠入用之分」 一冊

69 豊成筆「宝生新之丞方諸謠書目録」 一冊

両冊合綴。ともに仮綴半紙本。68は下掛り宝生流の文句がシテ方宝生流と相違する部分の抜書集。共表紙の題記の左に「右宝生大夫方相手之節之諷方也。依之、宝生流諸本ト引合、相違之處而已抜書ナリ。余ハ宝生本之通也 中林控」と注記。中林は金沢在住の新九郎家の弟子。69は68のイロハ別索引風の目録で、

68の上に合綴し、共表紙に題記と「催花堂」の署名がある。
70 豊成筆、新之丞方俊寛・船弁慶ワキセリフ 一冊
飯綴大本。全四丁。署名は無いが豊成筆らしい。俊寛は名ノリ
と一セイとその後のセリフ。船弁慶はアイとの問答。

(3) 船弁慶セリフ書付 二枚

一枚は中入直前からアヤカシ問答にかけて、他の一枚は後シテ
の出の直前の文句が主体。70の補足。

71 明治元年大蔵虎長筆「開口・弓矢立合・松竹風流」 一冊

飯綴大本。末に「明治元年霜月改正之 大蔵千太郎虎長（花
押・朱印）」とあり、540と一対の書。若宮祭の松之下式に新形
式で勤めた際の文句と節付。立合と風流の分には小鼓手付も少
々見られる。

72 服部小錦治筆「撃鼓譜」 一冊

綿装の大本。紙貼り厚表紙に添えた布題簽に書名と住所氏名印
がある。小錦治が小鼓を稽古した際の、謡文句抜書に傍書した手
付の類を集めて綴じたもの。能野ロンギ・鶴亀キリ・蟬丸花の都
・船弁慶クセなど、初歩的な曲ばかり。小錦治は素人として一
時小鼓を稽古したのであろう。

冊子本追加

(四の項)

36 蔭山俊蔵刊、森田流楽・神楽唱歌 一枚

23×35の厚葉楮紙に、罫引き枠内に、表に楽、裏に神楽の唱歌
を刷る。包紙の豊成書付に「豊綿時代門弟蔭山俊蔵ト云者自身
是ヲ書テ板ニヲコシタル也」とあり、文政以前の刊。小鼓手付
などを書込むための印刷物か。

(六の項)

35 江戸末期筆「観音懺法」 一冊

飯綴半紙本。共表紙に題記。観音懺法の来歴。

(七の項)

19 江戸中期筆「観世流節付『式三番』」 一冊

飯綴半紙本。「どうく／＼たり」の形で、明和改正謄本以前の
写本。二日・三日の千歳の語の分を末に記す。

20 江戸末期筆「観世流節付『花がたみ』曲舞」 一冊

飯綴中型横本。共表紙に題記と豊成の印がある。朱筆直し詳細。

九 元信(休斎宗与)関係書付

——書付類その一——

慶安三年元信筆「仕手出立之事」 一通

懐紙一枚。習物の能十番・槍垣・娘捨・鸚鵡・関寺・木賊・鐘
巻・鷲・狸々・安宅・石橋一のシテの装束付。識語「右之出立
道叱・宗治御相伝之通也 寅極ノ六 同正右衛門元信 観世宗
兵衛殿」惣兵衛豊俊は元信の甥（兄豊勝の子）。古い包紙には
「習之拍子仕手出立付之事」と上書。

2 万治元年十月三日付、観世宗与あて観世大夫重清起請文 一通

奉書一枚と牛王誓紙をつなぐ。前書に「一、なかし八頭井本五
段之一声ノツモリ同出様」以下38ヶ条の習事の名目を列記し、
「右之条に依執心預相伝過分ニ存候 毛頭他言申間敷候 但家
ヲ継一子斗ハ如我等堅ク誓紙させ 弥末孫迄家ヲ継一子ニなら
テハ相伝申間敷候 其上一子ニいたさせ候誓紙ニ而も右之通堅
ク誓紙ラいたさせ 代一子ニも誓紙ニ而相伝請候様ニ可申付
候 不申及候ヘ共 其方家ヘ我等家末孫迄無如在申合候ヘと可
申付候 若其方ノ末孫ニ親ニ少年ニ而別レ候仁候ハ、右之条
ニ寛不被申候ハ、此方家ヨリ相伝可申候者也」とある。牛王
誓紙の末の署名は「万治元戌戌 十月三日 観世左近大夫重
清（花押） 観世宗与老・観世新九郎殿」相伝を受ける前に
提出した起請文。重清は当時26歳。

3 宗与筆「相伝之寛」 一通

万治元年に重清へ相伝を予定した事項の列記。前本の前書とは
ほとんど同内容。末尾に「観世宗与」と署名。大版美濃紙一枚。
重清の誓紙提出に先立って宗与から与えた文書の控であらう。

4 万治二年卯月宗与あて観世大夫重清書状 一通

美濃紙大の楮紙一枚。槍垣の仕舞、平調返、翁なしの礼協につ
いての質問。「万治二ノ卯月廿四日 観□（花押）」と署名。端
書「観世宗与様□□ 観左近」。2の前書と関連する。

5 寛文三年宗与筆、父之丞延命冠者書付 一通

文句と型と鼓の打ち様の大略。「一、無失念様ニ書付参せ候 寛
文三卯十月十五日 同宗与 観世新九郎殿」とある。6の前半
部と似る。包紙（6と一包）に豊成の筆で「父之丞小鼓打様 元
信筆」と上書。

6 宗与筆、父之丞延命冠者・序破急真草行書付 一通

前半は5と似て、文句と打ち様。後半は前半と無関係で、「似
我与左衛門書物之内ヌキ書」と首書し、「一、草ノ中ノ行 千
引ナトノ類也」など15ヶ条。黄色半紙二枚継ぎ。署名なし。

7 宗与筆、薪猿楽南大門能図面 一枚

8 宗与筆、薪猿楽御社上り能図面 一枚

9 宗与筆、薪猿楽御社上り能図面 一枚

半紙大。7に観世十郎兵衛（重清）楽屋の位置が示されており、
観世座が三十年ぶりで薪猿楽に参動した慶安五年の書写と見ら
れる。宗与も見物に下ったのであろう。配置等の概略見取り
図。9は8の書直しの形で、包紙（立入殿あて書状）に「奈良宮

社二月ノ能ノ絵図有 亥ノ二月」とある上書も宗与の筆。亥は万治二年。慶安五年筆の分を万治二年に整理したものか。三点を一括した包紙には「宗世新組萬覺書」と上書。

10 宗与筆「昔名ヲ得シ者」 一通

奉書大の格紙一枚。裏端書に「宗節被書置ヲ以ギヤウ迄ニセウツン置也」とあり、観世宗家藏宗節筆の「昔名ヲ得シ者」の転写。但し観世代々の模写が前、昔名人の記事の転写が後。署名なし。11と同じく宗与時代の書写であろう。

11 寛文元年宗与筆、面之作者之事・人形絵図ノ事 一通

半紙二つ折り。観世宗家藏の宗節筆「申談談議」の面の条の抜書と、同宗家藏の「二曲三休人形図」(宗節本は現存せず)についての略記。「当座ニ観太ニテ 寛文元うし九月廿五日書之」「権現様ニ存之風姿花伝ヲ写タル也」と末にある。

12 明暦二年宗与筆「永禄四年三好亭御成記」 一通

交漉紙数枚をつなぐ。「コレハサル所ニ有ヲ写 観世休斎宗与」と識語。首部に明暦二年までの年数書がある。能番組の部分のみの写しで、統群書類従所収本とは相互の誤りを訂し得る。

13 正保三年元信筆、慶長四年観世大夫聚楽勸進能番組 一通

大版粗紙横折り。表の両面に四日分の番組、裏の両面に勸進能故実や四日の振舞の次第など。『能楽盛衰記』所収の同勸進能記録と同系で相互に補い合う。正保三年までの年数書がある。

14 正保三年元信筆、天正廿年四月十五日関白秀次民部卿法印邸御成能番組 一通

横折襖紙一枚。片側に十五番の番組。下間少進が関寺小町を初

演した時の能で、正保三年までの年数書がある。別の片側にこの時の能に関する逸話を追記し、承応三年までの年数書がある。13と一緒にした包紙に慶応四年の豊成の付記。

15 宗与筆「観世大夫初之事」 一通

懷紙大の格紙一枚。観阿弥伝、室町將軍家御用の事、禁中出入の事、勸助の事など。観世休斎老あて京主膳正(京極主膳正高通)書状(観世新九郎は療養に専念すべしとの内容)の紙背。

16 宗与筆、観世大夫初之事・観世大夫次第・金春大夫次第 一通

横折り厚葉大版斐紙一枚(紙背は宗与・常春・玄昌らの百韻連歌の名残の折)。片面が観世大夫初之事で、15とは内容小異あり、猿楽由来説が主体。別面が同大夫の歴代の実名・法名等。末に「右近代之太夫名乗法名共氏勝子今春権兵衛ニ尋記之 観世正右衛門入道宗与(花押)」と奥書。

17 万治二年宗与筆「観世大夫次第・金春大夫次第」 一通

16の別面と同内容。末に「右今春大夫近代之名乗成名共今春権兵衛ニ相尋記之也 万治二・小春廿三日 観世休斎宗与(花押) 観世新九郎殿」と奥書。

18 寛永二十一年元信筆、寛書 一通

美濃紙二枚続き。末に「ヤドヘカヘリソノマ、書之者也 寛永廿一極月六日夜四つ過 観正右衛門(花押)」とある。兄の新九郎豊勝宅で談合した事ども(忠之公よりの合力銀のこと、跡目を豊勝の子に譲ることなど)を詳細に記録した文書。豊勝が元信に疑心を抱いていたこと、元信を冷遇していたことが知られる。19・20と一包。

19 慶安三年元信筆「寛」 一通

懷紙一枚。江戸初参・家督相続、松平忠雄公合力のことなど、自己の履歴に関する寛書。題記の下に「慶安三三月十四日夜雨徒然之刻書之 関事々々 正右衛門元信」とある。

20 寛文二年宗与筆「宗与母方ノ事」 一通

懷紙二枚続き。題記は冒頭の記事にのみかかるもので、自己の経歴に関する記事の方が量的には多く、相続の事情が詳しい。「寛文二とら九月五日夜 宗与」と署名。18・19と一包で、その包紙に豊好が四通としているのは、20が二枚に離れたため。

21 元信筆「催花之額之事」 一通

羯鼓ヲ撃テ花催之事(明皇雜錄抜書)・羯鼓由来(下学集抄写)、及び二一の催花額の写し(「華」字異なる)。美濃紙一枚。署名の類なし。

22 宗与筆、江隠和尚作沢庵加點「歌舞之濫觴」 一通

ほぼ間合紙大の斐紙一枚。観世宗家藏の『歌舞濫觴』(大徳寺江隠宗頭が橋昌次編の『自家伝抄』系統の伝書に加えた跋文)に、沢庵が訓点・振仮名を加えた寛永壬午(十九年)七月廿一日付の文書の写し、宗与の考証加筆がある。

23 万治二年宗与筆「大和御祭之事・五調子之次第」 一通

宗与あての三通の書状(寺島太良兵衛・京極丹波守高国・神山源吉)をつないだ紙背。前半は若宮祭や薪猿楽の故実で、呪師松や年用の事も見える。後半は他書からの抜書で「右去所ニ花伝書写シト有中ノ抜書也 本花伝書ト同前カ可尋也 万治二・十月三日 観世宗与 正本花伝書ニ右之義無之也」と識語があ

る。

24 宗与筆、鼓甲乙掛声陰陽説下書 一通

京極丹波守高国から観世休斎あて極月廿五日付書状(大鼓筒出来謝礼)の紙背から表(行間と片側空欄)にまで書込む。鼓の故実説で美濃権守書物からの抜書という記事もある。署名なし。下書の由を元信が端書に記す。

25 元信加筆、鼓之字解 一通

「小補韻会」なる書の抜書らしい「鼓」字の解。傍書加筆が元信の筆らしい。

一〇 故実・道具関係書付

—書付類その二—

- 1 寛永廿一年元貞筆「名物之簡之事・大鼓筒之名物之事」 一通
180×25の楮紙二枚をつなぎ、表に「名物之簡之事」(小鼓名筒の目録と解説)、裏に「大鼓筒之名物之事」を書き、末に「寛永二十一年甲申年五月下旬 元貞(花押)」と署名。観世彦三郎元貞は又次郎重次の孫で大鼓方。大小の筒の作者伝を含む。
- 2 寛文二年結崎玄入筆「鼓之起・鼓ノヨミ声」 一通
美濃紙大の薄紙三枚をつなぎ。鼓に関する故実考証で、動と働、砕動と力動に関する説もある。末に「寛文二壬寅九月一日 結崎玄入老書タマワル」とあり、玄入(観世金十郎重治)筆らしい。
- 3 江戸中期筆、土鼓・小鼓花形書付 一通
土鼓起原考証と花形の由緒。片仮名まじり。
- 4 明和五年七月観世新九郎矩豊筆、鼓筒鑑定書 一通
祖父折居作という。「鼓筒之書付」と上書ある包み紙に、1・5・10と一包み。
- 5 江戸後期筆、鼓筒目録 一通
二挺入鼓箱の分と一挺入の分に分けて十八個の筒の目録。新九郎家蔵の小鼓筒目録であろう。4等と一包み。
- 6 文政九年四月七日筆山岸孫兵衛所持鼓筒に関する書付 一枚

- 遠州浜松天神町山岸孫兵衛所持の大小筒について。信長より拝領の由を記す箱書、五月廿一日付宝生権九郎豊重の極め(祖父折居作小鼓筒とする)を写す。裏面は文政十年の秋田半大夫所持の三挺の筒についての書付。4等と一包み。
- 7 豊紀筆、三人の折居に関する書付 一枚
コブライ・サカイワライ・イキモリツカワライの名と作の特色。「豊成云、右之書付ハ豊紀筆也 十一冊之本より抜書シタル者トミヘタリ」と付記。4等と一包み。
 - 8 宮増弥左衛門と鼓筒作者に関する書付 一通
9 同右 一通
問合せへの返答。宮増が流祖である事と、作者の連名。9が草稿か控で粗紙。8は雲母引きの料紙。4等と一包み。
 - 10 慶応三年正月豊成筆「鼓筒作書」 一通
古折居以下、右作四名、古作分五名、新作之上九名、新作六名計24名の筒作者の名と年代。「或人右之本書ヲ持来為見候ニ付咄シ之種ニも可為哉与写し置ぬ 右ハ大鼓筒ノ書物ノ由 慶応三卯年正月月中旬 催花堂」と識語。包紙には「鼓筒作人書付一通」と上書。4等と一包み。
 - 11 豊成筆「狂言之大事・申楽鈴之大事奥書」 一通
包紙上書に「大藏家ニアリ」とあり、『古本能狂言集三』所収の正保二年五月卜部兼從筆の伝書の奥書の写し。
 - 12 慶応三年七月九日豊成筆「神代御系図抜書」 一通
天字受売命の系譜が主体で、後半は猿楽起原説の抜書。紙背端に「仁印 抜書物五ツノ内 豊成」とある。12・17の六点は一

- 包みで、包紙の上書に「三鼓之起原覚書」とあり、鼓の起原考証のための抜書資料集。包紙にも種々の考証記事がある。
- 13 豊成筆、聖徳太子略伝・秦河勝伝 一通
日本紀等の抜書。末に「右ハ鼓ノ起リ等ノ事を可レ記ト思依リテ先書シ置也」と識語。紙背端書「義印 抜書物五ツノ内 豊成」12等と一包み。
 - 14 豊成筆「三鼓起原之事」 一通
「抜書物五ツノ内」の礼印。「右之通宮増家伝来之書記より書抜 観世新九郎豊成」と識語。12等と一包み。
 - 15 元治元年四月豊成筆「鼓之事覚書」 一通
「抜書物五ツノ内」の智印。享保六年書上の抄写と、『高砂増々抄』から写した「猿楽原始等」。12等と一包み。
 - 16 文久元年豊成筆、猿楽起原書付 一通
「抜書物五ツノ内」の信印。「右ハ先代旧事本紀より書出シタル者ナルベシ」と識語。12等と一包み。
 - 17 豊成筆「三鼓起之事」 一通
「五ツノ外」と端書。12等と一包み。親賢伝来という「翁立伝受」の事。
 - 18 豊成筆「猿楽三鼓起原」草稿(10に同封) 一通
19 豊成筆、猿楽と能の関係についての問答 二通
問答体で猿楽と能の関係を説明しようとした草稿二種。内容相似し、ともに訂正加筆が多い。
 - 20 豊成筆「六芸細釈」写し 一通
礼楽射御書数に関する注釈の抄写。「以上中村平五三近子述享

- 保十五年比ノ人也 京師ノ人」と識語がある。裏端書「六芸注釈唐字細釋」。
- 21 豊成筆、鼓箱銘文書付 二枚
一枚は石川丈山銘文、一枚は前大徳万輝書の銘の分。
 - 22 森見龍老筆、石川丈山小鼓銘写し 一枚
包紙付記「右ハ森見龍老手跡也 天保十三壬寅年九月 豊成」。
 - 23 小鼓銘字句注解(22と一包み) 一枚
 - 24 石川丈山作鼓箱銘文模写 二枚
一枚は文字は輪郭のみ。一枚は印なし。鼓箱の蓋の銘の由、包紙に言う。新九郎家の鼓箱の蓋裏に丈山銘があったらしい。
 - 25 豊成筆「武江年表抜書」 一通
能段者及び能に関連ある記事のみ。
 - 26 豊成筆、徒然草・兼好に関する書付 一通
27 七夕前夜にあやめ結う時に三遍唱える歌 一枚
28 豊和筆「小鼓物ニたとへ条」 一通
上下を朱で縁どりした料紙。「鼓は大竹のごとし」など、『音曲玉潤集』巻五の「物に誓への条々」を鼓に寄せて言い直した18ヶ条の短文。末に朱で「豊和」とある。包紙に豊成の付記があり、『音曲玉潤集』との関係を指摘する。

観世新九郎家文庫目録（下）

一 芸事関係書付

書付類その三

（一括されていた文書はなるべくまとめて掲出したため、本項以後は順不同で、他種の文書も若干混じている）

1 江戸中期筆「昭君出立之事・高砂出立之事」 一通

330×500の大版の楮紙一枚。二曲のシテ・連・脇の装束付。高砂ツレの持物は箒、後シテの面は三日月。

2 元文三年短豊筆「鵜祭書付」 一通

鼓に関連する要所の型や囃子事についての書留。末に「元文三年三月朔日松平陸奥守様ニ而大蔵庄左衛門勤」とあり、その際の記録。伊達文庫蔵「能組留」によればその時の小鼓は観世権九郎（後に新九郎・短豊）の役。同人の筆であろう。

3 安政五年豊成筆「観世養老水波之伝・宝生融酌之舞」手付 一通

五月十一日に黒田家で勤めた際の記録。太鼓は観世左吉。注記が5に言及し、その方が宜しと言う。4を同封。

4 豊成筆「唐船来サホノカ、リ」森田流唱歌 一枚

5 文久二年五月豊成筆「宝生融酌之舞」左吉方太鼓手付 二枚

3の後半を整理した形。一枚は舞台足取図への書込み。

6 文久二年五月豊成筆「観世融効之舞」左吉方太鼓手付 一枚

舞台足取図入り。5と同種。5と一括され、3・4をも同封。

7 万延二年二月豊成筆「左吉方二段返シ」手付 二枚

二枚とも地拍子の八ッ割罫を刷り込んだ料紙。一枚は小鼓手付を朱で加え、一枚は越ノ段からの分で羽衣の文句を朱で加筆。

罫の欄外に注記。8を同封し、9・10とも同包。

8 江戸末期筆「左吉方二段返シ」手付 一枚

豊成の注記があり、7の資料になった文書らしい。

9 豊成筆「金春惣右衛門方二段返シ」手付 二枚

一枚は7と同じ八ッ割罫込み料紙。同じ時の書写であろう。一枚は越ノ段の後の手配りのみの紙片。10を同封。

- 10 江戸末期筆「金春惣右衛門方二段返し」手付 一枚
 豊成の端書があり、9の資料となった文書らしい。
- 11 江戸後期筆「小鼓親世流一調目録」 一通
 「蟻通之伝受」で打つ分18曲と「不相成類」23曲の目録と、「相動不申候」一調習事六種の名目。紙背一杯に豊成の考証があり、服部惣三郎豊成から松浦侯へ差出した書付の写しと言う。
- 12 豊成筆「寛」(習事目録) 一通
 置鼓・次第之類・一セイ之類・アイシ之類・イロヘ立廻リ之類・太鼓折・出羽之類・大小折ノットツトメアツサ・早鼓・打切之類・舞動之類に分けて、習事の名を列記。以下19まで同包。
- 13 豊成筆「寛」 一通
 親世竜虎の間、庄左衛門方の橋、シャギリの文字のことなど。
- 14 豊成筆「寛」(楽・神楽・破之舞についての書付) 一通
 15 豊成筆「寛」(謡名目ノ内考書) 一通
 檀風の檀・壇・檀字や撰待の撰字についての詮議や木賊の且過の語義考証など。壇字の辞書抜書の紙片一枚を同封。
- 16 豊成筆、当流一調由来書付(未完) 一通
 17 文久二年二月豊成筆「巻絹之内寛」 一通
 明和改正本の文字づかい抜書と「一ヲ以テ貫ク」についての説。
- 18 慶応二年八月豊成筆、鶴銅難語考証書付 一通
 「せつして候ひし」、「かたみて魚はよもためし」など。
- 19 慶応二年八月豊成筆、俊寛書付(「ライ紙」の語義) 一通
 天保初年の書付の清書と言う。17、19は同包。
 以上の11、19は「業用等寛書」と上書ある包紙に一括同包。

- 20 江戸末期筆、質問四ヶ条 一通
 高野物狂々セ・弱法師舞・愛染川(髪かきなど)の鼓の打ち方、花屋女御留についての質問。松浦侯などからの質問か。
- 21 嘉永元年八月筆「自然居士フシヨウノ舞」手付 一枚
 同年八月八日の近右衛門(梅若か)所演(小鼓は孝三郎)に基づく朱筆の書留。フシヨウノ舞は三段舞らしい。
- 22 安永四年筆「宝生安宅延年之舞・親世狸々乱置壺」書付 一通
 正月十八日奥能の所演に基づく書留で、型や囃子の要所。安宅は大蔵六蔵、狸々は幸四郎次郎が小鼓。
- 23 江戸末期筆「段ナヲリ数囃子」書付 二枚
 一枚は笛唱歌、一枚は小鼓手付。
- 24 江戸末期筆、下懸り謡本に無き曲十八番書付 一枚
 以上の20、24の五点はヨリで一括。
- 25 豊成筆「宝生融筋之舞」書付 二枚
 一行が二くさり分の罫引料紙で、一枚は金春流太鼓の手配り。一枚はそれに小鼓の粒を朱で加筆し、裏(罫引)は宝生融遊曲の金春流太鼓手配り。26と同包。
- 26 江戸末期筆「宝生融筋之舞」書付 二枚
 普通の半紙。一枚は太鼓が親世流の際の小鼓手付と太鼓手付。一枚は舞台足取り図に太鼓手配りを書き添え、注記に「矢ノ倉様ヨリ此図并太鼓手クバリハ聞合セ相調候分」とある。
- 27 文政五年藤井権兵衛滋充筆「宝生流乱拍子」 一冊
 仮綴半紙本。同年四月神田橋御殿(橋家)での演能後の記録。小鼓手付主体ながら笛唱歌や大鼓手付をも含む。筆者藤井はこ

- の時に小鼓を打った山崎吉次郎の師で新九郎豊綿の弟子。
- 28 豊成筆、神田橋御殿道成寺に関する書付 一通
 27の末の番組の吉次郎についての書留と拝見者列記。
- 29 江戸後期筆「宝生流蘭拍子之伝」 一冊
 本文は一枚。要約した形の小鼓手付。共表紙裏の豊成書付には「豊照より中林山三郎江相伝之時分之和之由」とある。
- 30 文政六年十二月豊照筆、宝生流道成寺寛 一通
 神田橋(二橋家)での演能に基づく書留。中之段後の手配りなど。
- 27、30の四点は嘉永五年に豊成が同じ包紙に一括。
- 31 豊成筆「小鼓手之内之事」 一通
 調緒を握る左手の扱いについての注意が主体。
- 32 豊成加筆「森田流惣神楽笛之譜」 一通
 罫引紙(一行二くさり)。鼓の手を朱や緑で書入れる。
- 33 江戸末期筆「一噌流真音取」唱歌 一通
 34 藤本森助筆「森田流カラ音取」唱歌 一通
 右の二通とも表題以外の分も少々加わる。
- 35 豊成筆「喜多鳥頭カケリ」書付 一通
 前半がシテの型、後半が小鼓の手組。金剛もほぼ同じと言う。
- 36 豊成筆、善知鳥カケリ由緒書付 一通
 37 豊成筆、喜多流小書四種書付 一通
 絵馬女体・鞍馬天狗白頭・善界白頭・清経音取の特異な手や囃子の位について略記。35、37の三点は35の包紙に一括。
- 38 慶応三年豊成筆「喜多富士太鼓狂乱ノ楽」書付 一通
 同年九月廿六日六平太方稽古能の際の書留。唱歌に鼓の位・手

- や粒を書加え、頭注にシテの型を記す。包紙にも注記あり。
- 39 豊成筆「喜多ゆ屋三段ノ舞」書付(短いメモ) 一通
 40 江戸末期筆「喜多流五段神楽」小鼓手付 一通
 41 江戸末期筆、前田家督相統日程報告 一通
 右二通同筆同封。包紙の豊成書付に「慶応二丙寅年」とある。
- 42 安政五年豊成筆「喜多流融」小書四種書付 一通
 笏之舞・曲水之舞・遊曲之舞・遊曲の四種の左吉方太鼓手付が主体。舞台足取り図入り。包紙に年記。
- 43 江戸末期筆「宝生流鶴亀曲文句」(節付：小鼓手付入り) 一通
 44 文政十一年豊成筆「金春籠」手付 一通
 四月十一日本丸御能の際の記録。要所の小鼓手付。
- 45 豊成筆「玉葛一調寛書」(粒主体の手付) 一通
 46 嘉永五年正月貞光安兵衛筆「金剛絃上楽」唱歌 一枚
 先年の一橋御殿での金剛の絃上に関する豊成の加筆がある。
- 47 江戸末期筆「大蔵弥右衛門方問」セリフ 一枚
 43、47の五点は(もとは42も)は一括同包。
- 48 弘化元年十二月豊成筆「金剛兼平手扣」 一通
 要所の文句や節や型の書留。十八日の本丸御能の際の記録。
- 49 万延二年正月豊成筆「金剛葛城神楽」寛書 一通
 要所の文句と手付と。当流次第之寛を付記。48と同包。
- 50 文久二年二月豊成筆「熊野車ノ会釈・短冊之段」手付 一通
 粒入り手付。「但諸流共大抵同事也」と言う。
- 51 江戸後期筆「金剛小鍛冶白頭」位付 一通
 文句を抜書して位付(序破急)を傍記。50と同包。

- 52 観世新三郎(豊成)所持、乱唱歌・手付 一通
森田乱唱歌(鼓手付朱記)・五流乱段数・乱下り端手付・一噌流打方・一噌乱唱歌等。包紙に「観世新三郎」と署名がある。
- 53 豊成筆「金剛花月小僧」書留(文句と節付) 一通
- 54 豊成筆「金剛鉢木」書留(観世と違う文句抜書と手付) 一通
- 55 慶応二年五月豊成筆「金剛七騎落」書留 一通
- 56 慶応二年五月豊成筆「金剛巻網」書留 一通
右二通は金剛宅権古能の際の書留。55は観世と違う文句と節。
- 57 豊成筆「盤渉序舞」書留(唱歌と手所の手付) 一通
- 58 江戸末期筆、五段次第・真ノ一声手付(57と同包) 一通
- 59 豊成筆「観世獅子之覚書」 一通
観世流の石橋獅子の唱歌(森田)に手付を傍記。望月は要所のみ。
- 60 江戸後期筆、源氏供養福王流協語り 一通
- 61 江戸後期筆、船弁慶福王流「舟ノ内語」 一通
右両通同筆・同包。60は「福方」と首記。61も福王流であろう。
- 62 豊成筆、観世羽衣・野守覚書 一通
表が羽衣彩色之伝、裏が野守白頭・天地之声の要所の手付。裏は文久元年四月所演分を追記。63と同包。
- 63 豊成筆「観世羽衣彩色之伝」書留 一通
- 62の表側に基づく後の浄書。文久三年正月所演分を加筆。
- 64 豊成筆「善知鳥超り形」(観世流の型のみ) 一通
- 65 文久二年八月豊成署名「観世善知鳥超り形并配」 一通
- 64を清書し、朱筆の手配りと舞台足取図を加える。64と66同包。

- 66 明治十二年筆、宝生善知鳥カケリ舞台足取図 一通
宝生九郎所演を「清水氏三頼」享取ヲク」由を豊成が付記。
- 67 豊成筆、出羽越ノ替手粒付・宝生藤栄小歌粒付 一通
野引紙。藤栄の分は豊成幼年の頃習得せし粒付の由を注記。
- 68 豊成筆「宝生笛覚書」 二通
一通は千歳之舞と翁之舞の鼓や笛の手をも加えた舞い方書留で、翁之舞は図入り。一通は千歳之舞の足取図と主要な型。
- 69 文久二年三月豊成筆「金春翁之舞略覚書」 一通
翁之舞(全ノ拍子以後)の手付主体の型付。同年二月廿二日の本丸能での所演に基づく記録。70を同包。
- 70 豊成筆「金春翁」小鼓手配り 一通
- 71 文久三年正月豊成筆「金剛翁覚書」 四通
一通は正月廿二日金剛宅能初番組で別人筆。一通は同月十九日の申合せの記録で翁之舞の詳細な粒付・手付。一通は地ノ拍子跡の足取図と型。一通は下掛り翁の座付きの次第と大蔵八右衛門方の千歳の舞い方。右四通一包。
- 72 豊次郎筆「喜多翁之覚書」 一通
足取図の下部に型を書く。豊成眼氣に付豊次郎に書かせたもの。
- 73 文久元年十二月豊成筆、春日流三番三唱歌 一通
鈴之段の序と揉之段留めの部分のみ。72と同包。
- 74 安政五年六月豊成筆「狂言アイン略覚書」 一通
唐相撲・宗論・煎物(以上大蔵)・煎物・宗論(以上豊)の狂言会釈の手付。文句に粒を傍記。75と同包。
- 75 江戸末期筆「仁右衛門方八尾」キリ謡手付 一通

- 76 天保十四年豊成筆、驚流如意宝樹風流手付 一通
五月二日の表御能の記録。風流後の置鼓から次第までが主体。
- 77 豊成筆、風流文句書留 一通
謡う部分の文句のみ。曲不明。鶴の出る千歳の風流。カザシ文句を傍記し、それは婚礼用のカザシ。流儀も不明。
- 78 嘉永二年十一月豊成筆「開口置鼓書留」 一通
春日流唱歌が主体。高安彦太郎方での申合せの際の記録。
- 79 豊成筆、春日流唱歌(三番三揉之段序) 一枚
右四種、「風流開口覚書」と墨書せる包紙に同包。
- 80 万延二年筆「餅風流大蔵八右衛門方謡文句」 一通
八右衛門方から貰った文書。包紙に豊成が由来を記す。
- 81 嘉永二年十一月十五日付、豊成あて驚伝右衛門書状 一通
松竹風流の演じ方についての書状。82と同包。
- 82 嘉永二年筆、驚流松竹風流書付(演じ方と主要な文句) 一通
十月廿二日に驚伝右衛門方より到来の旨、包紙に豊成が注記。
- 83 江戸後期筆「流・八頭」書付 一通
粒付まじりの手付で、心得・由緒的な事も記す。普通の打ち方と真ノ打様を併記し、半流しにもふれる。かなり詳細。
- 84 江戸後期筆、流シウケ・八ッ頭粒付 一通
- 85 豊成筆、羽衣キリ流シ・八頭手配り 一枚
- 86 豊成筆、三笑キリ粒付(右ハ葛野ト申合済) 一通
右四種一括の包紙に「流シ調べ候節之覚書 豊成」とある。
- 87 豊成筆「流八頭打方」(羽衣キリ粒付) 一通
八拍子野引紙。流請之段と八頭之段の両粒付を別記。

- 以下の六種は、冊子本を含めて一括され、包紙の豊成書付によれば万延二年に東本願寺の依頼で高田伊右衛門に相伝したものを、高田が書写して返還した文書群である。冊子本にもそれに関する豊成の付記がある。
- 88 万延二年豊成筆「風流之事ニ付心得方床机御免心得方」 一冊
仮綴半紙本。全四丁。故実の説明が主体。
- 89 万延二年豊成筆「風流・開口置鼓・流し八頭」書付 一冊
仮綴小本。全六丁。松竹風流の主要部の文句と型(82の写し)・開口置鼓の手付とワキの型、流し八頭の手付と心得。
- 90 万延二年豊成筆「開口置鼓」手付 一冊
仮綴中本。全五丁。協方進藤の場合の粒付と協の型を詳記し、高安・春藤の場合を別記する。
- 91 万延二年豊成筆、流シ八頭打方(野引紙。87と同内容) 一通
- 92 万延二年豊成筆、海士二段返し鼓手付 一通
左吉方太鼓手付と観世流小鼓手配り。
- 93 万延二年豊成筆、二段返し粒付 一通
八ッ割野引紙。左吉方太鼓付に小鼓粒付を朱筆で加える。
- 94 豊成筆、海士赤頭要所書付 一通
右三通同包。海士赤頭も高田へ伝授したことの一。

二 能楽史料書付

書付類その四

- 1 江戸中期筆、文禄二年「於禁中関白秀吉公御能」一番組 一通
大版の楮紙五枚をつなく（今はバラバラ）。初日の冒頭部の式三番と弓八幡を欠く本の転写。比較的善良な本文。
- 2 慶安三年豊重筆、習事書上 一通
二つ折懐紙一枚に協能以下32項の名目を列記した末に「拍子様之心持習御座候能共あまた御座候へ共先為指立分大形書付上申候以上 慶安三年十月十日 親世新九郎豊」とある。控書か。
- 3 江戸初期筆、室町期天皇・將軍代々「寛」 一通
小鼓親世家の人の調子御免の事を付記。もと九10・17と同封。
- 4 江戸中期筆、万治元年親世大夫重清起請文写し 一通
九2の写し。端書（豊成筆）には「下書」とあるが写しであらう。
- 5 江戸後期筆、元禄十年親世織部重記起請文写し 一通
道成寺相伝の際の新九郎（豊房）あて起請文の写し。原物不伝。
- 6 江戸中期筆、四座役者目録抄写 一通
一通は宮増・豊次・重次の記事抄写の後に豊勝以下四代の新九郎の名を連ねる。一通は親世庄次郎重政・彦三郎元貞・親世与四郎・金春三郎・同弥三郎の分で、元信・長吉の記事を追加。
- 7 江戸中期筆、大鼓方奥書写し 一通
親世彦三郎元貞（寛永廿年）、宝生彦五郎豊章（貞享五年）、宝生

- 弥三郎信堅の署名を他文書から模写したもの。
- 8 宝永頃筆「児玉伝左衛門親類書」 一通
児玉は新九郎豊房の妻の実家。宝永正徳頃の文書。
 - 9 明治元年春日若宮祭松之下諸役配置図 一枚
540と同筆で大蔵千太郎虎長筆。もと6・8の包紙。
 - 10 仲谷某筆、浅葱調緒御免賀歌 一通
歌は「ことしより浅黄桜の名も高く花も実や増道そかしこき」。
 - 11 同封。包紙の豊成加筆は延宝元年紫調認可の豊重とする。
 - 12 久寿筆、謡初出演を賀する和歌 一通
歌は「千代を経ん年も鼓も老松のよはひをチ、と人に譲らん」。
 - 13 包紙の豊成書付は恭豊の時と推定している。
 - 14 四月二十日付、御預鼓に関する触流しあて報告「留書」 一通
七代豊房までの分を記載。正徳頃の恭豊筆の文書であらう。
 - 15 享保二十年四月福王茂右衛門盛有筆、紫調免許祝辞 一通
厚葉楮紙。親世新九郎恭豊と金春三郎右衛門繁元の両人の紫調免許（四月七日）を祝っての漢文体の祝辞。末に和歌一首。
 - 16 正月四日付、新九郎（矩豊）あて親世織部（清尚）書状 一通
伴三十郎の奥御能乱置臺の相手を幸四郎次郎に勤めさせるについて挨拶。新九郎の勤める高砂にも言及。安永四年の書状。
 - 17 文政末年頃中西孝三郎筆、中西家由緒書 一通
伊達藩御抱え親世流小鼓方中西家の七代分の由緒書。初代は元文五年歿、二代目が宝暦十二年に伊達家へ召出された由。
 - 18 豊成筆、天保八年三月触流し廻状写し 一枚
家齊から家慶への將軍代替り祝賀能番組内示廻状の主文など。

- 17 天保十三年西良久筆、鶴飼「かだみ」語義考証書付 一通
「此手跡ハ西良久老也 天保十三年」と豊成書付。書状らしい。
- 18 嘉永六年四月廿一日付、加賀美彦右衛門書状 一通
親世新九郎あて。銀子三枚を添えての伝授依頼状。
- 19 文久二年二月廿一日付、右田若兵衛・相沢永右衛門書状 一通
「龍ノ口細川様より銀三枚被下」などと豊成が付記。
以上14・19は一包み。
- 20 十月五日付、新三郎あて重治郎書状 一通
所用のため稽古断りの状。新三郎は豊成。重治郎は宝生大夫子。
- 21 安政二年十月豊成筆「宝生家代々法号」 一通
包紙に親世大夫家文書の写しという。14代までの法号と命日。
- 22 文久二年正月豊成筆「狂言目録口書」 一通
五27の「諸流書上狂言目録」の項目別目録。かなり長大。
- 23 豊成筆「鷺仁右衛門方会釈有之候狂言目録イロハ分」 一通
七12の「鷺流会釈狂言語」に基づく索引。大蔵流分も加える。
- 24 慶応四年正月豊成筆、所持狂言本「寛」 一通
所持する五種の狂言本の目録。22・24の三点同包。
- 25 豊成筆、風流名寄（大蔵方十番と鷺方十五番） 一枚
26 豊成筆、宮増五郎信親と豊次の関係書付 一通
- 27 明治二年薪能場所図 三枚
薪御能場所図一枚と御社御能場所図二枚。大蔵千太郎虎長筆か。
- 28 明治元年春日若宮祭南大門交名場所図 一枚
同包の27と同筆。9ともとは一組のものらしい。
- 29 豊成筆、明治二年七月英国人御馳走能書付 一通

- 番組や鉄之丞ら四名からの通達書の写しと後の付記。
- 30 明治十二年八月十一日付、金春式部あて豊成書状控 一通
岩倉公より猿楽起原を差出すべしとの通達ありとの報知。
 - 31 明治十二年九月金春広成書上「猿楽原記」写し 一冊
墨付七丁。糸を脱し、バラバラ。猿楽伝説と家系技粋と。30の連絡に応じて提出した文書の写し。二種同包。
 - 32 十月付、親世新九郎あて伊勢守書状 一通
書状形式の入門誓紙。花押があるが誰か不明。江戸後期筆。
 - 33 享和三年六月、九鬼和泉守隆国起請文 一通
大版奉書一枚。入門誓紙。新九郎（豊綿）・権九郎（豊照）あて。
 - 34 九鬼隆国は摂州三田藩主。
 - 35 寛政九年閏七月五日、小笠原若狭守信成誓紙 一通
36 享和二年八月廿三日、日吉甚四郎誓紙 一通
 - 37 嘉永六年二月、松平兵部喜通誓紙 一通
38 文久元年正月、奥村徳次郎誓紙 一通
 - 39 文久元年十月九日、湯浅平次教量誓紙 一通
以上五種の誓紙は、起請文の牛王誓紙の部分のみを切離して一括してある。34・35は新九郎・権九郎あて。36は新九郎、37・38は新九郎・小太郎あて。34の小笠原信成は七千石の、36の松平兵部は六千石の旗本。35の日吉甚四郎は親世座の地請方か。
 - 40 湯浅は加州藩小鼓方。37の奥村は十五才。
 - 41 明治十五年九月、野村二郎昌豊誓紙 一通
新九郎あて。野村は十五才。高田栄久取立と包紙にある。
 - 42 明治十五年十二月、人見恒民誓紙 一通

41 同年同月十一日付、観世新九郎あて人見恒民書状 一通
入門の挨拶状。包紙に高田栄久取立とある。右二種同包。

42 明治廿一年十一月付「観世流小鼓芸事継続方法確定証」 二通
宮増豊好・湯浅平次連署。豊成歿後に、湯浅を芸事相続者、宮増を家督相続者に定めた際の両者間の取り決め書。本文は五ヶ条。湯浅が芸事上は観世姓を名乗る由も見える。一通は湯浅へ譲った道具や書物(書名不記)の目録。

43 元文四年板倉佐渡守殿にて御渡被成候書付写 三通

甲は「大夫共へ」と端書のある、願書提出の際の手續きに関する通達。乙は「廻状之写」と端書あり、切米手形受取りなどの手續き。丙は謄初人数書など文書の書式や宛先などについての通達。包紙に由緒が書かれているのは甲の分についてらしく、乙・丙(両通同筆)は甲とは別の時のものか。但し包紙の豊成書付は三通を同時のものとし、新九郎恭豊筆とする。

44 江戸末期筆、宝生大夫家三代忌日書付 一枚

蓮阿弥・宗阿弥・養阿弥の分。「練三郎より到来」と豊成加筆。

45 江戸末期筆、宝生大夫法名等書付 二枚

一枚は十四代の法名。一枚は友于の法名と忌日で豊成加筆。

46 慶応二年栗山順之助筆「小笠原家略譜」 一枚

小笠原大膳大夫家の歴代の代数・法号・実名・名乗り・父・母・誕生日・誕所・位官・逝日・寿・治世・葬所を一覧表にまとめた大版厚紙一枚。47・49と一括した包書に豊成が由来を記す。

47 元治元年八月廿三日付、新九郎あて勝野兵馬書状 一通
小笠原大膳大夫が右京大夫と改めた由の通知。

一三 領地・家譜関係書付

書付類その五

1 享保十二年十二月廿六日出頭通知書 二通

一通は大久保佐渡守から観世大夫あて、一通は触流し兩人から新九郎(恭豊)あて。旧知行を拝領した際のものの由、包紙に記す。観世大夫分には新九郎同道のことを含む。

2 文政八年、豊照相統時の知行に関する文書写し 一通
名代大蔵六蔵が受領したものの由、包紙に記す。

3 天保三年「松浦青山様より御扶持方被下候御書付」 一通
辰十二月廿二日付、岩佐郷治・坂尾孫助より新九郎あて書状。

4 天保十二年閏正月廿六日、御目付への書上控 三通
一袋。享保十二年の地方拝領文書の写し。新九郎豊紀の提出。

5 天保十三年五月廿九日、養子縁組許可書 一通
堀田摂津守殿御宅にて仰渡しを受けた由、包紙に書付けてある。

養子は新三郎。

6 寛政八年十一月廿日付、川譜請国役金納領収書 一通

7 寛政十一年十一月十八日付、同右領収書 一通

8 天保十一年十一月七日付、同右領収書 一通

右三種一包み。幸手領関係の文書。6は布施孫三郎、7は榊原小兵衛、8は山本大膳名義の「覚」。観世新九郎あて。

9 天保十二年十一月廿八日付、同右領収書(森親之助名義) 一通

48 慶応元年閏五月付、新九郎あて原庄右衛門書状 一通
小笠原左京大夫妾腹豊千代丸殿を嫡子になす由の通知。

49 慶応三年豊成筆、小笠原左京大夫死去に関する書付 一枚

10 八月十八日付、観世新九郎あて井上美濃守書状 一通

駆込訴えをした幸手領大塚村百姓の引取の連絡状。9と同包。井上は寛政十一年享和元年の大目付。包紙の豊成書付は勘定奉行と誤る。文中に牧野備前守(老中)の名が見え、寛政末年の文書。

11 江戸末期筆、彩色入り知行所(幸手領大塚村)図面 一枚

二枚統きの図面の南側半分。田・畑・川・堤等を色分け。

12 江戸末期筆、日光街道道程図 一枚

浅草から草加まで。二枚目が幸手領までだったらしく、大塚村までの里程を書込む。11・12は「知行書類」と題した袋入り。

13 江戸中期筆、貞享三年拝領町屋敷図面 一枚

48×74cm。芝新銭座町の拝領地の図面で、舞台もある自家の間取り図と他人に貸した分の惣図。店賃も記入し、かなり詳細。計三八三坪。13・23は袋入り。

14 豊好筆、安政地震以前の居宅間取り図 一枚
薄葉紙、13の居宅部の透写。署名は無いが豊好筆らしい。

15 江戸末期筆安政二年以前貸地分見取り図 一枚
美濃版大の薄紙。13の貸地分と一致するが店賃が違う。

16 豊好筆安政地震後の居宅間取り図 一枚

14と同筆。美濃版大の薄紙。舞台も無く、14よりも縮少。

17 豊好筆、明治三年静岡出立以前の居宅間取り図 一枚

16よりさらに狭まる。隣家の名も一部記載。

18 豊好筆、明治九年居住地寸法図 一枚

下谷御徒町三丁目五拾七番地。土地百二坪。建坪拾五坪。

19 安政以後らしき居宅間取り図 一枚

- 16と似て小異。未完。16の改築案か。
- 20 江戸中期筆、居室間取り図 一枚
48×63cm。13より広く、より古い時期のものらしく、舞台は九尺の橋がかり付き。13以後の分とは全体の形がかなり違う。
- 21 江戸中期筆、京都所有地寸法図 一枚。
奉書大。錦小路通北、鳥丸通西側。約三百坪。
- 22 江戸中期筆、京都所有地長屋棟割り図 一枚
83×41cm。「今迄長屋之絵図」とある。
- 23 豊好筆、元祖(親賢・信光)・宮増・服部家墓図 一枚
建立予定の墓らしく、刻すべき戒名や年月を記した貼紙に明治十六年とある。以上13〜23は「安政乙卯二年二月改正写之地面絵図 新發屋親世氏」と記した袋入り。
- 24 江戸後期筆「機外宗抄禪人下火語」写し(三39の写し) 一通
25 天明四年閏正月興巖紹隆筆「集雲院」号 一通
機外宗抄禪人二百回忌に際し令孫素原氏の需めに応じて集雲院なる院号を書す旨の前書がある。興巖紹隆は大徳寺四一二世。
- 26 文化二年円巖宗智筆、宮増親賢碑銘之記 一通
親賢二百五十回忌に親世新九郎と幸小左衛門が大徳寺琳光院に墓碑を建てた際の供養の偈。円巖宗智は大徳寺四二七世。外袋の墨書によれば三1・2・3・28・38と同封。
- 27 陽甫宗叡筆、機外宗抄禪人下火語 一通
奉書大の楷紙。裏打。三39を写し、調点を施し、末に「右。一日親世宗兵衛豊俊請先師明叔叔和尙為曾祖父機外宗抄禪人所拈下火之語稿補其益減不獲止抒写目与之 陽甫叡宗叡書」とある。

- 陽甫和尚は大徳寺二〇六世。豊俊は豊勝二男。天和二年歿。
- 28 江戸中期筆、天正十三年明叔和尚作「賛語」 一通
宗抄肖像に加えた賛。「這翁六十有餘霜 家曲調高遊戲場 五彩還他面師手 当軒布鼓〇〇」なる賛に、「哦 機外宗抄禪人肖像 令子求拙讀書目塞白云 天正十三乙酉年小春九葉 前大徳見龍翔明叔叡書」と後書がある。肖像は伝わっていない。
- 29 江戸初期筆、宗抄・道叱・宗治の生歿年月日書付 一通
豊俊筆か。小次郎権守に関する書付一枚を封入。
- 30 江戸初期筆、永禄十一年親世小次郎宛下知状(三7写し) 一通
31 文化六年七月、清光院円巖筆親世新九郎あて「証券」 一通
高波月鼓(宮増親賢)二百五十回忌永代祠堂料五両の領収書。大徳寺琳光院の塔所が清光院らしい。
- 32 天保十三年九月、清光院納処より親世新九郎あて書状 一通
先住融山和尚一周忌法要の通知。菓子一折遣す由など加筆。
- 33 十四日付、親世様あて細谷「舌代」 一通
書道の師らしい細谷から筆進上の挨拶。31〜33は同包。
- 34 豊成筆、親世家伝来角木金紫銅花入に関する書付 一通
35 同右 一通
右二通同内容で一方が他の影写。宗抄以来の家伝の道具で茶道の大名物だった花入に関する書付で、形・寸法、山上宗二記の抜書、利休の宗抄あて花瓶裏美之状(箱書)写しなど。34の包紙に豊成が弘化年中に酒井若狭守へ三三〇両で譲った由を加筆。
- 36 天保四年十二月十日付、親世が寛松あて永原貞書状 一通
新三郎と改名認可の通知。永原は加賀藩の役人であろう。

- 37 江戸中期筆、清次以来親世家系図 一枚
釣書(朱入り)の形で元祖清次以来の親世大夫家・小鼓親世家の系図を美濃版縦形一枚に書入れ、傍流の宝生大夫家や太鼓金春家の分も加える。親世大夫は十三代重記及びその子、小鼓親世家は八代豊恭、宝生大夫は友春及びその子まで。享保頃の筆であらう。若干加筆があるが一筆らしい。
- 38 江戸中期筆、清次以来親世家系図 二枚
37を縦二枚続きの紙(今は剝離)に整理して書き直した形。同じ朱入り釣書で、37と同筆。後に加筆少々。
- 39 江戸中期筆、鼓親世家・太鼓金春家系図 一枚
縦の美濃紙二枚続き。墨筆釣書。音阿弥から書初め、小鼓親世家は権九郎豊房まで。世代は早い。37・38より若干後年筆か。
- 40 明治中期豊好筆、清次以来親世家系図(37の写し) 一枚
41 明治中期豊好筆、清次以来親世家系図(38の写し) 二枚
42 明治三十六年十月豊好筆「宮増家系図」 一枚
美濃版薄葉紙。初代親賢以来十四代豊好までの朱筆入り釣書系図。題記下に「明治卅六年十月 調査訂正シテ記ス 宮増豊好」とある。
- 43 明治三十六年頃豊好筆「服部家系図」 一枚
初代信光以来十代小錦治まで。42と一対で同書式。以上37〜43の七点は五9・10に挟みこまれていたもの。
- 44 江戸後期筆「催花額」模写(二1の影写) 一枚
45 江戸末期筆「親世果葉履歴」首都模写 一通
袋には「古系図序文直写」と題す。親世宗家所蔵本の影写か模写らしく、虫損の跡まで写す。元清の項まで。

- 46 宝永末年頃筆、親世家歴代法名等写し 一通
墨付二丁の仮綴本。大徳寺の琳光院または清光院の過去帳及び位牌に記録された十三人(宗揚・宗節・紹活を含む)の法名・俗名・忌日等。宝永四年歿の新九郎(豊房)が最後。一名は家僕。
- 47 江戸後期筆「先祖霊名録」 一通
雲母模様の入り料紙。信光から矩豊まで九代と親賢・長俊・元頼の実名・法名・忌日・行年を列記。袋に題記。
- 48 江戸末期筆、先祖墓碑銘写し 一通
乗願寺の石塔五基、誠心院の石塔三基の模写(碑文も写す)と、瑞光院の11名分列記の位牌の忌日・戒名。天保11年以後の書写。
- 49 文政九年八月廿七日付、親世九郎あて清林寺書状 一通
靈麟院(豊勝道叱)二百回忌法要の形態についての返答。
- 50 江戸末期筆「宮増家系図」(未完) 一通
51 二月廿日付、親世権九郎あて千秋彦右衛門書状 一通
文政八年のもの。別家の親世惣三郎豊起が同年二月七日に平戸で歿した後の葬儀等に関する報告。千秋は平戸藩の役人。法名書一枚を同封。
- 52 文政十一年十一月廿三日出生「啓」命名書 一通
53 嘉永四年四月廿一日出生「鈔太郎」命名書 一通
両通同筆同包。53に「小泉大内蔵書」と署名。啓は豊成の妻直の初名。小泉はその父で芝神明宮の神主。鈔太郎は豊好の初名。
- 54 江戸中期筆、親世家歴代忌日・法名・行年書付 一通
清親までの親世家歴代の名もある。宝永四年歿の豊房まで。
- 55 江戸後期筆、小鼓親世家系図 一通

- 未完。俊増大夫から豊勝まで。釣書と略歴。
- 56 明治初年筆、小鼓親世家歴代夫妻忌日・暮地等一覧 一枚
野紙。代数・姓名・相続事由・幼名・通称も記す。
- 57 江戸後期筆、誠心院・乗願寺関係戒名・忌日書付 三枚
も一通のもの。享保十三年歿の人まで子女を含む31名分。
- 58 安政三年筆、乗願寺関係戒名・忌日書付 二枚
京都岩井七郎右衛門より送付の由、豊成書付。57と同内容で
先後関係不明。59とコヨリで一つに綴じてある。
- 59 江戸後期筆、瑞光院よりの法名・忌日書付 一通
親世左吉方の人を含む13名を過去帳から抜書きしての報告。
- 60 安政三年筆、誠心院・瑞光院に関する書付 一通
58と同じく岩井からの文書。両院についての現状などの報告。
- 61 豊成筆、菩提寺に関する書付 一枚
- 62 江戸末期筆、小鼓親世家歴代夫妻忌日・法名書付 一通
信光から豊紀夫妻までと宮増親賢の分。
- 63 江戸末期筆、鼓親世家歴代忌日・法名書付 一通
草色料紙。信光・元供から豊紀までと、惣兵衛家の三代分。
- 64 豊成筆、宮増弥左衛門画像裏書写し 一枚
- 65 豊成筆、宮増弥左衛門親賢に関する書付 一枚
大蔵九郎能氏と大内義興・義隆に関する考証も含む。
- 66 豊成筆、宮増弥左衛門親賢の墓に関する書付 一枚
- 67 慶応二年刊「年数早見」 一枚
- 68 江戸末期筆、親世座与五郎国広に関する書付 一枚
- 69 慶応三年豊成筆、親世大夫歴代歿年よりの年数書 一枚

一四 明治期諸書付

書付類その六

- 1 明治二年五月八日付、奈良府請取証 一通
親世又次郎あて台徳院朱印状一通と親世新九郎あて替地之書付
一通とを小太郎豊好が奈良府へ納めた際の請取証。当時奈良下
向中の豊好が金春式部経由で提出したらしく、宛名は金春式部。
- 2 明治元年八月十一日付徳川家御暇之節「御印鑑」写し 一通
- 3 明治三年三月十日帰藩之節「御証印(三人扶持)」 一通
- 4 同年三月八日付、親世新九郎あて静岡藩復籍掛呼出状 一通
右三通一括。包紙に豊成が由緒を書付。静岡移住直前の文書。
- 5 (明治四年)正月付、親世新九郎あて調所呼出状 一通
- 6 明治四年正月「増御扶持被下候御書付」 一通
六人扶持に増す由の書付。右二通一括。2と6は同包。
- 7 明治五年八月付、豊成隠居・豊好家督相続願並許可書 一通
願書に「願之通(印)」の許可書を貼りつけてある。
- 8 明治五年八月廿五日付、豊好あて戸籍調所呼出状 一通
- 9 明治八年四月十五日付、親世豊好「家督奉還願」 一通
東京下谷寄留の豊好から静岡県権令あて。許可書を添付。
- 10 明治八年八月廿二日付、現金公債に関する豊好願書 一通
東京府あてのものらしく、別紙の返答書を貼り付ける。
- 11 明治八年十月五日付、宮増豊好書付(現金公債関係) 一枚

- 70 江戸後期筆、恭豊以後系図 一枚
釣書に加注。豊照の子まで。女子を含みかなり詳細。豊成加筆。
- 71 江戸後期筆、清親以降の親世大夫家系図 一枚
釣書に加注。清春(清宣)の子まで。女子を含み詳細。豊成加筆。
- 72 江戸後期筆、清親以降の親世大夫家系図(前本の草稿) 一枚
- 73 豊照筆(豊成加筆)下掛り宝生流系図 一枚
- 74 江戸後期筆「御祥月之覧」 一通
先祖39人の法名と忌日を月日順に並べる。天明頃のもの。
- 75 江戸末期筆、幸清次郎家四名法名・忌日書付 一枚
以上54と75の22点は一括して「墓所記録」と題した小箱に収め
てあった分。
- 76 豊成筆、自家紋所に関する「覚」 一枚
- 77 安政三年筆、宝生練三郎家「紋本」 一枚
紋二種を厚紙に貼る。包紙に豊成の書付あり。
- 78 江戸末期編「紋本」 一冊
厚紙を仮綴。紋五種を貼り付ける。十二本矢車紋は布。
- 79 江戸後期筆「志野流香道統系図」 一冊
116×82。袋綴。末尾部分に大蔵弥右衛門虎寛や親世新九郎豊綿
の名が見える。76と79の四点は「御紋本」と題する包紙入り。
- 12 明治八年六月十六日付、親世豊好「貫属替願」 一通
静岡県権令あて東京府への本籍変更願。許可書を添付。
- 13 明治十一年四月廿六日付、親世豊好「復姓願」 一通
東京府知事あて。親世から宮増への改姓願。余白に五月十四日
付の府知事の許可書(朱筆)を付載する。
- 14 明治十一年五月十四日付、濃泉勝三郎あて書状 一通
封筒とも。差出人不明。13の文案を別紙同封。許可決定の報知。
以上7と14の八点は同包。
- 15 明治二年筆、親世新九郎明細短冊(履歴書) 二枚
- 16 明治三年筆、親世新九郎明細短冊(内容小異) 二枚
共に役所へ提出した履歴短冊の控。16は名刺風の一枚も同封。
- 17 明治四年筆、親世新九郎明細短冊(小紙片同封) 一枚
- 18 明治七年親世豊好明細書控(短冊と二折の両通分) 一枚
- 19 明治十年親世豊好明細書(家族調書) 一枚
以上15と19の五点は同包。
- 20 明治四年六月豊成筆「各所相對替」願書控 一通
田中の松村利八と横須賀の親世新九郎との居住地交換願。
- 21 明治四年七月十七日付、田中調所許可書 一通
- 22 右同封大塚唯一郎書状 一通
- 23 明治四年七月付「止宿御割当之儀奉願候書付」 一通
- 24 同右、松村利八「為取替申候一札之事」 一通
- 25 同右、松村利八「請取申候金子之事」 一通
引越料拾両の領収書。右両通同包。20と25は同包。
- 26 明治七十九年、親世豊好あて前田定実書状 十七通

明治六年十二月に東京へ出た豊好が留守を依頼した前田定実からの連絡書状。豊好の住所は明治七年には湯島天神町。翌年は御徒町三丁目に移る。26、28は一括して袋入り。
27 明治十六年九月五日付「兄弟盟約取換之証」 一通
神奈川県土族建部磯次郎から宮増豊好あて。

28 田中戸籍調所よりの地所番付 一枚

29 明治六年、戸籍入用上納領収書 三枚

30 明治七・八年扶持米計算書 二枚

29・30とも田中戸籍調所発行の文書。

31 明治六年十二月十七日付、寄留証受取書 一通

東京府第四大区第五小区の文書。

32 明治十年六月付、親世豊好明細書控 一通

以上29、32は同包。もとは26、28と同じ袋入り。

33 明治三年三月十六日付、親世新九郎あて小泉勝富書状 一通

駕籠屋善助方よりの借錢について迷惑かけぬ由の誓約。

34 明治八年八月付、野田与八受取証(親世豊好あて) 一通

35 明治十一年六月付、野田与八借用証(宮増・宇田川あて) 一通

36 明治十五年九月付、田辺徳太郎「預り金ノ証」 一通

37 明治十七年八月付、田辺徳太郎「証書」 一通

養母(豊成二女)や妹の養育料支払いの確約など。

以上33、37は同包。1、37は内容を表に略記した紙袋に一括。

38 明治年間宮増家関係証書・届書類 一綴

仮綴。証書の現物や届出書類の控などを綴じたもの。明治12年の家屋(御徒町三丁目)売却の証書のみ豊成名義。他13通はほと

んど豊好時代のもので、戸籍関係が大半。明治33年が最終。
39 明治中期宮増豊好筆「記録」 一冊

仮綴中本。青表紙。薄葉罫紙。明治二年から18年までの宮増家関係の諸書類の控。冒頭に「明細記」と題して静岡時代の事を整理して記す。静岡関係のことは他にも経緯説明の文がまじり、

1、32や38と重複する記事もある。38・39と1376、79とは布製の紙入れ入り。

40 明治二十一年筆「親照院殿葬儀入費帳」 一冊

41 明治二十一年筆「親照院殿香奠姓名帳」 一冊

42 明治二十一年筆「寺御参詣芳名帳」 一冊

右三冊は豊成が明治21年10月12日に歿した際の葬儀関係の記録で、43・44・45等とともに一括袋入り。

43 親照院殿葬儀関係受取証 一袋

領収書六通と41の下書一枚。40、42と同じ袋入り。

44 明治十七年筆、大蔵鋪之疾病・葬儀関係明細書 一冊

大蔵虎一(狂言大蔵流家元)の母鋪之(豊成の長女。豊成宅に同居中、同年四月四日歿)の療養中の諸入費や葬儀に関する記録。

45 明治年間死歿者法号 一袋

豊成の分一枚、鋪之の分二枚、他二枚(一枚は大蔵千太郎死去の書付)。

46 大蔵千太郎内(鋪之)より両親あて書状 一通

年不明。誰かの婚礼祝賀の状。明治十年頃のものか。

47 明治十年頃、不明書状 一通

全三枚の書状の末尾を欠く二枚分らしく、宛名も筆者も不明。

55 弘化二年筆「寛」 一通

小泉大内蔵の思女啓(直の初名)が豊成に嫁した際の荷物の目録で、鏡台など25点。裏面に豊成の書付がある。

以上46、55の十点は「父母・姉妹・親族筆跡」と題した小箱に一括されていた分。

追加

(五の項)

59 嘉永二年頃豊成筆「色々おほえ書」 一冊

仮綴の中本。由緒書の写し、「元信書物目録」、「年代記」、大蔵六蔵に関する書付、「筒上中下作之事」、「当家弟子家之寛」、恭

豊筆掛物写し、歴代略譜、宝永二年本丸頼能・宝生の関寺小町あり(番組など内容雑多。明治年間の加筆も混じる)。

(八の項)

73 豊成筆「乱扣」 一冊

仮綴中本。シテ方五流の乱・下り端の段数、森田・一噌両流の笛唱歌、それに対応する小鼓手配り、宝生和合ノ乱の型付等。

天保、安政の間に書き足したもの。

52 豊好筆、題詠和歌草稿 一枚

若菜三首と曉夢三首。朱訂入り。

53 豊好筆「送額賀先生別語曲」 一枚

和歌の師との別れを惜しむ小謡。

54 筆者不明、嘉永六年八瀬・大原での詠歌十三首 一通

あとかき

昭和50年6月15日付で北海道千歳市の服部康治氏から法政大学能楽研究所に寄託された「観世新九郎家文庫」の目録を、本誌の第二・三・四号に分載した。全体の項目と、各項目ごとの点数は左の通りである。

一 道具類……………	3
二 軸物・巻子・短冊の類……………	13 (付2)
三 慶長以前の古文書……………	40
四 版本の類(冊子本その一)……………	36 (付4)
五 能楽史料の類(冊子本その二)……………	59 (付11)
六 故実書・雑書(冊子本その三)……………	35 (付9)
七 謡本・狂言本(冊子本その四)……………	20 (付1)
八 実技関係手付類(冊子本その五)……………	73 (付83)
九 元信関係書付(書付類その一)……………	25
一〇 故実・道具関係書付(書付類その二)……………	28
一一 芸事関係書付(書付類その三)……………	94
一二 能楽史料書付(書付類その四)……………	49
一三 領地・家譜関係書付(書付類その五)……………	79
一四 明治期諸書付(書付類その六)……………	55

括弧内に数を示した封入文書をも加えると、総数七一九点に及ぶ。移管時の概算より大幅に増加したのは、目録作成の段階で仮目録に一括してあった分をなるべく細分したためである。一四は

一三を含めて差支えないものであるが、番号が三ケタになるのを避けてあえて分離した。

目録作成のための調査の過程で、第二号収載の『観世新九郎家文庫』解説“の中に述べた同家歴代の事績に補正すべき点がい

ろいるあることに気付いた。宮増豊好の妹「くら」が生涯結婚しなかったとしたのもその一例で、一四38によれば彼女は明治九年に野田与八と結婚している。明治十四年には姉「ゆう」の次男了輔を養子にしてともに豊好宅に同居しているから、早く不縁になったか夫に先立たれたかしたらしい。後に石浦通宏氏が入籍して宮増姓を嗣いだのがその「くら」の家であった。

なお「観世新九郎家文庫」は昭和50年12月から一般に公開されている。前号所載の表章の論考が五22・30・40等を活用し、日本庶民文化史料集成第三巻『能』(昭和53年6月、三一書房刊)が、『享保六年書上』の底本に五20を、『猿楽伝記』の校合本に六16・17を使用しているなど、学界での利用も始まっている。目録掲載がその傾向に拍車をかけるであろうことを期待している。